

---

# 学園世界！

新殿 翔

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

学園世界！

### 【Zコード】

Z6479K

### 【作者名】

新殿 翔

### 【あらすじ】

この物語はつ、ぴっちぴちの女子高生、私こと緋色ちゃんの日常をつらつらと綴つた平和な学園モノである！ というウソ！

実際には一般生徒が対大陸魔術を連発するような学園に通うすーぱーでらつくす（笑）百合ふあんたじー物語であるつ！ ででん！

とりあえず高望みはしちゃいけないと思いつつも回りの可愛い女の子に目移りしてしまいますぜ？ 美少女のためなら誰であろうとぶつとばーす！

## 私の名前はつ！

田の前に、トラックが迫っていた。

人気のない、暗い夜。

ガラス越しの運転手の顔は真っ赤で、しかもぐつたりとしている。

酒気帯び、ついでに居眠り運転だ。

……つわー。

部活で最後まで自主練するというこの努力家な私への報酬が不幸とは、なかなかまたやるじやねえか運命とかそこいらのやつ。

まあ自主練つても文芸部ですが。単に小説の執筆に夢中になつていただけですが。なにか？

ちなみに文芸部つて聞けば通りはいいけど、実際にはたんなるラノベ愛好家の集いです。私部長だつたり。つまりあれですね、オタク代表。いやいやラノベ呼んでるからオタクとは限らないか。

むしろ今オタクつて聞いて根暗想像したやつ前に出る。文武両道なわたくしが鉄拳による愛の鞭 いや間違えた拳だった をお見舞いしてやる。

大丈夫、癌とかは残らないよつに秘密のレッスン風味でお送りするから。

ちなみに今年の新入生に配られた部活案内の冊子で、文芸部の勧誘文句は『ビタミン♪』。この単語にぴんときたら入部!』だつたり。ビタミン♪わかる?

いや、いいよね美少女同士の絡みつて。

むちむん『美』がつゝー」とが最低条件なのは言つまでもないね。  
おつと話が逸れた。

ははは。暴走トラックを田の前にしていつも平然としている  
私を褒めてくれてもいいんだぜ、神様。

あ、なんなら転生とかいう選択肢もオッケー。むち、チートじゃ  
ないと、嫌ですけど。

そんなこんなでこう、私がトラックとキスするのまであと数秒つ  
てかまあ多分一秒未満。

ふむあと何か考えることはあつただろうか。

そうだ、走馬燈を見よつ。

生まれた。育つた。オタクつた。高校一年生とある夏の夜、  
私にトラックが猛烈な求愛行動。

やべえどつしづつもう終わっちゃつたんですねび。

そのくらい平凡な人生だつたつてことですね。ええ。平凡万歳!  
嘘やつぱり非日常もいい。ファンアンタジー最高!

つてむごとなトラックと勢いよくフュージョンあ悪いミスつたテ  
ヘツ、みたいなノリでじつはしちゃう非日常は特に求めていな  
いけど、あれもしかしてこれって好き嫌い。そつだよね好き嫌いは  
良くないよね。

よつしゃかかつてじつトラック。

だが逃げるなら今のうちだぜ。私の総重量は四十五キログラムと  
スリムさだけにはちょっと自信があるので貴様なぞ逆に轢いてやる  
わ。嘘だけど。やべえラノベのキャラの口癖パクるとか私超イタイ  
ぞ。

だがあえてこれからラノベのキャラの口癖をパクつていいく所存で  
ある。まあこれからという先があるかどうかはマジ不明。

ちなみにスリムをイコールで美形と結びつけるのはどうかと私は  
思つ所存でござりますオホホホホ。

さてはて……あ、間違えた。

はてさて、ところでトラックさんやい。そろそろその熱いキッス  
で私をとらえてはくれないのかい？

さつきから私は緊張の余り目をつぶつけてるんだが。目、開  
けていいですか？

でも目を開けて目の前に目があつたらビックリするじゃん。

んー、でも流石にそろそろザ・ワールドといふ言訳も出来なく

なってきたね。何秒時間を持てている私。そもそもこいつスタンディングでござめた。

よーし、じゃ、田を開けるよー？

いーち、にー、わんわ。

ふおひ。

やべえ今、私は世界の中心にいるー。

冗談。

いやあながら「冗談でもないかも？」

「うーん、まあそれは置いておくとして、とりあえず「冗談」いやだから「冗談さん（年齢不詳）、そういう転がっていてください」と。私が大切なことを覚えてるので。

さて……現状を整理しよひ。

トライックに「お前を、愛してる」と言われた。まあ多少の脚色には田を喰つてよ。

そんで私はこう答えたわけさ。「貴方のタイヤの跡を私につけてつー」いや私マジでじやねえよ。ってかそれ跡付ける前にミンチだわ。もしくは安いホテルの朝のバイキングで出る水気たっぷりなスクランブルエッグ。

そんで、まあよくよく田を凝らしてみたら、おやじついたことか。

私、真っ白空間に立つてます。

リーダー？

私、こんな歳で迷子とかマジ恥ずいんですけど。ひやつぽうい！

『大丈夫よ、私がいるから迷子ではないわ』

おんや？

後ろを向く。

おやおやおや。

セヒニ、まあなんていつか、いましたよ。

銀の髪を長く伸ばし、ポニーテールに纏めた女性だ。瞳は見たこともないくらい綺麗な蒼で、その身にまとう黒いドレスはウエディングという単語を前につけていい感じのもの。んで、背中からは白い翼が六枚生えてる。

翼が生えてることにはとりあえず沈黙を通すことを決めて、総評。

絶世の美女。もしくは傾国の美女。後者は若干悪役寄りになります。

『なら、絶世の美女でいいかしら?』

鈴の鳴るような声で、その人が笑んだ。

「おおう……」

なんだ思考が読まれてるのか。

『ええ』

テンプレだな！

なら私はこう返さざるを得ない。

この頭の中の不法侵入者！

『口に出して喋ってくれるなら、もつ思考は覗かないわ』

『なら喋りつ』

これ以上頭の中身を覗かれたまでは私の過去が赤裸々にバレてしまつ。

『あら、ならもう少し覗いていようかしら』

「もう覗かないといつたその口をホッキキスでとめてしまえ」

『冗談よ。本当にもう止めたわ』

バーカバーカ。

『……』

「……よし」

『まあ何を考えていたかは予測できるのだけれど』

「なつ、これでも近所では寡黙で無表情で氷のような美しさを持つ  
むしろさつさと石になってしまえこの野郎いや私は野郎じゃねえし、  
というこの私の思考を予測するだつて！？」

『楽しい子ね』

そんな評価のされ方は久しぶりです。

「それで神様ー」

『私は神様ではないわよ？』

「え、そなの？」

てつきり神様かと……。

「じゃ、天使？」

『いいえ、一応、人間ね。知り合いはもう誰も私を人間という扱い

で見てはくれないけれど、悲しいことにね』

「背中から翼生えてる人がいたらおそらく私もその人のことは人類のカテーテリーから外すよ。」

「まあ、じゃあ神様」

『そう呼びたいのならば構わないけれどね』  
「チート能力付けて異世界転生よろびくー!」

よろびくつすげえ昔の言葉じやね?

『貴方は本当に面白い子ね。』『いついう場面でそんなリアクションをしたのは貴方が初めてよ』

「アンチ・マジヨリティな人間なので」

カラスが白と言わると黒くしたくなる。実は世界のカラスが黒なのは私が全て黒く染め上げたからなのだ。

まあでもぶっちゃけカラスが何色だろ?が気にしないけど。うん、なんだこの思考。不毛だ。

『まあ、混乱していないなら話がしやすくて助かるわ』  
「めっちゃ混乱します」

ほれ、私の心臓止まつちやつてしまふよ。もつとも嘘だけだ。

でも少なくとも今すぐここでも「不幸だーー。」と言へるへりこは  
混乱してますね、ええ。

『貴方に、一つの選択肢があるわ』  
「素敵に無視する貴方が大好きですー。」

『あら、本当? ありがとう』

無視しちゃ。

そんな笑顔向けてきやがつて、ちよこじドキッとしたじや  
ない。

『一つは、このまま元の場所に戻つて、あのトラックに轢かれて万  
事問題なく死んでしまうか』

問題あつまくつですね。

『一つは、何年かを異世界で過ごすか。その後は、上手くやれば元  
の世界に戻ることも出来るわ』

『せんせー質問』

『はーどうだ』

おい今その教鞭どこから取り出した。

「チート性能はつけてくれますか?」

『はつきり言つて付ける必要がないわ』

「へ?」

なんだと?

つまり異世界でスライムに殺されると?

あるいはあれですか? エッチなイベントを起こせと? くそう  
スライムが初体験なんて流石に御免こうむる。

『勘違いしないでね、なにも見捨てよつと言つのではないのよ?』  
「だつたらどういう腹積もりだ』

『貴方、もう魔術の才能とかがそのままでも凄いのよ。だから、普通に勉強したら、すぐにチートになれるわ。そういう人間だからこそ、こうして私がすくい上げようとしているわけだし』

「ナ、ナンダツテー!』

生まれてこのかた十何年。自分にそんな才能があつたなんて!

でも中学の頃にS-L-B(とある魔王の大砲撃)を撃てないか超真剣に試そうとして使えなかつた覚えがありますよ!

あれが、デバイスがなかつたのが駄目だつたんか。

『そして、貴方が行くことのできる異世界は、学園世界。様々な世界から、才能がある子達が集まる世界よ』

「そんな世界があるんだー」

『ええ』

学園都市ならぬ世界とは、スケールでけえぜ。

『それで、どうする？』このまま平凡を愛して終わるか、非日常に飛び込むのをよしとするか

「一つ訊きたいんだけどさー、その学校つてどうこいつ目的で存在しているの？』

『表向きは、有能な子を見つけて、天界の仕事に就かせたり、違法な行為をする悪魔を取り締まる組織に入れたりと、まあいろいろね。普通にそういう仕事に就かずに日常に戻る子もいるわ。あと、稀にだけれど他と比肩しない程の能力の持ち主は神様に新しく世界を作つてもらつて、その世界の管理人にしてもらう子もいるようね』

世界の管理人とかなにそれ超楽しそうじゃん。それ以上に面倒くさそうだけど。

「へー。で、裏は？」

『私の趣味で作ったのよ。ちょっと私の愛する女の子達に制服を着せたくて、それをデザインしたついでに学園を作ったの』

「Jの人、百合な人でしたか。ヤツタネ。

つていうか制服のついでで学園とか普通逆でしょ!。そういう正当なツッコミは今はすべき時ではない気がするので自重。

「ちなみに私はどのくらいのレベルに到達できます?」

『世界の管理人くらいなら余裕ね』

「マジか……」

やべえ野望が今から広がる。

「よつしゃじやあもう決定ですね異世界レッヅジャー」

『本当にいいの?』

「ここまで行つて私が行かないといつ選択肢を取ると思つてるんですかコー?』

『まあ、そうでしょうね』

まつたく人が悪いぜ。トラックと一夜限りで燃え尽きるような抱擁を交わすか、世界の管理人も進路に含まれる学園ですよ?.

悪い、トラックさん。私ビジネスに生きる女だからアンタとのラヴもこれで終わりだわ。

『それじゃあ、早速行つてもらひおうかしり』

「イクー。」

なにがとは言わない。

『ふふつ……それじゃあ、頑張つてね。名前、聞いてもいいかしら？』

「知つてんじやないの？」

『それでも、本人から聞きたいのよ』

意味が解りません。ですがまあ聞かれたのなら紳士として答えましょう。淑女だけど。

「棘ヶ峰。棘ヶ峰緋色おじろがみね」

そしてわたくしの非日常のスタートボタンが押されたわけさ。

## 私の名前はつー（後書き）

一年明けてのエイプリルフールの嘘を真に変える！

去年の嘘が嘘になりました！ ということで今年のエイプリルフールは完遂ですな。

その出来事につづく

意識がいきなり切り換わる。

……おひつ。

「……おひつだな。

辺りを見回すと、果てが見えないくらい大きな草原にぼんやり突つ立っていた。なにこれ孤高の旅人設定とか思つたけれど、別に孤高願望はないのでそれは却下。

やっぱお友達とキャツキヤウフフするのがいいよ。うん。

ちなみに果てが見えないと先程申しましたが実は遠くの方に街が見えてたりします。嘘ついてごめんなつ。

いやまあ街が見えるつていうのが嘘つていつのもまた嘘であり、つまり本当にあるわけだけれど。

とりあえず、あれだね。

私は無事、学園世界とやらに到着したっぽい。

「……なんだ」

ちょっと拍子抜け。

てつあつこじうこじう時はテンプレ的に空から落下するものとばかり思っていたのに。まあ、どうやらチート能力の付加はされなかつたらしさいのでそんなことされたら死んじゃうけど。

「とりあえず、あの街を田舎せばいいのかな？」

今のところ人がいそなのはあそこへらいだし、行くしかないだわ。

それともまさかこじで、街とは正反対の方向に行くと言つ冒険ルートを歩んじゃつもつですか？

それもいいかもしない。でも十中八九それは難易度エクストリームなので止めておこう。

ごめんね、テンション高くって！

誰に謝ってるんだろ私。

普通に街に向かおう。

草原を歩きだす。超、緑臭い。

都会っ子に自然は最早毒だね。

歩きながら、これからのことを考える。

「これは異世界だ。自分の身の振り方いろいろ考えないと、これから先苦労することは明らか。」

私は人生ベリー・ベリー・イージーがいいからね。『うとうといは』念入りに行くぜ。

まず第一に、自分の身分。

とりあえずこの世界はあの神様っぽい人が言つには『』は有能な人間をいろんな世界から集めたと『』らしい。

であれば、まあ私も外の世界からウヨルカムしました、って告白しても平氣だよね。

これが神様の手違いで殺害からの転生モノの異世界ならそういうことを下手に『』ぼすのは危険だけれど、『』じやあそれがスタンダードなわけだし。

街についたら『新入りの棘ヶ峰DEATH』って言えばいいか。少なくとも即座に首ちょんぱといふことはないだろ？

首ちょんぱとか懐かしい言葉だなあ。

私が最初に作る必殺技は首ちょんぱにじよつ、とか馬鹿なことを考へる。いやしないけどね？

さて……それで私は何を考えていたんだったかな。

いけないねえ最近物忘れがひどくって。寄る年波には勝てませんよ。まだぴちぴち十代じゃ私は！

十代のオツムが思い出す。私が考えていたのは そう！

あの街についたら、どうするか、だ。

ででん！

よし思い出したぜ！

この世界は魔術とかの才能がある人を集めてるわけで、しかも名前が学園世界つていうくらいだから、まあ学園はあるだろうねえ。

私はそこに入つてスタディすればいいわけか。

嫌だなあ勉強。

でもまあ魔術の勉強なら構わないか。数学とか英語とかはないよね？

あつたら暴動を起こしてやる。

学習をするとして私はかなり強くなれるらしいですがー、実際どのくらいのことなら出来るんだろ。

そもそも他の人はどのくらいなんだろう？

まだ、平均的な数値すら知らないからなあ。

ようはこの世界についての常識を学ぶまでは何にも出来ないってことか。

早くあの街行かないとなあ。

走るか。

走つて、背中に「僕達の旅はまだまだ終わらない…」とか書いておくか。うは、それなんて打ち切り。

私がいる時点で打ち切りなんて一十年はないね！　いやごめん調子乗つた今のところスルーでヨロ。

「……にしても、遠いなあ」

街まで行くの面倒臭い。これ日が暮れるんじゃないだろうか。

異世界の草原で、夜一人ぼっち。

なにその展開すげえロマン感じるよつて感じない。

モンスターとかいて、襲われたら……ぐふふ濡れときちまつぜ。  
おつと下品発言は血重。

そもそもモンスターに襲われて誰が濡れるんだ馬鹿野郎！

私の初めてはやつ簡単にはくれてやうねえぜ？

……ぐだらないこと考えてるなあ、私。

「ひひ、この時間が大好き！」

あ、どうでもいいですか。そうですか。

いじけちゃうぞ！ 謝れ！

謝罪はない。ただの一人ぼっちのようだ。

そうだよ私は寂しい人間だよう！

その場で蹲る、の「コマンド」を選択。私はこのターンずっと蹲つて  
いるぜ。

「……どしたの？」  
「話しかけねえでくれ。私はこいつして蹲らなくちゃいけねえんだ  
！」  
「……そつか。てっきり新入りさんかと思つたけど、違うのかな？」

新入り？

「オイラは生糀の江戸っ子だぜー！」

もち囁

「へえ……」

……あれ？

私あ、一体誰と喋つてるんだ？

顔を上げる。

そして……見た。

黒くて長い髪をサイドポニーにまとめた、もつ毛じりれんへりー  
可愛い美少女を。

「お嬢さんのお名前を聞いてもっ。」

「お嬢さんと想わず私の紳士タイム。」

「え？ ナコタだけ？」

「ナコタさん。ああ、素敵なお名前ですね。よかつたら結婚を前提  
にお付き合いでしましよう。」

「この世界、同性婚アリだから、それ冗談じゃ済まなくなるよ。」

「…………おおへ、マジですか？」

同性婚アリとは、なかなかやるじやねえか。

## 「本当に結婚、する？」

にこり、と。彼女が私に笑いかけてくる。

**効果は抜群だ！**

「いいんすか？」

たが断る

**大ダメージ、私は倒れた！**

そんな笑顔でなんてエグいことしゃがる。

八九

驕されちまつたせ。

だが、そこに痺れる憧れるう！

「で、実際あなたは新入りさんじゃないの？」

と見た覚えがなしこれど」

新入生

「やつぱりね」

彼女が苦笑する。

「ええと、ちなみに、ナユタ……さん？」  
「ナユタでいいよ」

それでは改めて。

「ナユタ。街って、あれのことだよね？」  
「うん。この世界でただ一つある街」

へー、そりなんだ。

「で、その人口はいかほどなんですか？」  
「五十六万人くらいかな」

五十六万とな！？

「街で私のこと見た覚えがないって、それ当然じゃないの？」

それくらいいたら、そりや知らない人くらいいるでしょ。

「いやあ、私は学園世界にいる大体の人の顔、知ってるよ?」

「なんとなー?」

あなたはどんな記憶力をお持ちになつてているんですか。

「まあいいでしょ、そんなことは。それより、街まで案内しようつか?  
?」

「お願いしてもいいの?」

「うん……あ、でもその前に」

ナコタが私の背後を指さした。

うん?

「あれ、始末しなくちゃいけないんだよねえ」

あれって、なに?

振り返る。

……?

「なんもないけど?」

「いや、あれ、あれ

そんなこと言われても……。

とか思つていると。

バキン！

空が割れた。

「……へ？」

窓硝子割れる感じ。

でもそれよりも派手で、意味不明。

だつて空が割れるとか、ないでしょ。

割れた空が崩れて、その向いつから何か、黒い空間が覗く。

見るだけでもよつと吐き気がする。

「なに、あれ

流石の私も状況についていけない。

「んー、なんていうか、空間の歪みとでも言えればいいかなあ。とりあえず、気をつけてね」

ナコタがそう言った、次の瞬間。

鼓膜が痛くなるくらいに甲高くて大きな音が鳴り響いた。

「つ……！」

「つるさいなあ

ナコタは、言葉の割りには随分と涼しげな顔をしていた。

黒い空間から、何かが地面に落ちてきた。

割れた空が徐々に閉じて行く。

地面に落ちたのは……なにあれ。

巨大、だった。

基本的な形でいえば……人間。

けれどその脚は関節が逆になつていて、胴は異様に長く、背中からは無数の腕のような器官が生えていた。さらに頭には数え切れない眼球がついていて、口には鋭い牙がぞろりと並んでいる。前進は鉛色の殻のようなもので覆われている。

化物。

まさにそう表現すべきもの。

プレッシャーに、思わず膝が折れた。

……ちょっと待つた。

不愉快になる。

なに私、膝を折っちゃってるんですか？

ないわあ。

プレッシャーで膝を折る？

この私が？

プライドに傷に入る。

いつでも飄々と人生適当に生きる。

それがこの緋色ちやんだよ？

なのだが……これは違つてしまふ。

気圧がさるのさわあ、驕々としてなによ。

いつやあ私じやなこつて。

折れた膝を、立たせぬ。

「お?」

ナコタが驚いたよつに私を見た。

「すゞいね、あれを前に普通に立つてうれるなんて」

「余裕ですとも」

腕まで組んで、余裕アピール。

ふふん、どうだ。

マジもつ旨一本も動かせないんだぜ。

「なんてこうか、見どくあるねえ」

「見どくんだらけの棘ヶ峰緋色と布ぬですよ」

「へえ、やうなんだ」

笑い、ナユタが私の前に立つ。

化物の眼球が、一斉にナユタを捉えた。

「ちょっと、これ逃げた方がいいんじゃない？」

「ノンノンノン！ これ倒すのが私への依頼だからね。アイリストとか臣護さんとかと争って勝ちとった貴重なSランクの依頼を逃す手はないね。そうでしょ、ソウ？」

「ええ」

不意に、背後から声。

私の横を通り過ぎて、誰かがナユタの隣に立つた。

黒い髪をなびかせた、チャイナドレスっぽい服装の少女。

ナユタが今呼んだソウとは、彼女のことだろう。

いつの間にいたんだろう。

つていうか、あの……この人なんか背中に変な形した金色の輪っかが浮かんでるんですけど。

ちょっと翼っぽい形。

なかなか素敵なアクセサリー。私も是非一つ欲しいところだ。

「私のことは構はないので、ナコタ。お一人でビーフィー」「ナコタ？ ジヤ、ナコタせてもいいのよ」

轟、と風が舞い上がった。

それと共に、見えない、何か、そいつ……違和感のようなものが吹き荒れる。

「じゃあ緋色。ちょっと待つてね」

「え……あ、おつけ」

思わず答える。

ナコタが地面を蹴つた。

空高くまで……それこそ飛んでこると表現できるだけの高さまで、ナコタは飛びあがつた。

ちょっと、マジっすか。

「それじゃあ、異世界の破壊神さん。来ていきなりでちょっと悪いんだけど……退場願つよ」

ナコタの声が、異様によく響く。

「まづはその氣味の悪い腕から、かな？」

刹那。

化物の背中から生えた腕が全て千切れ飛んだ。

化物の悲鳴。

「な……つ」

今、なにが……。

「少しくらいは抵抗して見せたら？」

空が赤く染まった。

は……？

見上げれば、青かつた空は炎で覆われていた。

その炎が蠢き、一ヶ所に ナコタの頭上に収束していく。

出来たのは、太陽を思わせる炎の塊。

その熱は、離れている私の肌でも感じ取れた。

「さて、と……これで終わるか、終わらないか」

ナユタが呟いて、腕を振るつた。

動きに合わせて、炎塊が化物曰がけて落下する。

空気が蒸発していく。

常軌を逸したその灼熱を前に、化物が口を大きく開く。それこそ、裂けるほどに。

口の中に、紫色の光が灯つた。

かとおもひと、それは爆発的に巨大化し……放たれる。

一条の光線。

それは……炎を貫き、霧散させた。

「へえ」

ナユタの感心するような声。

そんな感心とかしてゐる場合じやなこと思ひナビ?

光線は炎を貫通して、ナコタに向かっている。

あんな出鱈田な炎を貫く威力だ。

そんなのが命中したら……。

「ナコタ!」

「んー、なに?」

けれどナコタは……平然としていた。

光線は、ナコタの掌に受け止められたのだ。

……はあ?

いやいやいや。

あんたそれ、ちょ、待つ……。

え、マジっすか?

「……どんだけー」

「世界の一つ一つ滅ぼす程度の攻撃くらい受け止められなくビビりするのや」

ナユタが微笑する。

えー？

なにそれチート？

バグキャラっすか。

「まあ、くすぐったかってよ、破壊神。お返しにちょっとだけ本気見せてあげる」

ナユタが私にワインクしていく。

「それと、緋色も見ておきなよ。自分で言つのもなんだけど、私も  
れでも学園でもかなり上位の実力者なんだから、今後の参考までに  
ね」

学園で、上位？

えつと……それはとんでもない」と、なんですよね？

よく分からぬけれど、とつあえず凄いことだけは分かった。

ナユタが右手を前に突き出す。

するとかの指先から、光の粒子が出た。

違う。

出でるんじやない。

ナコタの右手が、先から光の粒子に変わってるんだ……ー。

そのまま肩口までが光の粒子になつて溶ける かと想ひつい。

粒子が集まり、ナコタの右腕が再びその姿を取り戻す。

……でも、再構築前と違うところが、一つ。

ナコタの右腕が、ゆつたりとした黒い袖に覆われていた。

まるで、着物の腕の部分だけつけた感じ。

ひらりと、袖が舞う。

それに合わせるように、ナコタの背後の空間が歪んだ。

歪みの中から、何かが突き出す。

それは……槍。

黒い槍だ。

でも普通ではない。

そのサイズが。

優に百メートルは越えているであろう。

恐ろしい大きさの、黒い槍。

なんぞこれ。

驚く私を傍目に、ナユタが腕を振り上げる。

槍が穂先を化物に向けた。

化物の身体が震える。

怯えているのだ。

あんな異形の怪物が。

あんな一人の少女に。

化物が、再度光線を放つ。

けれどナユタに届く前に、光線は霧散してしまつ。

「じゃあね

言葉はそれだけ。

ナユタが腕を振り下ろす。

槍が加速した。

目で追い切れない。

音がした。

生々しい轟音。

見れば、化物の身体を黒い槍が突き刺していた。

槍が脈動する。

そして……化物の身体が弾け飛ぶ。

紫色の血液と肉片が雨のように降り注いだ。

それは、私がいるところだけ避けて地面を濡らしていく。

なんとなく、ソウって人が何かをしているのだと直感した。

「よし」

空では、ナユタが可憐な笑顔を浮かべる。

「それじゃ、帰ろうか。ソウ。それに、緋色」

なんというか、ねえ。

紫の雨が降り注ぐ中笑う彼女を、私は……。

なんか、綺麗だな、って思つちやつたんですよ。

その出版ことはつー（後書き）

とこりわけで連載開始です！

「ジジイはっ！」

おり、びっくりしちまつたぜ。

ナコタが帰らうって言つた後、いきなり地面に虹色に輝く魔方陣が浮かび上がつたんだ。まほーじんですよ、まほーじん！

ロマンのかほり！

私がわきわきしていると、ナコタが私をその魔方陣の上に移動するように促して……気付くと、私は街の田の前に立つていた。

田の前には街を囲う、十メートルはありそうな城壁。視界の端から端まで続いているとかどんだけ。

キュートな間抜け顔で私が城壁を見上げていると、後ろの空間が歪んでナコタとソウが現れた。

これ、きっとあれだよね。

転位とか、テレポートとか、そんな感じの。

なんといつ貴重な経験。

「あやーす！」

「え、なにいきなり

私の唐突のお礼に、ナユタが首を傾げた。

「なんでもない。それより、これってどうやって入るの？」

見たところ、城壁に門とかはついてない。

「いいやつで」

ナユタが腕を振るうと、城壁に青い光がはしった。かと思つと、次の瞬間細い溝が入り、スライドするように城壁の一部が地面に沈んだ。

開いた城壁の向こうに広がっていたのは、イメージ的には中世ヨーロッパって感じと街並み。

「おおお……」

入口から続く大通りには、多くの人が行きかつていた。中には角や耳が生えてたり、空を飛んでたり、異様に大きな剣を持つてたりと、様々な様子の人々がいる。

「おおおおおおおー！」

やばいテンション上がつてまいりました！

なんていうか、異世界っぽい。

しかも中世ヨーロッパな街並みの向こうには近代的なビルディングが立つてたりするそのアンバランスをもまたイイ！

「ほら、緋色。中入る」

「あ、うん」

ナユタとソウが私の横を抜けて街に入つていくのを、慌てて追う。

「それで、緋色は新入りだし、校長と理事長に顔を見せに行かない  
とね」

「校長と理事長？」

「まあ、この世界の偉い人つて認識でいいよ

「ふうん」

偉い人と聞いてひげを蓄えた老人を想像した私は間違っちゃいな  
いはずだ。

「私は先に、ギルドに依頼達成の報告をしてくるから、緋色は先に校  
長に会いに行つてよ」

「いやいやいや。会いに行けと軽く言われましてもね、どうすれば

覚えるんですか?』

「あ、そつか。じゃあちゅうと待つてね」

ナコタが空中に指を滑らせる。すると、ナコタの目の前にいきなり薄緑色の透明な板が現れた。

「お、おおうっ!」

「仮想モニター。ま、持ち歩き簡単なパソコンとも思えばこいつ

説明しながら、ナコタが仮想モニターとやらを指で何度も叩く。

モニターに通信中といつ文字が表示される。

『む。なんじや、ナコタ』

ビーバーからともなく、老人の声が聞こえてきた。

「おお……電話にもなるわけですか」

「そうやつ」

『誰かと一緒におるのか?』

「うん。さつ見つけた新入りさんとね

『まう? 新入りとな

「で、私はちょっと用事があるから、少し面倒見てもいいってこと?』

『もちろん構わんよ。それじゃあ、いつに引っ張るや』

「お願<sup>い</sup>い」

あれやこれやと、なにやら話がまともな感じ。

不意に、私の足元にまた魔方陣が浮かんだ。

「それじゃ緋色、また後でね」

「お、おおい？」

ビードルヒカル、と尋ねるよつばやく、私の視界がブレた。

思わず目を瞑る。

「へ、これはまさか、あの呪まわしき力が俺の眼を……！」

とかふざける間もなかつた。

不意に口を開けると、視界に飛び込んできたのは今の今まであった街の風景ではなかつた。

豪奢な内装の、広い部屋だ。

「よく来たの！」

「よべ来たの！」

部屋に置かれた黒い大きな机。そこで書類に羽根ペンを走らせて  
いる老人がいた。

仮想モニターから聞こえた声と同じ声だ。

「……ことは、つまり……」この人が、校長って人なのかな？

「……うわあ。

「え、なにその顔。おかしい、初対面の人間にそんなつまらなそう  
な、かつ期待を裏切られたと言わんばかりの顔をされる覚えないん  
じやけど」

「だって普通のおじいちゃんなんだもん。着てる服は結構すごい感  
じだけど」

藍色に金の刺繡が施されたローブを着た老人。

「うん、なんていうか……いかにも、って感じ。

「ここですげえ美系のお兄さんとか出てきたらよかったですのに。まあ  
それで声だけ老人つってのも気持ち悪いものがあるけどさ。

「……失礼なやつじやな」

「そんな馬鹿な。常に最高品質の礼儀を持つ私になんて言い草ですかこのクソジジイ」

「礼儀の欠片も見えない！？」

むしろやつかり失礼ではなかろうか。

思わず鼻をならしかけやつす。

「はんー。」

もとい、鼻で笑つちまつぜ。

「わしの精神にこんな短時間でよくもまあこれだけダメージを叩きこめるもんじやなあ！」

「褒めてくれてうれぢーー。」

さやはつカツ「はーとカツ」とビジ。

「いやつ殴りたい！」

出たよ暴力。

切れやすい世代ってやつですかあ？

いやでもじつちかつてこいつと耄碌して切れやすくなつたやつた感じですよねー。

「今、ひどく不当な評価を受けた気がするんじゃないが…」

「氣のせこじやないでしょ！」

「じゃないんだ！？」

「いらっしゃ御老体、そんな机を叩いて立ち上がりたつして……急な運動で倒れちゃいますよ？」

「何故こんなにも酷い扱いされなきやならんのじゃ？」

「なんか、そういうキャラの雰囲氣がふんふんするもので、ついでへつ。

「っこ、じゃないわー！」

疲れたように校長が椅子に座りなおす。

「なんだかこの小娘からあやつりと回系統の感じがする… やじや

…いやじゃあ…」

机につづふして校長が嘆ぐ。

おやおや、なにか辛いことでもあつたんですか？

「よかつたら」の緋色ちやんが相談に乗りますよ？一時間十万で  
「暴利！」

がぱり、と身体を起こして校長が叫ぶ。

「元気ですねえ」

「わわわ、もひお主とは余計な話をしていたくない！」

涙目になりながら　老人の涙目つて　校長が一枚の書類を投げる。

書類はそのまま、ひらひらと不思議な動きで私のところまで飛んできた。

ひらひら。

ひらひら。

ひらひら。

書類が私の周りをひらひら回る。

ひらひら。

「やつやと受け取れい！」

あ、これ取るの？

「やだなあ、言つてくれなきゃ分からないよ」

「流れ！ 今の間違いなく受け取る流れじゃつたろー？」

「大河の流れすらこの私は断ちきつてみせませひ」

「ストレスが溜まるうつ！」

校長が頭を抱えて身体をくねらせる。

気持ち悪い げふんげふん。奇妙奇天烈摩訶不思議な動きだ。

とりあえず書類を掴もつとして、ふと私は伸ばした手を引いた。

そのまま書類に背中を向けて走り出す。

書類が私のあとを追つようこひらひら飛んでくる・

おお……。

部屋の中を駆けまわる。

「つふふー、つかまえてー」らんなやー」

ひらひら書類が私を追つかける。

なんという意味不明のシチュエーション。

「どうやつもおもてなしの仕事は、おまかせ下さい。」

校長がどこからか取り出した杖を私の足元に投げつける。

「レーベン」

私は杖に足をとられて勢いよく地面に倒れてしまった。

書類がその私の頭の上に落ちる。

「外道校長……！」

「お主だけには絶対に言われとうないわ!」

まあ、それからおふやけはなしにしちゃう。

にしてもなにこの絨毯めっちゃ気持ちいい。ぐへへ。

とりあえず寝つ転がりながら書類を手に取る。

「コラックスしそうだじゃん……」

「エンシニア」は張り切りすぎたのか、校長は肩で息をしていた。  
まつたくもづ、「」の私と出合えて嬉しこのは分かるナビはしあわ  
あざると心臓止まっちゃいますよ。

「ええっと……あれ？」

首を傾げる。

私が手にした書類には、何も書かれてはいなかつた。

つまり白紙。

「すみません校長。御田が御腐つになつてはいやがつませんでしょ  
うか？」

「…………見つけ」

類を引き攣らせながら校長が言ひ。

よく見ひつて、そんなこと言われてもね……。

なんて思つてみると、白紙に黒い文字が浮かび上がつた。

「な、なんじや！」つやああああああああああああああああー。」

「大袈裟じやなあー。」

「あ、セリフ。」

「じゃあやつちゅうとトゲー。」

「なに」「ルー。ぬつかしきふんですかアーティー。」

れやぴれやぴ。

「……」  
「その視線止めてー。」

今自分がも痛こと思つたから。

異世界に来てちょっとあれなんだよつ。嬉しくんだよつ。

「それで、なになに…… もお」

なんてこいつか、それは履歴書だつた。

ところどころ分からぬ欄があるが、これまでの私の簡単な経歴が小奇麗な文字で紙に書かれていた。

「それにわしがサインすれば入学つて形になるんじやよ。ほれ、返せ」

「ほーら」

渡された時を真似て私は書類を校長に投げた。

ひらひらと書類が校長の手元に落ちる。

「……ふむ。問題ないのう」

軽く書類に目を通してから、校長が羽根ペンを手にとつて、書類に走らせる。

「これで入学じゃ。それと……ほれ」

私の目の前にいきなり青いカードが浮かんだ。

「なにこれ？」

「学生証じや。この世界では、そのカードが身分証明書で財布代わりとかにもなつたりするからのう。なくすんじやないぞ」

「へえ」

とりあえず懐にしまつ。

「まつたく……ここまで疲れた新入生は久しぶりじゃわい。神様で  
あるわしきこひまで疲労させるなぞ……やれやれ」

ほ?

おや、今この人なんて言いましたか?

「あのー、つかぬことをつかがいますが、あなたは校長ですよね?」

「そうじゅ」

「それで……他にも何か肩書きとかをお持ちで?」

「ふむ? なんじゅいきなり。まあ挙げるとすれば、神じゅううな

神……だと……?」

「マジっすか

「マジじゅ」

……あー。

私、神様をクソジジイって呼んじゃった。てへつ。

つべー。

つべーよ。

「……まいつか！」

「なにがいいのか分からんがとりあえずお前が失礼なこと考えているのは予想がついた」

「読心術……あの神様……じゃないらしい女人の人と同じことをしやがりましたか！」

「読心術など使わなくともわかるわい……とこりで、その女人の人って誰じや？」

「そりや私をここに連れてきてくれた人に決まってるでしょ？」

「なにを言つておるんじや？　この世界は、各世界で死にかけている才能ある人間を自動で意思確認して連れてくる仕組みになつておるんじやぞ？　そんな女人の人が連れてくるシステムじや……あ」

途端、神様の顔が青くなる。

つていうか、それならあの女人の人って何者？

「まさか、あやつか……！」

神様が冷や汗すら流しながら呟く。

「あやつって、誰？」

「む、小娘……お前、まさかあやつの手先……あやつが自ら拾いに行くなよ、どれほどの厄介の種なんじゃ！」

びしひ、と神様が私を指さす。

いやいや。それはいつたいぜんたいどひこひことありますか？

私が厄介の種だなんて、この純真無垢の塊のような緋色ちゃん相手になにを言いますか。

「要警戒じゃな！」

神様に警戒されるとは私もなかなかやりますね。

なにをやつたんだりつへ。

「どう、どうこひ」となの？

「ひつさいわい！ もうわし、お主には関わらん！ 他に丸投げする」とに決めた！

あれ、今私神様の職務放棄発言を聞いたような気が……。

そもそも私に詳しい話を聞かせてはくれないのでしょうかね？

……もつ老人の戯言と思つておけばいいか。

「お久しぶり、校長。緋色を迎えたよ」

ふと、部屋にひょっこりとナユタが入ってきた。その後ろにはソウもいる。

「はやくこの小娘を連れて行け！」

涙目になりながら神様が叫ぶ。

「なにかしたの？」

不思議そうにナユタが尋ねてくる。

「さあ？」

私にも一体全体何が何やう。

「はやく出て行かんか！」

「……とつあえず、じゃ あ次は理事長にでも顔出しへ行こう。」

「理事長……」

校長が神様なんだよね？

それじゃあ次はなんだ。

理事長は魔王とか？

あはは、まさかねー！

「…。  
というか魔王なんて神様の敵みたいなものだし、いるわけないか

とか思いつつも一応確認。

「理事長ってもしかして魔王とかだったりー？」

「まさか」

ですよねー。

「理事長は魔王じゃないよ。まあ、教師の中には何人か魔王が混ざってるけどね」  
「あ、そなうなんだ」

なんでやねええええええええんー！

平然として内心で泣かれて、シルバードをあわせこむる高等手

魔王つて……え、いるの？

世界。 神様と魔王が同じ職場に……あなどれない。あなどれないぞ学園

しかも何人かつてことは魔王複数！

とんでもない。

「じゃあ理事長ってどんな人なの?」

## 興味本位で尋ねる

「綺麗な女人だよ」

おお。それはナイスな情報。

「いやあすぐにでも会いに行かないとね！」

「それじゃあナコタ、案内ようじへー。」

「急にやる氣出し始めたね？」

「そりやねー！」

考えても見てよ。

「こんなじじ 校長 やっぱじいと綺麗な女人なら、私は  
後者と会つほうが楽しみで楽しみでしかたないよ！  
「わざと行かんかああああああああああああああああ！」

校長に追いやられるように廊下を出て、綺麗な赤い絨毯がひかれ  
た廊下に出る。なんか置いてある調度品とか見るからに高やつ。

「それじゃあ、案内ついでに歩いていい？」「

「オッケー。よろしくね、ナコタ」

「うん」

## 理事長はっ！

「リリは学園世界の中心にある建物で、通称は校舎」「そのままの名前ですね」「まあ分かりやすいのが一番だからね」

ただ、校舎と言つてもその内装は私の考える校舎とはかけ離れていた。

いかにも高級そうな石材で組まれた建物。地面には赤い絨毯が敷かれ、あちこちに高そうな花瓶とか鎧とか絵とかが飾られている。

「ちなみに今いるのが職員区画。教師の人達の私室とかがあるところ。他にも学生が勉強する教室区画とか、部活区画、運動区画、研究区画……いろんな区画があるんだ」「へー」

ナコタの説明を聞きながら歩いていると、行く先に大きな扉を見つける。

なお、ソウは私達の後ろを音もなくついてきている。なんか黙する女って感じでかっこいい。

求婚しちゃおつかなあ。

「ソウはあげないよ」

「私の主は決まっていますので」

二人に同時に言われた。

……また心を読まれたんだ。

「ここにプライベートはないのか」

「欲しいなら心を読まれないスキルを身につけないとね」

「……了解しました」

つていいってもどうすればそのスキルは手に入るのだろう。

あれか。滝に打たれてみたりすればいいんか。

「そういう手段もあるナビ

「あるんだ！」

でも私そんなの絶対やだよ！

あれ冷たそうだし痛そうだし！

ああでも女の子が白い装束来て滝に打たれて濡れた布が透けてウフフアハハみたいな展開はいいなあ。

「思考が飛躍しそぎじゃない?」

「自分でもそういう思ひ」

冷静になれ私。

とりあえず液体窒素ぶつかけられたってくらいクールになれ。

ぶつかけて、H口くない?

どうでもいいか。

「まあH口こよね」

「まあかの反応!-?」

そして同意された。

きやーつ、同志ー

「抱きつ」

抱きつこむ。

「えい」

むしろ逆に抱きしめられた。

「おおうー。」

思いもしなかった反応にとびきりだ。

「あれ、そっちから抱きついてきたのに。なんかズルくない?  
「ズルいつてなにが?」  
「そうやって思わせぶりな態度ひとつになると、食べちゃうぞー?」

「こりとナユタが笑う。

「じきん!」

って感じで心臓が高鳴る。

ズルいつてナユタの方が百倍ズルいと思つんだよ。

だつてそんな笑顔向けられたら、ねえ?

「じゃあ食べられちゃおつかな?」

「え、いいの?」

きょとんとした顔をした次の瞬間、ナコタが田を細める。

「じゃあ、あとで私の部屋に来る？」

「うぐ。

流し田……だと……？

反則。

チートですかあなたは！

きっと魅力EXとかいうステータスを持つてこむに違いない。うん。この胸のどもどもせいたのせいだ。

「…………やべれどです」

なんかこのままじゃ「冗談じゃなくヤバい雰囲気に持ちこまれそつなので話題をカットしておぐ。

チキンな私を許して皆ー！

皆って誰だ？

いけないな。最近変な電波を拾つ回数が増えてきた気がする。

「で、なんの話だっけ……あ、心を読まれないよひとするには、つて話か」

思い出して、ナユタが仮想モニターを出す。

「そういえばそれ、どうやつたら使えるの？」  
「緋色ももう使えると思つよ。この世界に来た時に自動的に配られるから」  
「え？」

まじで？

「現れる、みたいな」とを念じてみて？」  
「おおう？」

現れる……次元の扉！

扉サイズの仮想モニターが現れた。

思わず硬直する。

「えっと、なにせつてるの緋色?」

「悪ふざけがすきました」

小さくなれ、と念じるとモニターが手のつサイズになる。

これこれいくらなんでも小さくなりすぎでしょ。携帯電話ですか。

もう少しこ大きく……で、よつやくホームページパンコンサイズくらいになると。

「わむ。

「便利だ!」

「でしょ? グラセならソリド検索してみようか」

「検索?」

「うん。検索エンジン起動してみて? リンのボタン」

ナコタが横から指で差してくれたボタンを押すと、モニターの中に細長い枠が現れる。その左端にはバーが点滅している。

「検索方法は思考直結にしておいたほうがいいよ?」

「思考直結？」

「うん。考えただけで検索してくれる機能。時々間違った検索とかするけど、便利は便利だよ」

再びナユタの指示通り操作して、思考直結機能とやらをオンにする。

すると、モニターにびっしりと検索結果が表示された。

ヒット数十万越えですか……どこまで調べてるんだ。

とりあえず結果の中から一番それっぽい『心を読まれないスキルを習得する』のページを開いてみようかな、と考えただけでページが開いた。

すげえこれ。どんだけ便利？

表示されたページには、でかでかとした文字が。

『試練ナンバー二〇一九をクリアしやがれ、この豚野郎！』

……。

「え、なにこれ。いじめ？」

泣いちゃうよ。私泣いちゃうよ？

「違うよ。乱暴な言い方だけど、正確な情報」

ナコタが苦笑する。

「この学園世界には試練システムってのがあってね。ゲートって呼ばれる機器を使って特殊な空間に入ることが出来るんだ。その空間が全八千万種類で、それぞれクリアするとスキルや技能が手に入るようになってるんだ」

「八千万つて……つまりそれだけスキルとか技能とかがあるってこと？」

「だね」

「……コンプは諦めた方がよさそうだ」「諦めちゃうの？ 案外簡単だったけど」

「へ？」

あれ、今の物言いつて……。

「ま、まさかとは思いますが、ナコタさん？」

「うん。なに？」

「コンプ済みですか？」

「さあ？」

ナコタが微笑む。

その意味深な微笑みに、背筋がちょっとだけ冷えた。

八千万種類コンプつて……出来るものなのだらうか。

「まあ試練システムで覚えられるスキルなんて大したものじゃないけどね。せいぜい大陸一つ消し飛ばしたり出来るようになるだけだよ」

「すみません大したことあるんですけど」

やひりひととんでもないこと言わんで下下さい。

「よひは数より質だよ。うん……で、着いたよ」

気付けば、やひりを見つけた大きい扉の前に辿りついていた。

近くで見るとさらりでかく感じる。

「I.IJが理事長室?」

「へへん、この扉はね、校舎のいろんなところに移動できるんだ。行き先を想像しながら開けるとね、そこに繋がる仕組み」

もひなんなんだこの校舎つて。便利すぎて素敵。

「まあ、普通に歩いて行つたら到着は夕方だし、当然の仕組みだよ」

いいながらナコタが扉に手を駆ける。

扉はその大きさを感じさせない軽い動きで開いた。

その向いにあつたのは……廊下。

「え、また廊下？」

「いいからすぐだよ」

ナコタが歩き出したので、その後に続く。

すぐに、ナコタが一つのドアの前で足を止めた。

「ルルが理事長室」

確かにすぐだった。

ナコタがドアをノックする 直前。

「入つていいよ」

声が、聞こえた。

なんだらう。

例えが見つかなら「くらいに綺麗で、透き通つた声だつた。

「……お見通しか。流石」

ナユタが肩を竦めて、ドアを開ける。

その先に合つたのは、それほど大きくはない部屋だった。大きくはないって言つても十分な広さはあるんだけどや。

でも、神様兼校長なくそじじ 御老体の部屋と比べると「じんまり」としている。

その女のは、部屋の私から見て奥にある窓を開け放ち、その向こうに広がる学園世界眺めていた。

「どうやら」は校舎の中でも特に高い所にあるらしい。

その人のポニー・テールにした黒い髪が風になびいた。

「……ポニー・テール？」

見れば、その後ろ姿にはなんとなく見覚えがある気がした。

「ここにちは、棘ヶ峰緋色さん？」

「え、なんでお私の名前」

「彼女に先に教えてもらつていたから。楽しみにしていたのよ？」

その人が振り返る。

刹那、確かに時間が止まつた。

あの人と……私をこの世界に連れてきた人と同じ顔をした人だつた。

違うのは、瞳の色が赤いことと、髪が黒いことくらい。

驚いた。

驚いたのは、顔が同じだからではない。

同じなのに、なんだか違う。

なんだろ、この気持ち。

「驚いてる？」

どこか無邪気な声で、その人が首を少しだけ傾けた。

動作一つに、なんだかどきつとした。

「私はツクハ。ここの理事長をしてるの。よろしくね  
「あ……よろしく、おねがいします」

ペニijoと頭を下げる。

おおづく、この私にあるまじき礼儀正しい態度だぜ。

「あの……あなたは、どうしてその人と同じ顔を……  
「彼女の姉だもの。顔が似ているのは当然でしょ」

いや、似てるってレベルじゃねえですぜ。

双子かなにかなんだろうか？

「彼女からは将来有望な子、つて聞いてるよ。特別クラスへ入れる  
ようにも言われてる」

「特別クラス？」

聞き憶えのない単語が出た。

「この学園にはいくつかクラスがあるの。その中でも能力が突出し

た人を集めたのが特別クラス。今はたった五人しかいないの。六人目になれることが、誇つていいんじゃないかな」

「へえ……つて、いやいや私がそんなところは行っちゃつていいんですか！？」

「いいんだよ。彼女が言つんだからね」

どうやらあの人は法らしい。

とんでもねえ。

「でも、編入試験をするように言われてる」

「試験？」

「そんなのするの？」

横から不思議そうにナコタが尋ねる。

「今までそんなことした人、いなかつたでしょ？」

「特例だね。まあ、それだけ気に入られたじゃないかな。もしくは、それ相応のスペックを持っているか」

「……緋色つて凄いんだねえ」

「えつと……そり、なの？」

私としてはその編入試験とやらの内容が気になるのですが。

「試験はこのあとすぐに行つから」

「すぐ、ですか」

「ええ。試練システムを使ってね。とある試験をクリアしてもう一つよ」

笑顔でツクハさんが言つ。

「いきなり試練システムって、結構鬼畜じゃない?」

心配そうにナコタが言つ。

ナコタがそつまで言つてことは、やばいんじゃないの?

「ええと、命の危険とかは?」  
「あるけど?」

即答された!

しかも、それが、みたいな顔で。

「いやいやいや!？」

「大丈夫大丈夫」

「なにが!?」

なにをもつて大丈夫だと！？

私つて今のところ純粋な女子高生なんですけど！

「なんとかなるよ、案外。多分ね」

ツクハさん！？

今、多分つて言いましたよね！？

言いましたよねえ！？

「それじゃあ、試練システム起動」

ツクハさんが言つと、私の目の前にいきなり虹色に輝く巨大な橈円の物体が現れた。

「ふあ！？　いきなり！？」

「ツクハさん、流石にまざいんじゃない？」

私の肩をナユタが掴む。

「これ、私は反対だよ。いくらなんでも……」

「大丈夫」

気付けば。

私とナユタの間に割り込むように、ツクハさんがいた。

いつの間に移動したのか、まるで分からなかつた。

「私と彼女が大丈夫と言つのだから、大丈夫なのよ。分からない、ナユタ？」

少し違つ声色で、ツクハさんがナユタを見る。

その目の奥に、恐ろしい光がある気がした。

「……信じていーの?」

「ええ」

「嘘だつたら、流石に怒るよ。」(一)、ぶつ瀆すから

空気が軋んだ。

ナユタとツクハさんの間に、田には見えない歪みのようなものを感じる。

「出来るならね」

鼻歌でも唄つかのよつて、あつわつと返す。

「さ、じやあ緋色。行つてみよが?」

私に顔を向けるなり、元の声色と笑顔でツクハさんが言つ。

ツクハさんは私の肩からナコタの腕を外し、そのまま 、

「ちよつ、あの……私まだいろいろついていけないんですけど…?  
？」

「なんとかなるからー!」

そんなサムズアップされてもー

「じゃ、がんばってねー」

ツクハさんの手が、私の身体を押す。

そのせいで私は 、

「つて、これって禁止された試練じゃないのー!?」

「あ、気付いた?」

「やっぱり駄目! 紺いー!」

そこで。

私の身体が虹色に飲み込まれる。

虹色の向こうは……一片の光もない暗闇だった。

**理事長まつ！（後書き）**

成長したツクハさん登場ー。

## 試練はつ！

暗闇の中を漂つのように私は浮かんでいた。

突然、情報が頭に叩き込まれる。

文字通り、叩き込まれたのだ。

試練ナンバー〇。

現れる幻影を倒し続けること。

幻影にやられた場合、精神が摩耗することになる。

精神が摩耗し続けた場合、それは死に繋がる。

……ちよつとおー？

なにそれ内容グロいんぢやないですかあー！？

試練開始。

そんな文字が脳裏に浮かぶ。

次の瞬間、暗闇に光が差した。

眩い光に、思わず目を瞑る。

すると、足の裏に地面の感触を覚えた。

「え……？」

驚いて目を開けると、そこはもう暗闇でもなければ、眩い光もなかつた。

ビルのような高い物体が辺り一帯に聳えた空間だ。足元は黒いタイルで覆われ、空は雲ひとつない青空。

そしてビルのような物体は……全て本棚だった。

憶などではなくても足りない。兆ですらも。

眩暈がするほど大量の本が、あつた。

「なに、ここ」

信じられないくらいに巨大な図書館、とでも言つか。

空があるじてんで館ではないけれど。

「どうしてこんなとこ」 あ？」

最後変な声になってしまったのは、なにも私の頭がアレなせいで  
はない。

変な声が出たのは、変なものを見つけたからだ。

人だ。

人が向こうから歩いてくる。

笑顔で。

それ自体は、別におかしいことじやないのかかもしれない。

でもその人は、私のよく見知った顔だった。

そりゃあそуд。

毎朝、顔を洗う時に熱い視線のやりとりをする相手なんだから。

つまりは、私がいた。

私は笑顔で私のところまで歩いてくる。

え、なにこれ。

ぶっちゃけ自分が近づいてるとかホラーなんですけど。

思わず一歩あとずさる。

近づいてくる私が笑顔で大きく手を振ってきた。

頬を引き攣らせながらも、私も手を小さく振り返す。

次の瞬間。

胸が、熱くなつた。

比喩表現じゃないよ。

出会つた瞬間に私は恋に落ちた、とかじゃ決してないよ。

見下ろす。

私の胸に、なにかが突き立つっていた。

それがなんなのか、分かつていてるのに、判断できなかつた。

あまりにも馴染みがなかつたせいだ。

剣。

一本の剣が根元まで深々と私の胸に、心臓に突き刺さつていた。

熱いが、痛いに変わつた。

違う。

熱くて痛い。

ううん。

熱いのが痛い。

ああ、もうなんだかわけがわからない。

熱い。熱い。熱い、熱い熱い熱い熱い熱い熱い！

そして、身体から何かがこぼれ落ちて行くような感覚。

これって……。

それを実感しながら、私は何気なく顔をあげた。

私が、まだ笑顔で私に手を振つていた。

振られているのとは逆の手には、一本の剣が握られていた。

笑顔のまま、私は剣を振りかぶる。

ああ  
そつか。

あれが、幻影つてやつなのか。

気付いたと同時に、私の顔面に私の投げた剣が突き刺さった。

気付いたら同じ場所に立っていた。

違う。

戻ったのだ、と頭に叩き込まれた知識が教えてくれた。

「リトライ、か」

おいおい冗談じゃないって。

「う」とは、なんですか？

再び向こうから現れた人影に、笑うことすら出来なかつた。

「もう一度、っすか」

剣が田で追えないくらいの速度で跳んでくる。

「う……！」

どうにか私はそれを回避した。

私の背後についた本棚にその剣は突き刺さる。

「…………うひわ」

刀身の半分くらいまで突き刺さつてる。

そりゃ私の胸とか顔とか簡単に突き刺せますよね、この威力なら。

私の姿してる癖にスペックはダンチですね。

さらりと剣が飛んでくる。

「ど、どつかから取り出しねるのか私は知りたいですぜーー！」

幻影は、どつかともなく剣を取り出していく。

「このままじゃ……！」

やられる。

そう思つた私は、反射的に本棚に突き刺さつた剣に手を伸ばして  
いた。

とにかく武器。

それで、応戦しなくちゃ。

こんなふざけた空間から脱出するには、あの幻影とやりを倒せなくちゃいけないらしい。

一のーおせじーひせへいせ

剣を引き抜  
けない。

「>?」

へえ、剣つてここまで刺さつてるとそつ簡単には引き抜けないものなんだねえ。

なんて感心する暇もなく。

私の側頭部に幻影の投げた剣が突き刺さった。

†

死ぬのもうやだ！

普通に痛いんですけど！？

つていつか頭刺される感触とかなにあれキモい！

「おおおじや私、発狂するよーー？」

わりかし真面目にパンチだ。

とか思つてこる間に向こうから幻影さん登場わーぱくぱくー。

じゃねえー！

とつあえず逃げよーー。

そう判断して、私は飛んでくる剣を回避しながら本棚の陰に跳び込む。

そのまま、幻影かりととにかく遠ざかるために走る。

けれどこの空間の果てはどーにも見えなかつた。

どんどん広いんだ、ここー。

しばらく走つたところで、本棚にもたれかかる。

荒れた息を落ちつける。

「はあ……まつたく、激しいヤツだぜ。こんな調子で毎晩相手してくれないってかい？ おこおこアチシが//イラになつまつ」

とか迷うことある。

「元しても、ほんとに凄い量の本」

改めて本棚ビル群かつて私命領かつてじを見上げる。

「一体どんな本を置いてるの？」

興味が沸いて、本棚に並んでいる本のタイトルを見てみる。

今日から始める魔術入門。

簡単お手軽暗殺術。

毒殺を極めたいアナタにこの一冊。

超古代技術研究書・初級編。

「……おお！」

なんじゃこれは。

こんな物騒な本ばかり……もしかして全部こんな感じなの？

「りやあ……全部読んだらとんでもない人間になれそうですね。

「おひせりばくべいー?」

首に灼熱が走る。

赤い液体が飛び散つた……私の首から。

手でおわるが、おわられない。

血が溢れだしていた

振り返ると、剣を突き出した幻影さん。

あ  
—  
—  
—  
—

ば  
た  
り

1

いい度胸だこん畜生！

私あ趣旨を把握したぞ！

つまりあれか。

「ここにこれだけ物騒な本があるってことは、つまりだ！」

「この本で勉強してあの幻影ぶつ倒せつしたことですね！？」

「さねだ正解だらうがこの野郎、さまあ見やがれ、首洗つて待つて  
るよー。げははははははははははははははー。」

とか笑つてたら首が落ちた。

もとい落とされた。

次いってみましょー！

+

「り と ら い

というわけで畠とんでも一回田のコトライド『』やります。

聞いてくださいよ奥さん。

あの幻影つたらわたくしが真面目にガリ勉してるのに横から剣で  
刺してきたりして邪魔してくるんですよ？

困った子ですわねえ。

だがしかし！

そんな横暴も今日までだ！

もう体感時間とかぐぢやぐぢやで痛覚とか「え、腕？ ビーぞどーぞーくらいおかしくなつてるし、血を見てもうわー私また死んじやうテへぐらいにしか思わなくなつちやつたけど、それでも私は！

私は！

私は！

わ・た・し・は！

横から剣が飛んでくる。

私はそれを、指一本で挟むように受け止めた。

身体強化！

このスキルを手に入れたらぜ私！

さすが私頑張った！

百一の命を犠牲によく覚えた！

これでかつる！

幻影が次々に剣を投げてくる。

「きかぬわあー！」

それらを全て、素手で殴り飛ばす。

「ふははははー！ うぬの力はその程度か！」

いいながら、私は剣を弾きつつ一瞬で幻影との距離を詰める。

そして、幻影の手から剣を奪い取る。

「これでお終い！」

剣を、幻影の胸に突き立てた。

生々しい感触。

「……あ」

漏れた声は……私のものだった。

なにこの感触。

」の感触は……知らない。

それはそうだ。

これまで、私が刺される側だつたから。

でも、今刺しているのは私。

私の剣が幻影を突き刺していた。

幻影の身体が崩れ落ちる。

その際に剣が抜けた。

赤い血が幻影の胸の傷から溢れだした。

幻影の眼から光がなくなる。

「……やべ

剣を取り落とし、私は地面に尻もちをついた。

「殺しちゃった

命を奪つたという感触。

これが幻影だとは分かっている。

でも、リアルすぎる。

こんなの……キツいって。

「う……」

口元を押さえる。

吐かないぞ。

吐くとか惨め過ぎる。

もつと、酔々とあ……。

ねえ？

不意に、視界が翳った。

なにかと思つて顔をあげると……そこに私が立っていた

あー。

そういえば。

幻影を、倒し続ける、だけ。

倒し続けるハリヒヤ、一体じやないハリヒヤ。

つまつ……。

+

「つとら二、かあ」

最初の場所に立つ。

向ひから私が近づいてきた。

「……また、やうなへちやならなこのへ。」

正直嫌でたまらない。

でもやうなへちや、出れないし。

それに、これは幻影なんだから……。

「……」

田を覗く。

風の切る音が聞こえて、私はそれだけで飛んできた剣を上に弾いた。

田を開く。

「よし、割り切つた！」

ぐるぐる回りながら落ちてくる剣の柄を掴む。

「よっしゃいくぜー！」

剣を振りかぶり……投げた。

凄い勢いで剣が幻影に向かう。

直接切りかからなかつたのは、また肉を貫く感触がいやだつたら。

ちょっととした逃げだけど、これくらいは許されるだらう。

幻影に剣が突き刺さる未来を予見する。

だが……その予見は外れた。

幻影が素手で剣を弾いたのだ。

「へ？」

気付けば、幻影が私の目の前にいた。

「」の動きつて、まさか……。

「そりゃ、そか」

同じ強さの幻影を何体も出してきて、なんの意味があるっていうのか。

試練システム。

試練なのだ。

だつたら……これは当然のこと。

「レベル」ですか……！？

幻影の拳が私の顔面に叩き込まれて、私の首から上が消し飛んだ。

初めての死に方だった。

死亡回数はつ！

あー、てすてす。

てすてすてすてすてす……いやむしろデス？

さて。今は何回目のリトライだったかな。

案外死に続けても精神つて摩耗しないなあ。

ああ私の精神が強勒すぎるだけかな？

万……はやつた。

億はいってないかな？

多分リトライそのくらい。

結構やべー。

多分、体感時間で何十年も経ってる。これ外どうなってるんだろ。

とか想いつつ、今日も　ここの日数ないけど　元気にやつたる  
ぜ！

つーわけで、なんかいろいろダイジェスト！

メタ発言？

「Jの作風ですよあなた。今更なにを。わらわら。飲食店ではない。

+

百まで数えていい加減に嫌になつて、死亡回数は数えてない。

多分一百は越えたよね。

ジビビーン。

つてな感じで私の視界が赤い閃光で埋まつた。

空から降り注いだ、幾千もの赤い光線は本棚を、地面を塵芥に変える。

「まつまつ」

そんな破壊の雨のなか私はスキップをしていた。

いやいやマジで。

だつてこの程度ならなんとかなるっしょ。

てなわけで右手をあげる。

地面から巨大な火柱が立ち、頭上に浮かんでいる幻影に向かつて  
いた。

避ける間もなく、幻影が炎に呑みこまれて灰も残さず燃え尽きる。

「ハバネロピラーと名付けよ。もあらん嘘だけー。」

とか思つてると、空が割れた。

「おおつー。」

割れた空の向こうにあるのは、深紅。

深紅が向こうからじゅりへと、まるでタールがこぼれるように溢れだしてきた。

なんかやばそうなので、もつ一発ハバネロピラーを放つ。あ、やべ嘘じやなかつた。

ハバネロピラーはそのまま深紅を貫き ませんでしたー。

深紅がハバネロピラーをあつたり弾く。

「ほわつー。」

私の最大出力なんですが……。

深紅が蠢く。

私にむかってじょぼれてくる途中で、深紅が数え切れない狼みたいな獣に姿を変えた。

「おおうーー？」

レーザーっぽい攻撃とかハバネロピラー連発とかしてみるけど、なんか効かねえっす。

結果。

おいしくいただきました。

+

千は逝く、どいままで逝くの、緋色さん。五・七・五・

つうわけでも分四桁台乗つてんだしょーってこの今の頃まではこかがお過ぎしじょうか。

私は空からふつそそぐ隕石群をウインクで破壊しています。

マジマジ。

ウインクすると隕石が消し飛ぶんだぜ。

この技でしょ？

君にもワインクしてあげる！ でも死んじゃうけど…

「だーれに言つてんだか」

肩を竦めつつ、隕石落とす魔術を延々繰り出してきやがる幻影を探す。

なお隕石の方はオート発動の火柱 この魔術名前なんてつけたつけで破壊。

お、いたいた。

私の第六感が まだだの探知魔術なんだけど 幻影の位置を特定する。

私が見て三時方向に二十一キロっすか。オッケー。

ちなみにこの世界の果てが未だに見れない。どうこいつだとばつぱよ。

私は幻影がいる方向に両手を突き出す。

すると、両手の間に電火が散り、それがあつという間に大きくなつて、一つの巨大な雷球になった。

「イツちまゝなああああああああああああああ、ぶるあああああ

ああああああああー。」

叫びながら、雷球を放つ。

雷球は、その線上にあるなにもかもを高熱でプロズマ化せながら幻影に直進する。

あいつこまに雷球は私の視界から消えた。

「わい、当たつてよー？」

とか思つてると、雷球の反応が消えた。

「わい。」

視界に影がさした。

見上げれば、そこには空を覆つほど巨大な赤い津波。

有機液体金属タイプB……つづりじよへ

持ち主の自由に形を変えられる液体状の金属なんですよ。  
ちなみに。

「」の我にその程度の質量で抵抗するか、雑種！」

私の背後の空間が裂けて、そこから押し寄せる大津波の質量に劣らぬ質量の有機液体金属が一瞬で飛び出し、津波を押し返した。

「ぢやー。」

どん、と。

小さな衝撃。

見ると、虹色の線が有機液体金属を貫き、そのまま伸びて私の胸に刺さっていた。

「なんじゅーりゅあああああああああああああふん」

+

どれほど殺し、殺されただろう。

既に感覚というものはない。

人格も、果して自分がどんな人間であつたかが思い出せない。

私は今なにをしているのだろう？

私はどこにいるのだろう？

ど、ひつじさんなどいへ?

疑問が解決しないまま意識の闇の中に沈んで行く。

「貧弱貧弱う！」

飛んできた虹色の剣 エリスカルコスというとんでも物質で作られたものを私はジョジョ立ちして魔力の塊をぶつけことで粉々に破壊する。

幻影がエリスカルコスの大鎌を構え、一発で焼け野原を作るのに十分すぎるほどの威力を秘めた魔弾を無数に放つてくる。

腕を掲げると、虹色のバットが手の中にどこからともなく現れる。

「ホームラン！」

飛んできた魔弾を「じと」とく幻影に向かつて撃ち返す。

幻影は魔弾を大鎌で切り裂きながら、私に飛びかかってきた。

「私と同じ顔でやるんなら、ルパンダイブにしておきな！」

空中から虹色の鎖が生えて、幻影の身体を拘束した。

バットを消して、私は人差し指を幻影に向けた。

魔力が指先に集まる。

その収束はとまらない。

大きさで言えば、ビー玉程度の大きさ。

だがそこには世界の理すら塗り潰すほどの魔力が込められている。

魔力が色を変える。

違う。

魔力が、あまりの密度に変質する。

全てを無に帰す概念がそこに生まれた。

「BANG！」

概念が弾ける。

指先から黒が溢れだし、私の目の前を塗り潰す。

まるで巨大な黒い柱が空を突き刺すかのよつた光景。

「ふふん」

黒が霧散して、後にはなに一つとして残っていない。

「よゆーつすね」

そう胸を張った瞬間、私の足元が崩れた。

「おひん？」

+

「本当にどうするの、これで緋色が死んじゃつたらー。」  
「大丈夫大丈夫」

机に体重を預けて、ツクハさんが呑氣に言ひつ。

けれど私は気が気じゃなかつた。

「さつきからそばっかり……試練システムは中止できないのー?」

私も、実はあの試練をクリアしたことがある。

でもクリアするのに、体感時間で六十年以上もかかつたのだ。

倒された回数は百や千では効かない。

クリアしたあとは、一ヶ月はまともに喋ることもできなかつた。

そんな試練にいきなり緋色を放り込むなんて、信じられない。

「あなたも知つてゐるでしょ。試練システムを作つたのは彼女だよ?  
私じゃ、いくらなんでも介入できない。したとしても、中にいる  
緋色は消し飛ぶよ」

「つ……」

歯噛みする。

どうしてこんな試練を作つたのだろう。

本来試練システムは、成長を促すのに必要な、簡単なスキルを与える　つまりはチユートリアル程度のものなのだ。

試練システムでそれなりの力を手に入れてから、生徒はそれぞれ自分の得意分野をひたすら伸ばしていく。

だから、その試練の大半が危険の少ない簡単なものだ。

でも緋色が放り込まれたのは違う。

最高レベルまで無理矢理に能力を叩き込む。そういうものなのだ。

当然、危険性は跳ねあがる。

「そもそも中では百年くらい経ったころかしら？」

試練システムの中では、現実と時間の流れが圧倒的に違う。

百年。

それだけでも、人の精神が摩耗するのには十分すぎる時間だ。

それに加えて外部的衝撃で精神が摩耗していく中、緋色は無事でいられるのだろうか。

「ナユタ。落ち着いてください」

今まで黙っていたソウが、私の肩を掴む。

「落ちつけるわけ……ないよ……」

そう絞り出した時、一つの気配が部屋の中へ現れた。

「つ、これは……！」

「ほひね」

ツクハさんが小さく笑う。

すると、部屋の真ん中で空間が碎けた。

「あ痛っ」

そんな声が聞こえた。

部屋の真ん中で、緋色が尻もちをついていた。

「緋色ー。」

すぐに私は緋色に駆け寄った。

「大丈夫、緋色！」

「あれ、エリ……んーと？」

辺りを見回して、緋色が首を傾げる。

記憶が混乱しているのだらう。

それはそうだ。

緋色にとって私達は、五年前の存在なのだかう。

「えっと、記憶搜索魔術で……ああ、おつけおつけ、そういえばそうだったつけ」

「ぼそぼそと呟いて、緋色が顔をあげる。

「ぐるーナコタ。久しづりー……つて、エリちじゅそんな時間経つてなさげ？」

「あれからまだ数分よ

「あ、そりなん？」

ツクハさんの言葉に緋色はちょっとだけ驚いたような顔をする。

「あの……緋色?」

「うん?」

「なんとも、ないの?」

緋色は、試練に入る前とそれほど変わったように見えない。

「うん。

その実力が段違いになつたことは、分かる。この学園でも屈指の実力者になつてていることが。

でも、その精神に僅かなブレも見えない。

普通なら廃人の一步手前になつてていいのに。

「なんとも、つてなにが?」

けろりと緋色が聞き返して来る。

ツクハさんが小さく吹き出した。

「頭はおかしくないの?」

「え、今わたくし凄いけなされましたか!?」

あ……聞き方がまずかった。

「えっと、頭の中身は大丈夫？」

「言い直してもあまり変わらない！」

「え、ええ……？」

なんだろ。ちょっと動搖して発言がおかしくなつておもやつた。

「……ふふん」

緋色が小さく笑う。

「分かってありますよ。なにが聞きたいのかは」

その笑みが、にじにじとしたものに変わる。

「心配してくれるなんてやせーね、ナコタは」

緋色の手が私の頬にそえられる。

「……っ」

あれ。

ちょっと待つて。

今なんだか一瞬……おかしかった？

なんだろ。

胸が……苦しい？

「なんか一度くらい自分の心臓を突き刺しまくつたり、ひたすら笑いながら辺りを焼け野原にして回つたりした時期もあつた気がするけど、私、頭は大丈夫だよ」「それ……大丈夫じゃなくない？」

「あ、そう？」

……なんていうか、おかしいな。

私と緋色は出会つて間もないのに、思つてしまつた。

緋色らしいなあ、なんて。

「ところで、あれっすわ」

緋色が私に抱きついてきた。

「え……あの、緋色？」

「大胆だね」

ツクハさんが笑いながら私たちのことを見ている。

「ちょい疲れたんで寝るわー」

「へ？」

直後、耳元から寝息が聞こえてきた。

「……ええ、と」

ツクハさんとソウを交互に見る。

「これ、どうしたらいいの？」

「甘やかしちゃえ」

「疲れているのでしょ？ じぱりぐらのままにしてあげてはどうぞ  
しょうか？」

「……そつか」

そうだよね。

あの試練をクリアしたんだもん。

凄いな、緋色は。

「もうだね」

緋色の頭をそっと撫でる。

「おやすみ、緋色」

その朝はつ！

目を開ける。

ば  
ち  
く  
じ。

「知ら」

「…………知らない天井だ」

横から聞こえてきた声に、思わず叫ぶ。

「ちゅう、ま、定番のこの一言を何故奪つたし。」

飛び起きて、ベッドの横に座っていたナコタの肩を掴む。

「いや、なんとなく？」

笑いながらナユタが悪びれる様子もなく言う。

「悪戯好きなそんなあなたも好きっ！」

「うあん。抱きしめてやつた。

「あー、ほん。ちよつと苦しいかな？」

「おお、そうかい？」

言われて、解放する。

どうやら力加減をミスったっぽいんだぜ！

「まったく、私じゃなかつたりハインチになつてたよ、今の」

「えへへー、ごめんちやい」

ちょっと赤い顔でナコタが囁つので、舌を出して謝罪する。

って……赤い顔？

「おや？ ナコタさん。顔が赤いですよ？」

「え？」

少し慌てた様子でナコタが自分の顔に触れる。

ほほー？

「もしかして私に胸キューですかー？」  
「そ、そんなわけないでしょ。もうー。」

軽く肩を叩かれる。

「ですよねー」

知つてたよ？

うん。ナコタみたいなかわいい子の眼中に私なんて入らないんだ  
うつね。

あはは……。

誰か、どうやつたら美少女を落とせるのか教えてください。

「とにかく、上手にどう？」

辺りを見回すと、部屋には私が寝ている結構大きなベッドの他に、机やクローゼット、棚が置かれていた。いかにも寝室つて感じ。

「私の家だよ。緋色、昨日あのまま寝ちゃったから。連れて來たの」

「あそのまま寝る？」

ええと……。

「飲み会の帰りにお持ち帰りされたの、私?」  
「なにいつてるの。試練システムだよ  
「ですよね」

実は覚えていましたとも。

「そつか、気絶しちゃこましたか」の私は、貧弱さが露呈して恥ず  
かしい限りですんなあ」  
「貧弱つて……今いつてけりつとしている時刻で貧弱とは正反対だ  
けどね」

苦笑して、ナコタが立ちあがる。

「起きたなら、朝食食べよつよ。今ソウが作ってくれてるから  
「ほつ?」

今聞き捨てならない発言が出ましたよ奥さん。

「ソウとは同棲してますか

「同居ね。ほり、ベッドから出で

あつさり流されてしまった。

なんだいなんだい、もつといへ、あるでしょ。

そ、そんなわけないでしょ。もつー。

とかそんな感じにシンデレ見させてくれていーの。」「あれ？ なんか今の発言をどじいで聞いた氣がするのだが……まあいいか。

ナコタに言われるまま私はベッドを出した。

「じつちね」

ナコタに嫌なされるまま、寝室を出て廊下を抜けてリビングに入る。

リビングもまた、いかにも、って感じだった。

カウンター式のキッチンがあつて、テーブルがあつて、ソファーガあつて、テレビがあつて……。

あれ、じつて異世界ですよねえ？

なんかすげえ一般的な家なんすけど、これはいかに。

だが窓の外を見れば学園世界の中世と近代と未来的な建築が群立していて、やつぱりここ異世界だよね、と再認識。

その時、鼻孔をいい匂いがくすぐった。

テーブルの上に置かれた、田玉焼きとベーコンののった皿、こんがりと焼けたトーストが二つずつ皿にとまる。

な、なんだこいつ、うまそうだぞ。

「ソウ、緋色が起きたからその分の朝食もお願いしていい？」

キッチンを見ると、ソウがピンク色のエプロンをつけて経つていた。

なん……だと……？

あのクール少女がピンクエプロン？

これは……革命だ！

「分かりました……ビリしたのですか、緋色。そのように身もだえて」「いいえなんでもないでーす！」

ちよつちよつ想像が銀河鉄道を駆けめぐつただけです！

「はあ……それで、朝食一人分追加ですね、わかりました」

ソウが冷蔵庫から卵とブロッキのベーコンを取り出す。

コンロに置かれたフライパンに油を引いて、ソウがブロッキのベーコンを空中に放り投げる。

って、何故投げるし！

食材がつ！

とか思つてゐると、ベーコンが薄く四枚剥がれるよつとブロッキから切り取られた。

「おおう？」

切られたベーコンとブロッキのベーコンをソウがキャッチして、切れの方をフライパンに乗せる。

肉の焼ける匂いキタコレ！

おおひへ、吾輩の腹よ、もつかうし我慢するがよい。

まだやつは焼けておらぬのでな。ふははははは！

焼ける焼けろ！

悲鳴のように油の跳ねる音を立てて焼けてしまえい！

なんて考える私を傍目に、ソウはプロックのベーコンを冷蔵庫にしまいながら、卵を肩越しにフライパンの方に放る。

またっすか！？

空中で弧を描きながら、卵の殻が綺麗に真つ二つに割れて、中味がフライパンにのつかった。

なぜ今ので黄身が割れないのだろうか。不思議だ。

割れた殻は、素早く元の位置に戻ったソウがキャッチして、シンクの隅にある　あれなんて名前だっけ　の中にシユート！

スリー・ポイント・シユートだ！

さらにソウは食パンをどこからともなく取り出して、トースターに放り込んだ。

「か、華麗なる準備だぜ……」

冷や汗が私の頬を伝つ。

今の朝食準備にかかる時間、実に一分足らず。

早い……クイックだ！

ただあの過剰な動作は必要だったのだろうか！

さつとやうはつゝじんじゃいけないんだと思つて。私空氣読める子！

「ソウさん、毎日私に朝食を食べさせてください。」

思わず地面に片膝つこうソウの手をとつてやんな」と言つてしまつた。

「……他の人にはどうぞ  
がーん！」

ふ、ふられちました。

地面に崩れ落ちる。

「……緋色つて、なんか手当たり次第にそういうふうにならぬ？」  
「そんなことないよー。かわいい子にだけだよー」

そしてナコタもソウもかわいいんだいー。

「かわいい？」

「そだいー。インド人嘘つかないアルヨ」

あ、やべちょっとチャイナ混じつた。

「へえ、かわいいか……ふうん」

「うん？ なんで笑うのかねナコタばあさんや  
「気にしなくていいですよ、緋色じいさん」

おおひ、返されちまつたぜ。

+

「うわやつやめ」

「美味で」「わざいました」

ふ、ふふ、ふ……本当に美味しい朝食だった。

これはもう、叫ぶしかあるまい。

「ええい、シェフを呼べー」

「ここにこますが？」

「やつでしたっ！」

すっかり忘れてたぜ！

も・ち・ろ・ん、嘘だけど。はあと。

「改めて、ゴチでした！」

「お粗末をまでした」

ソウが言いながら、私とナコタの空の皿を回収して、キッチンに持つて行って洗いはじめる。

「ええ嫁や

「嫁ではなく、ナコタの侍女です」

「へえ、侍女……侍女！？」

ちょっと待つた。侍女ってあなた……え？

「ナコタつてもしかして、いいとのお嬢様なの？」

侍女っていうと、なんか貴族なイメージなんですねけど。

「違うよ。ただ、ちょっと私の親が凄い人達でね。その上心配性だから、親元を離れる時に半ば無理矢理連れて来させられたんだよ」

苦笑しながらナユタが説明してくれる。

「ふうん。そうなんだ」

凄い人って、どう凄いんだろ。

ナユタの親でしょ？

……うーん。想像がつかない。

まあ仕方ないか。ナユタとは出会って間もないし。

「さて、お腹も膨れたところで、今日の予定を話そつか  
「ら、らめえ、もうそれ以上、入れないでええええ！」

「……？」

「「めんなんでもない」

お腹も膨れたというフレーズでそんな想像をした自分がなんだかとても惨めです。本当にありがとうございました。

ナユタの不思議そうな目が痛い！

「えりの子、ピコアやわー！」

「ええと、それで、基本しばらく緋色の面倒は私が見る」とになつたから。シクハさん曰く、先輩として後輩の面倒を見なさい、ってことらしいよ」

「それはそれは、御迷惑をおかけします」

「別にいいよ。緋色は面白しね」

面白について喜んでいい評価だよね？

だよね？

いやつせうい！

133

「で、とりあえず特別クラスについての説明なんだけど」  
「そういう私、そんなクラスに所属するんだつけね」

あの試練をクリアしたから問題なく入れたわけだ。

ふふ。あんな試練をさせるなんて、今更だけどどんな鬼畜なんだろ。

終わったことだし、それなりに楽しめたからいいけどやー。

ちなみに楽しみ方としては幻影の四肢を先からゆっくり細切れにしたり自爆技連発してみたりといろいろありました。

……私、壊れてたな。

まあ今は壊れ壊れていって正常値ですけどね！

「特別クラスなんだけど、実は授業とかはないんだ」「へ？」

授業がない？

「どうこと？」

「特別クラスの人は皆独特すぎて、授業が意味ないんだよ。だから各自、それぞれの修練を積むことが授業代わりなの」「……へー」

世ではそれを自由登校と呼ぶ。

自由登校のクラス？

……なにそれ最高じゃん！？

「でも特権として、他の全クラスの授業に自由に参加していいんだ」「なんだ」「で、どうせだから今日はいろんなクラスを見回つてみない？ 緋

色はまだなにも分からぬだろうし」「

「んー」

いろんなクラスか。

まあまだなにもする」とないし、いつかなー。

「オッケーです。それじゃあそつこいつ」とお願いします  
「お願いされました」

ナユタが笑顔で頷く。

あー。

かわいいーなー。

こんな嫁ほしー。

あ、そうだ。

どうせだし、この世界にいる間の目標を決めてみようかな。

私はかわいいおんにゅの子のハーレムを作るー！

どん！

どんどうばらばら！

いえー！

ふう。

え、無理？

知つてゐわそんなんもん！

先生はっ！

「それじゃ、まずは補助魔術クラスから覗いて行ってみようか？」

玄関で靴をはきながらナユタが言つ。

「補助魔術クラス？」

「そ。防御とか、強化とか、文字通り補助に優れた魔術を教えてるクラスのこと」

ソウは一足先に玄関を出て、扉を開けたままにしてくれていた。

「ありがと」

「どういたしまして」

私とナユタが玄関を出たところで、ソウが扉を閉じてその表面に触れる。

すると青白い光が扉を走った。

……とんでもなく高度な封印魔術だ。

そんなもの戸締りに使つなよ、と思わぬくもない。

ちなみに私は試練中に幻影の心臓を封印して倒すところ我ながら  
えげつねー真似をしました。

玄関を出たといひは、マンションの廊。

なんてこつか、これまたあれですよ。

つぽー、つてせつ。

マンションつぽー。てこつか普通のマンションだよ。

ファンタジーの影も形もないよ。

むついいけべさあ。

すぐ傍のエレベーターのボタンをナコタが押すと、すぐエレベーターがやってきた。

乗り込んで、ふと私が不思議なものを見つけた。

ええと……壁一面ボタンで埋め尽くされるとのですが?

「……結構いこマッシュンなんだ。学園のこりんな場所に転位でき  
るんだよ」

言いながら、ナコタが大量にあるボタンの中から迷わず一つのボ  
タンを押した。

するとエレベーターの扉が開いて、あら不思議。

エレベーターの向こうは、昨日も歩いた校舎の廊下でした。

「便利ー」

「でしょ?」

笑つてナコタがエレベーターをおりる。ソウがその一步後ろに続  
き、慌てて私もナコタの横に並んだ。

「補助魔術は、と……」

「」の廊下にはいくつもの扉が並んでいた。

「ビームがいいかな……ああ、ガレオさんのとこでいいか

なにか咳きながら、ナコタが扉を順番に指差していく。

「ええと、ガレオさんの授業は、と……ここか

そして、扉の一つにナコタが手をかけた。

扉の向こうは、どこまでも続く草原でした。

うん。

もう驚かねー。

驚かねーぞ。

「のくらこのじと、そりゃあるだろ?」

なんだかこの学園世界という場所が分かつてきただ気がする。

つまり常識は捨てるところでしょ。

はははっ。了解つすわ。

「ガレオさん!」

草原の一角に、二十人程度の人影が見えた。

ナユタがその集団に向かつて歩いて行く。

その中の一人が、ナユタに顔を向けた。

黒いマントを着た、なんかちょっと厳しそうな顔をした男の人だ。

「……ナユタか。珍しいな、貴様が補助魔術の授業を覗きに来ると

「は

わお、渋い声。

「今日はちょっと理由があつてね。あ、こっちの子は棘ヶ峰緋色。  
それで緋色、こっちはガレオ＝ヘロストラ先生」

ほう。先生でしたか。

まあ生徒にしてはちょっとばかり威厳がありすぎですしね。

「どうも」

とりあえず軽く頭をさげておく。

ペニン。

「ふむ、新入りか？」

「そうそう。それでね、特別クラスに所属になつたから私が面倒み  
てあげる、ってツクハさんが」「

「理事長から押し付けられたか……それにしても最初から特別クラ  
スとは珍しい」

そー。押し付けられたとか言わない！

まるで私が厄介なものなのよつじやないか！

そんなこと思わず照れちぢめ。テヘッ。

「なるほど。ではその棘ヶ峰とやらに学校を案内していくわけか」

「そゆこと

ナコタが頷く。

「ふむ……」

ガレオ先生が私のことを見つめる。

そ、そんな熱い視線……！

駄目ですわ、先生。教師と教え子が、そんな……！

よいではないかよいではないか。

あーれー。

なんて展開を期待するわけでもなくもない。

あつたらあつたで、悪いけどぶつ飛ばせてもうつけどねー！

ぶつっちゃけガレオ先生は趣味じやねーです！

「めんnett！」

「しかし補助魔術など見に来てもあまり面白くなどないだろ？」「そこはまあ……だから最初に来たわけだし？」

「そうか」

ナコタの言葉にガレオさんが咽喉をならした。

ちらりと、私はガレオさんの背後にいる生徒らしき人達の様子を窺う。

彼ら 女の子も混じってるけど は、なにやら明後日の方向に向かつて身構えている。

なにしてるんだろ？

とか不思議がっていると、地平線の彼方にいくつもの光が生まれた。

「あ……？」

それはあつというまに大きくなつて……違つ。

大きくなっているのではない。近づいてきているのだ。

すぐに、その正体が分かつた。

およそ直系十メートルほど、巨大な炎の塊だ。

それも飛んだ跡の地面が溶岩みたいにじろじろになつてゐることから見て、恐ろしいほどの高熱を持つてゐるのが分かる。

それが一列に並んで生徒さん達に向かつてきていた。

「ちょ、あれやばくね？」

「問題ない」

ガレオさんが微かに笑う。

炎が生徒達に着弾する。

恐ろしい程の熱が辺りに吹き荒れた。

触れるだけで蒸発するほどの熱は、しかし私達には届くことはなかつた。

なにかと思えば、薄く、それでいて堅牢で巨大な魔力障壁が私達の目の前にあつた。

どうやらガレオ先生が張つたものらしい。

……え、いつ張ったんすか？

つかやべえ。

この魔力障壁……ぶつちやけ私でも破れるかどうかわからんぞ。

どんだけだよ、ガレオ先生。

私、これでもかなり強いつもりだったのに。

大陸一つ二つ消し飛ばせるようになつたし、私すぐーんじやね?  
みたいな。

でも、ガレオ先生はその上をいつている。

よくよく考えれば、ナコタだつて初めて出会つた時に世界を滅ぼす程の攻撃を受けとめてたし……。

もしかして学園には、そんな連中がじるじるしてるのだろうか。

おおう……。

終わつちまつたぜ。私の井の中の蛙生活が。あるいは猿山の大将生活が。

人はそれを自意識過剰とも言つ。かつこわらい。

……つて、それはそつと。

「生徒達が消し炭に……」

炎は未だに燃え盛つている。

本格的にやばい気がするのですが、私だけでしょうか。

「問題ない」

私だけっぽい。

ガレオさんもナコタもソウも平然と見てるし。

次の瞬間、炎が弾けるように霧散した。

「ほ？」

なんと、驚いたことに炎の中から無傷の生徒達が姿を見せた。

え、マジで。

無傷？

あれで？

あれ軽く国潰せるレベルの威力だったと思つんですが……。

「対国レベルの魔術はもう教え終わったの？」

「一応はな。あとは練度だ。あれを一ミリ先から撃たれても平気になるくらいでなければ話にならん」

後ろ二人の会話は聞かなかつたことにしよう。

少なくとも私はあれを一ミリ先から撃たれて防げる自信は無い。

まあ、出来ないとは言わないけどさ。

やりたくはないよね。絶対。

つていうかこんな授業、ドMでもなければ受けたくないに決まつてる。

あんな威力の攻撃を防ぐ授業ってなんだよー

やりたくなえ！

やりたくなえ！

大切なことなので何度も言ひますよー！？

「どうだ棘ヶ峰。やつてみるか？」

ふと、ガレオ先生にそんなことを言われた。

「……」

やりたくないと思つた矢先に！？

まさかまた心を読まれたのか？

いや読心を防ぐ術はすでに身につけた。

となると……ただの不幸か。

不幸だああああああああああああ！

とかやつてる場合ではない。

「ええと、遠慮させてもらいます」

「そう言つた。見たところそれなりにやれるだろう」「う

「い、いえ。ナユタ、そろそろ次のクラスに行こうか！」

「

「え？ 時間なら余裕あるし折角だし

「

「いいから！」

ナユタの腕を掴む。

「それじゃあガレオ先生、ありがとうございました！」

私がガレオ先生にそう告げると、即座に入ってきたドアから校舎に戻った。

「……どうしたのさ、緋色」

「……」

「まあ私は気持ちは分からぬでもないですけれどね」

ソウがどことなく優しげな声でそう言つてくれる。

「……ソウさん。あんたは天使や」

「……？」

ナユタが首を傾げる。

それを見て思つた。

ああ、ナユタも規格外だよなあ、と。

## 暴力はつ！

「」の学園の教師陣は化物か。

空いた口が塞がらないとは「」ことですね。

私は現在、ナコタに案内されるままに武器武術クラスにやつてきております。

「」のクラスは武器の扱いとかいろいろな武器について教えてくれるクラスだそうで、他より魔術の才能が不足している人が所属しているらしい。

魔術が使えないから侮るな、とはナコタの言葉だったけれど、まつたくもってその通りで「」がありました。

「ほら、さつさと防がないと軽くぶつた切っちゃうからね」

私達がクラスを訪れた時には、地獄絵図が広がっていた。

ちなみに、もちろん扉を開いたらそこは 状態でした。

ただし今度は草原じゃなくて、無数の巨木が生えている樹海の中だつたけれど。

ほんとなんでもありだな」「」。

「今の動き、最低だよ！」

そろそろ私の視線の先でなにが起きてるかを説明しよう。

ちっちゃい女の子が真っ赤なチエーンソーみたいに刃が回転して  
る一メートルくらいの大剣を軽々と振り回し生徒達を難<sup>ハジ</sup>き飛ばし、  
さらに一緒に真っ赤な竜っぽい生き物やでかい鳥みたいな生き物や  
頭三つある巨大な狼とかが生徒を追つかまわしている。

あれって生き物　じゃないな。有機液体金属で出来てるっぽい。

それにあの女の子の持ってる大剣も……ということは、この有機  
液体金属全部あの子が持ってるの？

どんだけ操作上手いんだよ。

ただ大量に持つて津波にして相手を押し潰すのはわけが違う。

まるで本物の生き物のように動かすなんて、そんなの出来るもん  
なのか？

あ、今生徒の一人が女の子の大剣で切られて地面にたたき落とさ  
れた。

……え、死んでね？

大丈夫なのだろうか……大騒ぎしていないのだから多分大丈夫な  
のだろう。

多分。

血とか出でないしね?

大丈夫……だよね?

……気にしないことにしよう。

「スピード上げるよ!」

女の子は言つて、巨木を駆け上り、巨木と巨木の間を飛び交う。

忍者か!

それについていくように、生徒達が木々の間を飛ぶ。

中にはなにもないはずの空中を走つてゐやつままでいる。あれ魔力で足場作つてゐるのか。

ついてくる生徒達に向かつて、女の子が右手を突き出した。

すると人の頭サイズの球体があらわれた。

それが、弾けた。

弾けて出来た無数の礫が生徒達に襲いかかる。

生徒達は慌ててそれぞれが持つている剣や槍、斧、盾などを構えるが、半数が防御しきれずに戦隊される。

あれつてショットガンみたいなもんですよねえ？

当たつたら普通無事じゃありませんよねえ？

……氣にしないつてばー！

私、氣にしません、絶対に！

これは現実からどれだけ上手く目を逸らすかの戦い……。

魔法少女ジエノサイド緋色、始まります！

おつと勢い余つて変な告知しちまつたぜ。

「とりあえず、及第点かな」

跳びまわりながら女のお子がそつと、残った生徒達の顔に安堵の色が浮かぶ。

「それじゃ、どうせだしいけるといまでもうひとついか

生徒達の顔が青くなる。

おもしれー。すげえな、人間ってああやつて顔青くなんの？

辺りにいた有機液体金属の生き物が霧散する。

さらに、女の子の持っていた大剣も同じく。

そして生き物たちや大剣が分解することで生まれた赤い霧が女子の身体に吸い込まれた。

おお？

なんかやばげなオーラ出てるよ？

生徒達が「俺、死んだな」って顔してるよ？

あれが絶望の表情か……。

女の子の手から、赤い爪が伸びた。

「行くよ！」

次の瞬間、生徒の一人の前に女の子の姿があつた。

早 !?

え、今なに……魔力の動きは感じなかつたし……も、もしかして、純粹な身体能力つか！？

ありえねー。

その生徒はいきなり現れた女の子にびっくりして……びっくりしてこる間に殴り飛ばされた。

……弧を描いていく生徒の身体は、見事に脱力していた。

あ、あれ死ん き、気にしなこだう！？

「ほりほりほり、遅い遅い！ 止まつて見えるよー。」

あ、あつのまま今おきてこむ」と話をすげー。

女の子が生徒の目の前に次々に現れでは遠慮なく抵抗もせせずこ殴り飛ばしてくるんだ。

やつ、小学生でも通じやうな可愛らしい女の子が、だ！

こつやあいつたいていうことだいー あたしにや分からなこよー

「元気だなあ

「そうですね」

ああ、私の隣の二人は完全に観客マークー！

ちくせつー

「こうなつたら私だつて！」

「たまやー！」

「不謹慎だよ、緋色」

「ええ！？」

「怒られんの！？」

「え、怒られんの！？」

「これ駄目？」

「……駄目なのか。じゃあ仕方ない。

「見ろ、まるで人がゴミのようだ！」

「確かにね」

「ええ」

同意されると同意されるでなにか虚しいものがあると感じてしまうのは私だけか……っ！

とか馬鹿な」としているつむぎ先生徒は全員機能停止。

立っているのは、女の子一人。

完璧な虐殺です。御満足ですか？

「ふー」

女の子がいい汗かいたとでも言いたげなイイ顔で深呼吸をする。

ああ、満足そう。

『あれ?』

女の子がこいつを見た。

「あ、ナコタだ」  
「はうー、レーさん」  
「その呼び方やめてつてば」

苦笑しながら、女の子が私達に歩み寄ってきた。

若干警戒してしまう私は悪くないと思つんだ。うん。

「あれ、ナコタ。こいつは?」

「棘ヶ峰緋色。新入りだよ。それで緋色、この人は麻述佳耶さん。

武器武術クラスの教師

「あ、教師だつたんだ。へえ、こんな小さ」

「うん？」

「……」

説明しよう！

なぜ私がいきなり黙つたかと言えば、私の首筋に赤い刀があてられているのだ！

もちろんそれを手にしているのは他でもない佳耶先生……いいや佳耶様だ！

ああ、この人は某国家の鍊金術師な人と同じタイプがありましたか。

「なんでも、ありません」

「そ」

気付けば首にあてられた刀は消えていた。

「それで？ 新入りがうちに所属するなんて話は聞いていないけど？」

「うん。そつなんだけど、特別の方に入つてるから、それで見学に来たんだよ」

「ああ……そういえばそういう特権あつたね。特別クラスの人ってあんまうち来ないから忘れてた。個人的にはよく遊びに来るんだけど

“えれ”

「「」の間はありがとねー、いい運動になつたよ」

「」

和氣あいあいとしゃがつて。

……「」

私を差し置いて、和氣あいあいとしゃがつて。

……「」

寂しいじゃねえか「」のやうに私を差し置いて和氣あいあいとすん  
じやねえよう！

「にしても、見学ねえ……棘ヶ峰さんはなにか武器使つたり、武術  
やつしてたりする?」

「あ、基本的には一通りできますです」

へんな喋り方になつちまつたんだぜ。

ちなみに武器の扱いと武術は試練の中でも必死に覚えました。

「例えば……」

収納空間から有機液体金属を少し取り出し、それを投げナイフに変えて佳耶先生に投擲する。

我ながら会心の攻撃だった。

常人なら気付かないうちに死んでいるだろう。

……だけど。

「ふうん」

二つの間にやら佳耶先生が手の中で私のナイフを弄んでいた。

「ナイフの扱いはそれなり。動きもまあまあだね」

佳耶先生の手がナイフを握りつぶした。

強度的には鋼鉄なんて目じゃなこくらいなんですけど……ああもういい。や。

「ちなみに、学園世界に来る前は普通の学生で、今は学園世界一日

田だから」

横からナコタが補足すると、佳耶先生が目を細めた。

「へえ……特別クラスってのは伊達じやないか」

あ、やべ。

## 興味持たれたら

こういう人に興味持たれるのって、あれじやね？

じきフラグ。

「それじゃあ、私は次のクラスに行きますね、佳耶さん！　いい授業でした！」

敬礼して、私はナユタの腕を掴む。

「あ、ちょっと、そんな急がないでも」

引き留めようとする佳耶先生から逃げるよひに  
んだけど ナコタをひきずつて走り出す。  
まあ逃げてる

「さて、それじゃあ次は総合技術クラスにでも行ってみようか」

私に引きずられながら、ナユタがそんなことを言つ。

……次、かあ。

溜息が零れた。

## 兵器はつ！

ただつ広い金属で覆われた空間に私は立っている。

天井も四方の壁も見えないくらいに広い場所だ。

言うまでもないだろうが、総合技術クラスとやらの教室だ……教室でいいのだろうか？

まあ、教室ということにしておこう。

「おや、ナユタ殿。珍しいですね」

「お久しぶり、オルデットさん」

一列に整列した生徒の前に経っていた優しげな表情の杖をついたおじいさんが、教室に入ってきたナユタを見て笑顔になる。

おおう、なんか今回はまともな人だ。

「話は聞いておりますよ。そちらが例の新入りさんですか？」

「あ……はい」

「どうやら」の人は私の事を知っているらしい。

「私は総合技術クラスで教師をしている、オルデットと申します。  
よろしくお願ひします」

「『れば』」寧に

オルデット先生が頭を下げたので、私もオルデット先生より一度ほど深くお辞儀する。

「といつわけで、見~~な~~せてもうつていい？」

「ええ、もちろん」

……よし。

「おじいさんはいい人だ！」

性格的にも私の精神衛生に対しても、いい人だ！

そう決めた！

とこ<sup>トコ</sup>うかそ<sup>トコ</sup>うであれ！

そ<sup>トコ</sup>うじやなきやもう嫌だ！

流石にこ<sup>トコ</sup>んなおじいちゃんまでガレオ先生とか佳耶先生みたいに  
めちやくちやな感じではないだろ<sup>トコ</sup>。

「それでは、授業を続けさせてもらいます」

「どうぞどうぞ」

「どうぞどうぞ」

ナコタと一緒にオルデット先生を促す。

あー、なんだる。この授業はちょっと楽しみ。

総合技術って言つだけあつて生徒の人達もなんかインテリっぽい  
し。

危ないこととかはなさそ'。

「それでは、昨日の課題だつた人型戦闘兵器を」

オルデット先生の口からなんだか恐ろしげな単語が飛び出した。

ええと……うん?

ヒトガタセントウヘイキ?

人型。人の形つてことですね。

戦闘。戦つ、もしくは戦つ目的の、つてことですね。

兵器。もつ兵器は兵器でいいじゃねえですか。

つまり、人の形をした戦ひのことを曰的とする兵器。

うん！

つまりガン ムとかアーマード・アとかのことですか。

おつけ！

つまりこのことだ。

デンジャーだね！

いきなり危険の匂いがしてきたぜ！

こういつ時は、あれだ！

次話、じっくり期待！

あ、続く？

ですよね。

これでこのパート飛ばせねえかな、って思つたんですけど、現実、そんな甘いもんじゃなかつたか。  
ふふ。

地面が震えた。

おおう、なんだなんだ！？

見て見て、啞然。

とある生徒の背後に、巨大な鋼色の巨人が立っていた。

……うん。

まさに人型戦闘兵器だねつ。

きやー、すごーい。

とりあえずなんか肩からでけえ砲身が生えてるのは何ですかー？

あ、戦闘目的の兵器だもんね。そりや攻撃手段の一ついつ持つて  
るか。

すると、その人型戦闘兵器の横の空間が歪み、巨大な一本の黒い  
腕が突き出した。

そのまま、ゆっくりと空間の歪みの中からそれが姿を表す。

当然というか、それもやつぱり人型戦闘兵器なわけで……それは、  
腕だけが異様な厚みを持った、それ以外が骨のような形をしたもの  
だった。

アンバランスさが不気味だ。

さらに、次々と空間から人型戦闘兵器が現れる。

あるものは棒人間を思わせる細いシリエットを持ち、またあるものは戦車をそのまま積み重ねたのかと聞きたくなるようなごついものもあった。大きさも普通の人間サイズから全長が十メートルほどありそんなものまで、様々だった。

うん。

最高にやばい光景なんだ。

中には明らかに大量虐殺を目的に作られたんじゃないのか、つていう凶悪なフォルムのものあつてさ……」の授業、これからどうなるのだろう。

品評会とか、そういうのじゃないかな。

そしたらほら、おいおいテメェこんな不吉そうな口ボ作るんじゃないよアハハ、ってな感じで皆でわいわい出来るじゃないですか。

「ふむ、皆ちゃんと作って来たようじゃな。短い製作時間で御苦労じやつたのう」

「そういえば、これ昨日の課題とか言ってたよね？」

「え、これ一晩で作ったんすか！？」

「ねえっすよ総合技術クラス！」

「ではこれより、実戦テストを行つ」

だから私そういうのよくないと思うの…

もつと平和な授業を私に見せて！

なんて私の心の叫びを無視して、オルデットさんが地面を杖でつつく。

すると、オルデット先生の背後の空間が、深紅に裂けた。

その向こうから、一つの巨大な人型が現れる。

深紅が閉じて、その機体の姿がはつきりと浮かび上がる。

全身のいたるところから剣を生やした、赤い機体だった。

まるで獣の唸り声のような重低音が響く。

とんでもない威圧感があつた。

一目でそれがただの機械でないことが分かる。

「神殺し、だよ」

横でナコタがそう言つた。

「神殺し？」

「神すら殺す威力を持つた兵器群の総称です」

ソウが補足してくれた。

神すら殺すって……。

つまり、とんでもない、ってことだよね。

そんなもん授業で出さないでくださいよ……。

「では右の者から……まずは火力の審査じゃ」

オルデット先生の言葉に、一番右端にいる生徒の背後の人型戦闘兵器が動いた。

その右手に持っている巨大な銃を持ちあげ、神殺しとかいうのに向かって音もなく一瞬にして無数の銃弾を放つ。

あの銃弾、とんでもない量の魔力が込められている。

多分、一発でも小さな島一つくらいなら消し飛ばせるのではない  
だろうか。

「ふむ」

オルデット先生が顎を撫でる。

神殺しが鋭い爪を振るつた。

放たれた弾丸が、最初からなかつたかのように消し飛ぶ。

……あの、なにが起きたのか私でも分からなかつたんですが。

背筋に冷たいものが伝づ。

「では次、機動性と強度の審査じゃ」

オルデット先生が杖で地面を叩く。

すると、神殺しが両腕を地面に付けた。

神殺しの背中から生えた無数の剣から赤い火花が生まれる。

ゆっくりと、神殺しの頭にあたる部分が開いて行く。

開いた頭の中から、一つの砲身が伸びる。

砲身を、赤い光が包んだ。

それを合図にしたように、先程銃弾をばらまいた機体が一瞬で向きを百八十度回転させる。

機体の背中のブースターらしき部分から赤い炎が噴き出した。

そのまま、音よりも早い速度で機体が飛んだ。

文字通り、飛んだのだ。

そして機体がはるか彼方……視認できないほど遠くへと消える。

その時、神殺しの砲身が爆発した。

爆発したかのように、赤い光を溢れさせたのだ。

巨大な赤い光が、さつきの機体の後を追つて空間を裂く。

その速度たるや、音など比べようもない。

光に迫るのでは、といふほどだった。

結果は言つまでもない。

遠く、闇に包まれて見えない場所に、小さな赤い光が生まれる。

光の正体が何なのかは考へるまでもないだろ？

直後、熱いと感じるほどの暴風が私達の身体を打つた。

「では次の者」

オルデット先生が視線を次の生徒とその背後に向ける。

私は静かにナユタとソウの肩を掴んだ。

「緋色？」

不思議そうな顔をするナユタに私は笑顔を浮かべる。

その後？

もちろん。

即座に教室から逃げだしましたよ。

「え、あるよ？」

「あるの！？」

「うん。でもそんなの見てもつまらないかな、って思つて実践主義の先生のところを回つてたんだけど……まさかった？」

ナユタ……あんたが犯人なのか。

怖いのはつ！

「次は平和な授業なんだよね？」

「だから、そうだって言つてるでしょ？」

「ひたすらに強力が攻撃を防ぎ続けるD.M.授業だったり、教師がまるで生徒を獲物を狩るように追い回す授業だったり、人型戦闘兵器が次々にスクランプにされる授業だったりしない！？」

「しないしない」

言つて、ナユタがその教室のドアを開けた。

頼む、平和な授業であつてくれ……！

願いながら、私は教室に一步踏み入れた。

目の前に飛び込んできたのは 体育館。

「へ？」

思わず間抜けな声が出た。

これまでの教室とのギャップがひどいのだから仕方がないだろう。

いかにも体育館つて空間だった。

広さとしては、決してそれほど広くはない。本当に中学とか高校とかにありそうなサイズの体育館だ。

「それじゃ、確認するぞ」

その声に、私は視線をそちらに向けた。

生徒らしき人達と一人の男の人が向かい合っていた。

男の人は……なんていうか、あの入つて日本人？

黒い髪だし、瞳も黒だし、顔立ちとか……。

しかも、なんだか私と同じくらいか、下手したら年下にすら見える。

今度は、あの人講師なのだろうか。

ふと、彼が私達のほうをちらりと見た。

視線が合った瞬間、なんとか思った。

あの人には勝てない。

そんな直感。

ううん。

恐怖？

恐怖とは、正確には違つ感じなんだけれど、でも限りなくそれに近い。

なんなの、あの人……。

それと、気になるのはもう一つ。

この授業に参加している生徒のほうだ。

なんていうか……うん。

肌が緑色だつたり、角が生えていたり、身長が優に三メートルあつたりと……ちょっと普通とは違う身体をしている人達だ。

そんな人達が三十人くらいいて……なんか妙な威圧感がある。

「俺や君達は、普通の人とは違つ能力を持つている。もちろん、それが悪いわけじゃない。個人の能力として、それは評価されるべきものだ。でも、評価ってのは良い面ばかりじゃない」

普通の人とは違つ能力……？

「ここ……特殊技能クラスはね、特殊な能力を持つた人達が集まる

んだよ。見ればだいたい分かるでしょ？」

横からこいつそりナユタが教えてくれた。

確かに、いかにも特殊な能力持つてます、って人達ばかりだ。

「例えば、そうだな。君は翼持つているだろ？ それは、普通の人間にはないものだ」

男の人が生徒の一人を見て言つ。

……おや、私翼持つている人を奇遇にも知っていますよ。

それも六枚。

あの人も特殊技能持つてるのかな……あれ？

でも、姉妹だつていうツクハさんは翼生えてなかつたな……。

どういうことだろ？

うーん。

……うん！

まあいいか！

考えても答えが出ないので思考を中断することとした。

思考放棄はお手の物だぜ！

「君はその翼で空を飛ぶことができる。だが、その空を飛べるという評価は良いものか？ 当然、空を飛べるという能力の活用は多くあるし、それは多くの利点を持つ。だが、逆にそうじゃない……悪い評価だつてあるんだ。なんだとと思う？」

「……堀とか飛び越えて、簡単に不法侵入とかが出来る、とかですか？」

「そうだ」

生徒の答えに、男の人気が頷いた。

「それ以外にも、純粋に、外見が違う、なんてところも周囲から見れば、悲しいことだけれど悪い評価になる。人は、自分と違うものを恐れる悪癖を持っているからな」

む？

失礼な。

私にやそんな悪癖ありませんよ！

翼結構！

つかひゅうだいよー。

私それで天使じゃこするから。

なんて言つのはくそだつて分かつてるので発言は自重。 そつすが緋色ちゃん!

「俺達は、そういう周りの、時に理不尽とも思える評価と折り合いでつけていかなくちゃならない。せつかも言つたが、別に俺達には不利なところだけじゃない。有利なところだって沢山あるんだからな」

なんか……この授業ほんとに平和だ。

いいなあ。

なんか、講義、つて感じ。

今まで講義とか眠るためのものでしょ、とか思つてたけど、うん。そつじやねえよ。講義大切だよ。大切すぎるよ。

だつて講義つて安全なんだぜ?

なに言つてるか自分でもよくわからんねえけど、講義つて安全なんだぜー?

「そういう有利なところを伸ばしていくことを俺達は考えていいかな

くちゃならない」

「でも、先生。自分の能力は壊すことに特化しています。それは、どうすればいいのでしょうか？」

「おお、ごつい生徒が手を上げた。腕の太さが私のウェストくらいあるぜ！」

「それだつて使いようはある。一つだけ教えてやる……笑うなよ？」

人差し指を立てて、彼が口を開く。

「世界平和だ」

生徒が固まつた。

私も固まつた。

世界平和ですか？

「その力で悪い奴らを退治して、平和な世の中を作つて行くんだ。それなら、破壊の力だつて使えるだろう？」

しばらくして、生徒の中で笑いがいくつか起きた。

「あ、おい、お前ら笑うなよー。」

男の人気が少しだけ恥ずかしそうに怒鳴る。

「でも先生、世界平和って、子供じゃないんだから」

「そうですよ」

「いいだろ別に！　目標なんて人それぞれなんだからー！」

男の人気がいかにも不愉快です、という顔をして言い返す。

「ああ、ちくしょう折角恥ずかしいこと言つてやつたのにー。もういい！　さつさとそれぞれ自分の能力を上手く使えるように練習！　それと、自分の能力をこれからどうやって使って行くかを考えていいくことー。能力が暴走したりしたら俺がおさえてやるから心配するなよ！　それじゃあはじめ！」

男の人気が手を叩いて、生徒達が散っていく。

「まつたく」

頭を搔きながら、男の人気がこつちに寄つて來た。

「よつナコタ。今日はどうした」

「はるー」

近づいてみて、やつぱりその人は私より年下に見えた。

それなのに、どうしてずっとこの人に逆らつたらいけない、って感じてるんだろ?

なんていうか……本能?

兎がライオンにいきなり飛びかかつたりせず逃げ回るよつに、そういうものだ、って私の本能が判断してるみたいだ。

……この人、きっとととんでもなく強い。

「そつちのナは?」

彼の視線が私を捉えた。

瞬間、身体が強張る。

うつわ、やべ、殺される。

とか自然に思つたけどそんなことはなく、彼はただ私を見ているだけだ。

「あ、えと、棘ヶ峰、緋色つす。新入りです」

自己紹介して、ぺこりと頭をさげる。

「へえ……」のクラスに?  
「違うよ。彼女は特別クラス」  
「……あ、そういうこと

ナコタの言葉に、彼はすぐに私がどうしてここにいるのかを把握したらしい。

「つと、そういうば忘れてた。俺はライスケだ。このクラスで先生してる。よろしくな  
「あ、はい」

手を差し出されたので、恐る恐る握手する。

やべー。鳥肌ががが。

「うん? どうかしたか?  
「なんか怯えてるね」

ライスケ先生とナユタが不思議そつて首を傾げる。

「ライスケさんの力を本能的に感じているのでは？」

ソウガがそんなことをぽつりと呟いた。

そのと一つ！

ソウ流石！

普段は喋らない影の薄いキャラだけれど、もうあなたは私の癒し

！ 親切の具現だ！

「あ、マジで？ そりや悪かつたな……ええと、とりあえずなんにもしないから慣れてくれ」

慣れり、つて……あなたそりや無茶じゃないですか。

ぶつちやけ身体が震え出したんですねザ？

「えーんだよ、ちくしょーつー。

「……あはは」

とりあえず私の得意技、愛想笑いで誤魔化しておくれ。

身体が自然と後ずさりしてしまう。

くう、止まれ、私の両足……！

これ中一病じゃねえんだぜ！ リアル恐怖なんだぜ！

「……なんていうか、わざわざいたりると地味に傷つくんだが

ライスケ先生が引き攣った笑みを浮かべる。

私はそのまま、身を翻すと教室を飛び出した。

無理無理無理！

なんだあの入めつけやーうええええええええええええええええええ！

+

「……え、泣いていい？」

「まあ、ほり……ライスケさんだしね？」

「はい。ライスケさんですから」

「なんだその言い方！？」

「ま、いいや。緋色も悪氣があつて逃げたわけじゃないだろ？」「  
気にしないで上げてね」

「……はあ。ま、いいやじやねえよ……せつと後を追つてやれ」

「うん。やつくる。それじゃあね、ライスケさん」

「あ

## 最後のクラスはっ！

「次のクラスは……攻撃魔術クラスなんだけど……気をつけてね？」  
「へ？」

廊下を歩きながら、ナコタがそんなことを言いだした。

「気を付ける、とは？」  
「うーん。まあ聞いて分かるだろうけど、攻撃魔術クラスって、他のクラスよりもずっと攻撃的なことを学ぶんだよね」  
「そりゃ、そうでしょう」  
「つまりだよ。他のクラスのことを思い出して？」  
「うん？」

やうひのでしたら思って出やうじやありませんか。

むむむ。

うむ。

どれもこれもまともじやねえな！

特殊技能クラスは比較的まともだつたけど、先生がひょつとなー！

悪いわけじやねえけどとにかく怖いんだわー！

「えっと、思い出したけど?」

「攻撃魔術クラスはね、他のクラスよりずっと実戦に重きを置いてるわけですよ」

「ほう。実践に、ね」

「うん。実戦に」

ふと、ナコタと私の言葉の間に違和感のよつた음을覚えた。

え、いや、もしかして実践じゃなくて、実戦?

これまでのクラスもずいぶんと実践的な授業をしていったよつな気がするのですが……。

その上をいく、実戦的ですか?

ほほわ。

ほほおう。

……う。

「じゃ、私帰るから!」

ナコタにびしつと片手を上げて、私は逃げ 、

「わせなこよ

ナコタに襟首を掴まれた。

「つぐ

咽喉が締めつけられて奇妙な声を出したぜ。

乙女なのに！

これじゃあもう嫁さんにいけない！

仕方ない。

「ナコタ、私をお嫁さんにならってー。」

「え……別にいいけど？」

ナコタがあっさり返してやった。

ちゅう、マジですか。

あははは。

「……からかわねえでくだせえ

ナコタ返し、やめと痛いぜ。

自分の発言が元はと言えば悪いんだけどなー。

自業自得かよ。おおっ。

「別にからかっては……」

「いいんだ。それ以上はいわないで」

それ以上からかわれたら立ち直れなくなっちゃうゾ。

「……」

おや、どうしたんですかそんな不満気な顔をして。

はつ。ま、まさかもつと私をからかいたかった！？

なんてどうなんだ！

油断できなーわーの子ー。

ナコタ、恐ろじこ子つ。

「……じゃ、攻撃魔術クラスに入るとしようか！ 大丈夫、特別安全な先生のところにしどくから！」

なんだろう今のナコタの笑顔が怖い。

本当に安全な先生なんでしょうか？

きつと違う。

そんな気がした。

ずるずると襟首を引っ張られて、私は廊下をドナドナされる。

そのまま、一つの扉の前に辿りついた。

ナコタが迷いなくその扉に手を駆けた。

もうどうにでもなればいいよ！

+

結論から言おう。

ああ、確かに特別安全な先生かもしれない。

戦闘は、なかつた。

ううん、違う。

より正確に言えば……。

戦闘と呼べるほどのものは、起きていなかった。

とりあえず箇条書きに説明してやるわ。

黒い岩で作られた巨大な闘技場のような教室に入った。

そこには生徒達と一人の男性が相対していた。

生徒達が男性に一斉に襲いかかつた。その際に感じた魔力は合わ  
せれば軽く世界くらい破壊できてしまいそうな馬鹿げたもの。

その男性が剣を振るつた。

生徒達が一斉に吹き飛ばされ、意識を失つて地面に転がつた。

以上。

……うん。

私、一つ学習した。

平和つて……圧倒的武力の別の呼び名だつたんだ。

うふふ。

あはは。

……はつ。

やべえあまりの衝撃に軽く精神がとんでた。

つうかね、つうかね、もう一つ言わせてよー！

あの人……ライスケ先生と同じ匂いがするんだ。

怖えよー！

男性が私の方に歩み寄つてくる。

プレッシャーがマジパネエ。わらわら。

「……」

軽く膝が折れそうなんすけど……。

「久しぶり……といふほどでもないか。よう、ナユタ」

「ここにちは、臣護さん」

にじりとナユタが微笑む。

おおう、ナゴタの笑顔は私のものなの！

「おのれ子には金輪際近づかないでくださいまし、泥棒猫！」

とか怖くて言えない私のチキンつぶりに全米が泣いた。

「ソウヤ、元気やつだな」

「お陰やまで」

ペニンとソウが頭を下げる。

「それで、そつちは……見覚えがないな」

「うん。新入りさんだよ。特別クラス所属になつた、棘ヶ峰緋色。  
緋色、この人は攻撃魔術科の嶋搗臣護さん」

「よろしく頼む」

臣護先生が私に手を差し出して来る。

私は……もう手なんて動かせなかつた。物理的に。

身体が硬直しちゃつてるんですよ。

これが金縛りか……恐ろしいもんだぜ。

「どうした？」

「あー、臣護せんの異質つぶつて氣压されてるんだよ。ライスケさんと同じもやうだったから」

「……へえ。分かるのか?」

臣護先生がにやりと笑う。

ひいいいいいいいいいいい！？

こ、殺される！

次の瞬間、臣護先生の纏う恐ろしい気配が消えた。

「おひ？」

身体が軽くなる。

「やつすが臣護ひん。猫かぶりが上手い。ライスケさんも」のへり  
一撃で「がつ」、「手かづき」の二つ

「猫かぶりつて……お前な」

小さく溜息をついて、臣護先生が再び私に手を出しだしていく。

「あ、どう

今度はじつかり握手出来た。

恐ろしさは感じない。

「鳴搗臣護だ。暇な時があればいつでも来い。模擬戦の相手くらいいは片手間にしてやる」

わーお、堂々「てめえなど片手間に十分なんだよ」発言ですね。

そしてきっとその自信相応の力は持ってるんだろうなあ。

だつてさつきのあの攻撃……まるでなにをしたのか分からなかつたし。

なんていうのかな。

攻撃そのものが感知出来なかつた、とかじゃない。

そもそも攻撃なんてあったのか？ つてレベル。

言ひなれば……存在しない攻撃？

うーん、なんとも厨二ですな。

「にしても、またいつになく厳しいねー。これ、授業にならないんじゃない？」

「俺の授業は、どれだけ自分が弱いかを自覚させるだけだ。強くなるのは、それぞれが勝手に修練を積めばいい」

「スバルタだ」

「強さなんて、そんなものだ」

田護先生が溜息をついて、倒れている生徒達を見つめた。

「さてと。医務室に送るか」

田護先生が手を振ると、生徒達の身体が淡い光に包まれて、消えた。

医務室とやらに転送でもされたのだろう。

「こんなところで便利だなあ。

「それにしても……いきなり特別クラスで、俺やライスケのことを感じ取るか……興味あるな」

「あれー、田護さん、浮氣？ 奥さんには殺されちゃうよ？」

ナコタの言葉に田護先生が苦笑する。

「冗談じゃないからやめる。お前が前に一度冗談で俺と女子生徒が……って話した時、俺がどんな目にあつたか知ってるか？」

「それだけ愛されてるつてことでしょう？ わすが万年ラブ・ラブ夫婦」

臣護先生、奥さんいるんだ。

見かけ、私よりもちょっと年上くらいにしか見えないのに。

……あいつとこれだけ凄い人の奥さんだから、美人なんだろうなあとが偏見全開で内心感想をこぼす。

そのうち遭つてみたいかも。

この小難しそうな臣護先生が奥さんこでレポートレしたつするのどうか？

それはちょっと……いやかなり面白がりやつだ。

とかそういうことを考えけまつたせいなのでじょつか。

「そうだ。緋色、お前ちょっと俺と戦つてみるか？」

「よしよしー！」

満面の笑顔で私は別れを告げた。

ちげえよー…？

そんなフラグ立ててねえよー…？

せいぜい「なんか変なこと考えてないか?」って言われる程度のフラグしか立ててねえから!

「まあそういうな。ほら、ここよ

臣護先生が剣を抜く。

ひああああああああああ!

ちよ、おまつ、ぶばあつ!

意味分からぬ電気信号が頭の中を駆け巡る。

無理無理無理死ぬ死ぬ死ぬ!

殺される!

「助けてナユタン!」

「がんばれー」

ナユタンはいつのまにか私から離れて手を振っていた。

「ふあつー?」

ま、まだだ！

まだ私にはソウ様が……！

「頑張つてください。死なないよつに」  
「元氣に！」

ソウまで離れた所に移動していた。

「神は死んだ」  
「校長は生きてるだろ？」「

そうじやねえんです。

そもそも私はあんなクソジ……クソジジイが神なんて認めねえ！

言ひ直せうとしたけど、やつぱりやめた。

「さて、それじゃあ早速　」

うん。

臣護先生の剣から、膨大な魔力を感じた。

諸行無常つてやつですね。

盛者必衰なんですね。

泣けるぜ。へへつ。

私が生の世界への別れを告げようとした……刹那。

「田護先生あああああああああああああん！」

教室のドアが勢いよく開かれ、そこから黒い光が田護先生に襲いかかつた。

「今日こそ仕留めさせて貰うからー！」

黒い光の中に、人影があった。

黒い髪を髪のところだけ長く伸ばした女の子だ。

黒い光は、彼女の身体から溢れだしていくようだった。

彼女が腕を振るつ。

「アイリスか……」

溜息をついて、臣護先生が女の子を見上げ、剣を振り上げた。

すると、黒い光が消し飛ぶ。

「那邊...」

アイリスの身体が衝撃で大きく空に飛ばされる。

「まだまだだな」

臣護先生のその言葉と同時。

黒い槌が、アイリスの身体を地面にたたき落とした。

「うん、まだ少しでもいいから、もう少しやめておこう。」

今落下速度やばかつたんじやね？

音軽く超えてたんじやね！？

ていうか地面にクレーターがかかるが！

あの子死んだ！？

舞い上がった土煙が晴れていく。

そこには……クレーターの底で目を回すアイリスの姿が合つた。

「きゅう」

すげえ、生きてる！

「アイリス！」

と、ドアからさりに新しい影が一つ、現れた。

「へ……？」

ちょっと驚く。

その一人の顔は、アイリスによく似ていた。

「姉さん……まったく、だから勝てないって言ったのに」「アイリス！ また無謀なことして！」

目つきや髪形が違うからいいものの、同じだつたらさうと見分けが簡単にはつけられない。

きつと姉妹なのさう、と予測するのはそう難しいことではなかつた。

「アイリスの妹二人だよ。あつちの優しい目つきの、セミロングのほうが三姉妹の次女のエレナ。鋭い目つきのツインテールが、三女のスイ」

いつの間にか隣にいたナユタが教えてくれた。

「ちなみに三人とも特別クラス」

「へえ……」

三人姉妹が三人とも特別クラスとは、また凄い。

「どうしてあのアイリスって子は臣護先生に?」

「アイリスは戦闘狂だから。基本強い人見かけたら喧嘩をふっかけるんだよ」

「それは……」

なんて傍迷惑な。

「緋色も氣をつけたまづがいいよ？」

「やつする」

頷いて、私はナコタを見つめた。

「どうしたの？」

「ねえ、ナコタ……わざ私の事を見捨てたよね？」

アイリスが現れて誤魔化されると思つたら大間違いだよ？

「なんのこと？」

すつとぼけて、ナコタが笑う。

……ちくしょう。

かわいいからゆるしちゃうぜー。

三姉妹はっ！

「へえ、緋色は特別クラスなんだ」

スイが少しだけ驚いたように田を開いた。  
その片手は、アイリスの手を掴んでいた。  
氣絶しているアイリスの手を。

アイリスは当然自分で歩くことなど出来ず、ずるずるとひきだされ  
ている。

私達が歩いているのは、校舎の廊下。

廊下を氣絶した長女が三女に引きずられていく。

なんていうか、シユールな光景だ。

「ね、ねえスイ。その……アイリス姉さんのこと、せめて肩に担い  
あげない？」

エレナがおずおずとそう提案する。

なんていうか、雰囲気通りの優しい人みたいた。

長女が活発……って言つたか戦闘狂で、次女が優しくて、三女が……サド？

なんともバリエーションに富んだ姉妹である。

「嫌よ。どうして私がそんなことしなきゃならないの。それならエレナ姉さんが担げば？」

「え、やだ。面倒くさいでしょ？」

けりりとエレナがのたまつ。

……………エレナは優しい顔して面倒くさがり屋の隠れしのようだ。

たち悪い。

「ん？」

そんな私の考えを読みとったように、エレナが私を見て、にこりと微笑んだ。

ぞくりと背中が冷える。

……あ。この人、逆らつちゃ駄目な部類だ。

オーケー把握。

「ヒレナ様はお綺麗ですねえ」

とりあえずあからさまな媚を売つてみた。

「ふふつ、呼び捨てでいいよ。私も、緋色つて呼ぶから」「私どこの馬鹿姉も呼び捨てでいいわよ」「分かった

「どうやらフランクなところは姉妹共通らしい。

いや、一人氣絶してるけどね？」

「にしても、新入りが特別クラスつてのも、異例よね」「そうみたいだねー」

なんか編入試験とか例外でやらされたし。

いやあ、あれはいつ思い出しても鬼畜だったな。

「緋色つて、強いんですか？」

「さあ、どうだろ?」

エレナに問われ、首を傾げる。

「ぶつちやけ、いろんな授業を見学して、自信は欠片もなくなってしまった。」

「この学校怖いよ。」

「緋色は強いよ」

すると、ナユタがそう言つた。

「へえ、ナユタが言うんだ？」

スイが興味深そうな顔をする。

「な、なに？」  
「いや。アイリスじゃないけど、ちょっと興味があるな、と  
「あ、私も  
「いやいやいやー。」

首を大きく横に振る。手。

「そんな興味の持たれ方はしたくありませんー。」

私なんてこれっぽちも強くないですよ?

もうね、ミジンコだよゾウリムシだよアオミドロだよアッパツバーだよ。

「だいたい強わで言つなら同じクラスなんだし、この学園にいた時間が多いんだし、皆のほうが強いんじゃない?」

ナユタも異界の破壊神とやらを粉碎玉碎大喝采してたし。

全員がそのレベルだとしたら、私なんてまだまだだ。

「ぶっちゃけ、私達はほら、親の影響が大きいのよ

スイがそんなことを言ひ。

「親の?」

「そうですね……私達姉妹も、ナユタも、もう一人の特別クラスの愛奈つていうんですけど、彼女も……全員、親の資質を遺伝して、その上周りが強い人達ばかりという環境で育つたので、自然と俗に言つ、サラブレットといつやつですね」

ほほり。

彼らの親つてのは一体どんな人達なのかね？

興味あるけど……まあここは今回は置いておこう。

それを聞くほどまだ親しくなってないしねー。

ほら。まだまだ「娘さんを私にくださいー」イベントまではラグが足りないし。

「緋色は別に両親が特別つてわけじゃないよね

ナユタの言葉に頷く。

私の両親は普通の日本人だ。

ちょっと愉快な性格をしているけれど、そこは間違いない。

「普通の人間が特別クラスに上ってくるつてのはねえ……ちょっと、

凄いわよ？」

「なんだ

なんだか私、凄いらしいです。

……ふうさん。

いや、まあぶつちやけ……それが、って話なんだけど。

だって別にだからって女の子にもてるわけでもないしねえ……今  
だってこいつしてきやいのきやいのしてられるのは珍獸扱いされてる  
だけだらうじ。

「う、う、鬱だ。

どうせなら「この子……私の運命の人！？」くらいの反応はして  
くれたつていいじゃねえかよ。

三姉妹丼とかいいじゃねえかよー。

駄目？

そつか、駄目か。

その道理、私の無理でこじ開ける！

こじ開ける！

大切で卑猥つぽいことなので一回言いました。えへん。

……こほん。

くだらねえこと並えすぎちまつたぜい。

「ま、そのうち機会があったら腕試しに一本やつましょ

」やつとスイが笑う。

「あ、私も」

「レナさんには面倒くさがってください。

「もちろんわたしもだ！」

びしつゝと手があがつた。

アイリスだつた。

あ、田を覚ましたんだ。

「ついで、レナはまだ？」

れよゐれよるとスイにひきずりながらアイリスが周りを見回す。

「田を覚ましたの、馬鹿姉？」

「おお、スイ。お前はどうしてわたしの腕を引っ張つているのだ？」

「あんたが馬鹿だからよ」

溜息をついて、スイがアイリスの手を離す。

「うぐ」

アイリスが床に落ちた。

「なにをする」

しかし次の瞬間アイリスは立ち上がっている。

「いつ立ちやがりましたかー」  
「いつ。

その動作一つ一つが常識超越するの勘弁してくんね？

そのうちあれだろ？

あたし散歩してくるねー！ もひー！

とか言いながら光速で星間を飛行しちゃつたりするんだろう？

……本気でやつそうだからこいつら怖えな。

「馬鹿姉も起きた」とだし、私達はそろそろ帰るわ。」の後、ちよ  
つと用事あるし

スイがそう呟つ。

「あ、そうなんだ。それじゃ、またね」  
「ええ」  
「はー」  
「……うん？」ああ

アイリスはなにがなんだかわからないようだった。

そりやずつと氣絶してたしねえ。

「緋色)つす」

一応、最後に血口紹介へりこしてあげるか。

「む。わたしはアイリスだ。よろしく頼む」  
「うん。じゃあね」  
「ああ」

そして、三姉妹は颯爽と姿を消した。

消した。

消したのだ。文字通り。

かき消えたのだ。

しつこじょうだがもう一度書つ。

消えたんだつて。

……転送の魔術が発動した気配とかはなかつた。

化物が。

やつぱりあの三姉妹は敵にまわしかいやいけない。

そう心に誓つ。

「とこりで、ナコタ」

「うん?」

私は隣のナコタを見る。

「私達は、どこに向かつてるんだい?」

「あ、言つてなかつたつけ?」

「言つてませんね」

ソウが冷静に口づけむ。

「あはは、『めん』『めん』  
『いやべつにいいんだけど』

案内されてる身だしね。

「これから、緋色の住居を探しに行くのです」

「私の、住所？」

「はい」

あー。まあそうだよね。

こつまでもナコタの家にお世話をなつていいわけにもいかないし。

「でも私、金とか持つてないんだけど?」

「基本的に学園世界では家賃などはありません。洋服や部屋があれば、好きに入居できます」

「まじか」

なにその夢世界。

「まあ食費などは必要なので、その「ひり稼ぐ」必要はあるでしょうが」「稼ぐって、どうやるの?」

「ギルド」とこいつのは通常で、教務科で任務を受ければ「任務?」

首を傾げる。

ギルドの任務。

まあ、一コアンスとしては分かるけどね。

「学園世界は、この学園の外に多くの魔物が存在します。大抵は、それを決められた数討伐する、というものですね。他にも他の世界に行つて様々な課題をクリアしたり、時には先日の異界の破壊神襲来のような緊急の任務がある」ともあります」

「ふむふむ」

なんていうか……つまりお決まりな感じのことですね。

「緋色なじすすべにお金稼げるよ」

「そう?」

ナコタがそう言つてくれるなら、ちょっと安心かな。

まあ、なんとかなるでしょ。

気楽に構えておひつ。

「とりあえず、住居を決めてから。それから今後の事は決めよひつよ。  
「そだね」

といふわけで、私達は再び歩き出した。

「といひで、住居ついでひつで探せんのへ。  
「それも教務課で探せせるよ

まつ。

どうやら教務課つてのは、この学園の中心のよひなきのうじい。

どんな場所なのかなー。

## 教務課にはつ！

教務課。

案外普通の場所でした。

ちよつとがつくり。

もつとこいつ…… すぐえのを想像してたんですよ。

例えばすげえ未来的な…… SFみたいにいくつも空中にスクリーンが浮いてたり？

でも実際には…… ふつーのカウンター。

なんていうか、銀行とか市役所とか、そういう感じ。

……整理番号配る機械まで置かれてーーら。

学園世界…… もつなんか統一感なさすぎだよ。

もつとこいつ…… ねえ？

「棘ヶ峰緋色、特別クラス、ね」

カウンターに座る私を、前に座る女性がちらりと私を見る。

その綺麗な田に思わずじれつとした。

つていうか銀髪ボーネつて……あの人を想像せらんだけど……。

雰囲氣もちよつと似てる?

「緋色つて呼んども?」

「あ、はい」

「わう。 それじゃあ緋色……私のところに泊まりなさい?」

「……へ?」

なんだと?

えつと……え?

うん?

んー?

ええと……うん。

「どういう意味ですか?」

「分からぬ?」

そつとその人が私の頬に触ってきた。

「……………妻と話しましたか？」

「……………」これはなんていつかゞ十八な感じー…?

「ほひ、コレーカと。アヒコヒ「只談論つてるとまたコレーカを怒らせてほひほひしてわざわざ「つむ?」

コレーカん?

……あ、アヒコエバナコタ、佳耶先生のひとそんなんふうに呼んでたつけ。

「ふんむ?」

けれどもして私が彼女コレーカとこひがっこじ口説かれたら、佳耶先生が怒るんだ?

「大丈夫よ。私の妻は怒つても可愛この」

くすりとっこーさんが笑う。

……お?

妻?

……………妻と話しましたか?

「Jの流れで妻つてーと……佳耶先生のJと、だよね？」

「ういえばJの世界って、同性婚あり、だっけ？」

「え、そうじつJと？」

「ま、まじで！？」

「M A J I D E ! ?」

「なんていじつたーい。」

「そんな馬鹿なことがあるのかいとつあーん。」

「つまりフリーさん……私とのJとは、遊びだったのね！」

「あら、本気にしてもいいの？」

「ちなみにJの世界、重婚もありだから」

驚愕の新事実発覚。

ハーレムが……公式で認められている、だと？

へへ…… やるじやねえか、学園世界。

「うなつたら私は……！」

「でもレーさん独占欲あれで強いから……もしリリーさんとくつつかなら、まずはレーさん倒さないと駄目だと思うよ?」

「私などがリリーさんとだなんてそんなおこがましい」

平伏しましたが、なにか?

ええ。

無理ですって、あの人に勝つとか。

殺される。マジで殺される。

「賢明な判断かと。あの人は、ナユタでも敵わない強者ですから」「む、余計なことはいわなくていいよ。ソウ」

ちょっとナユタが頬を膨らませる。

ナユタでも勝てない。

つまり異界の破壊神とか(笑)ってことで……。

そんな人と敵対なんて出来るかあああああああああああああああ!

「残念」

リリーさんが肩をすくめる。

「せ、ソニー。なにがほつてんのよー。」

すると、教務課の奥のほうから一人の女の人気が歩いてきた。

「あら、悠希……」

「混んできたんだから、さうせとわざかなさこよ」

言われ、私は後ろを振り返る。

ほんとだ。

確かに教務課の待ち合いが増えていた。

「なに? 住居案内?」

その人がリリーさんの手元の書類を覗きこむ。

「ええ。新入りさんらしいわ」

「ああ……臣護が言つてた……」

おや、ここの人は臣護先生のお知り合い？

「初めまして。私は嶋掲悠希。よろしくね」

そう言って、悠希さんが手を差し出してきた。

「ああ、これは『一』十一番だ」

握手する。

……ん？

嶋掲？

嶋掲と言いましたかこの人。

「ええと……臣護先生とは、『兄妹とかで？』

尋ねると、悠希さんがにやつと笑つ。

「そう見える?」

「……あー」

「」の反応つて……つまつ……。

「私は臣護の妻よ」

やつぱつなあ……。

「」の人気が噂の奥やん……。

うわあ、すげえ。

臣護さんめっちゃ美人さんと結婚してんじゃん。

なんていうか……凜、って感じ?

「それで、住居を探してるんでしょ? どんなところがいいの?」

あ、やつこややつこいつ田的で私にいいいるんだっけ。

ふと思いつ出して、私はどんな部屋に住みたいか考える。

んー、どうせ家賃とかはタダつていいし……。

あ、でも広すぎるところに住んでもなんだかなあ……私つて庶民  
だし、きっと落ち着かない。

やつなると……。

「小さいアパートの畳の部屋とかいいですね。八畳間に、まあそこそこまともな風呂とかがついてたらいいつかなー？」

「そんなのでいいの？」

隣でナコタが驚いたよつた顔をする。

「うん。このくらいが女子高生の一人暮らしには相応でしょ」

こんな世界で女子高生云々とか関係ないかもしねないけど。

「謙虚ね……それなりこの部屋なんか丁度いいんじゃない?」

悠希さんの前に仮想モニターが浮かぶ。

……あれ?

仮想モニター使つなら、リリーさんの手元の書類はなんのために用意されたんだろ。

「とつあえず形から入つてみよつと思つてね」

考えを読みとったかのよつこーさん<sup>が書類を</sup>「スクの下に  
まつ。

フリーダムだな。

苦笑しながら、私はモニターに目を向ける。

表示された情報は……くえ。

なんかいい感じの部屋だ。

学園にも普通に歩いて通える距離にあるし、周りにはいろんな店  
があるらしい。まあ転送が仕えるこの世界じゃそういうことに価値  
はないのかもしけないけれど、なんかやつぱりそういう付加価値つ  
ていい感じがする。

思い立つたが吉田……まだ違つな。

即断即決！

「いじします」

「オッケー」

頷いて、悠希さんがリリーさんの肩を叩く。

「それじゃ、あと手続きをよろしく。私はこれから班と食事だか

らあがるわ

「職務放棄？」

「私の仕事は全部終わつたわよ」

「いつもより、随分と仕事が早いのね」

「愛の力よ」

笑い、悠希さんが歩き出す。

「それじゃ あね」

ひらひらと手を振りながら、悠希さんが教務課を出ていく。

……な、なんだあの人。

愛の力とか平然と言つなんて……ちょっとかっこいいぞ。

つか公然ののろけ……。

羨ましいなあ田護先生！

「私も佳耶と食事に行きたいわ」

「レーさんと食事行つたりしないの？」

「佳耶、仕事人間だから……生徒を育てるのが日々に生き甲斐になつちやつてるみたいで……はあ

リリーさんが溜息をつく。

「私の方からそれとなくリリーさんが寂しがってたつて言つておくれ

よ

「本当?」

リリーさんの目が輝く。

「おねがいしてもいいかしら?」

「うん。だから、しつかりと仕事をしてね」

口元を吊り上げ、リリーさんが頷く。

「わい。それじゃあ緋色、まずは規約なんかの確認から始めるわよ

」

そこからでればきっとリリーさんは仕事をしてくれた。

あー。

とつあえず、住居ゲット!

いえー!

無暗にエログッズ隠す。

我が家はっ！

「おおつ、ここが我が城！」

転位を駆使して辺りついた自宅に入り、私は畳みの匂いを目一杯吸いこんだ。

うへー、いいわー。

これいいわー。

いいわー。

大切なことなので三度言いました。

いいわー。

そして四回目。

「うーん、ほんとにここでよかつたの、緋色」

ナユタが部屋の入り口に立つて、不思議そうに言つ。

「ナユタはこの部屋の素晴らしさがわからんかねー」

「せにや笑いながら私は置みの上に、ダイブして、『ぐるぐると転がる。

いいわー。

もうなんていうか、興奮するわー。

置の匂いってなんかいやらしい！

……え、そんなことない？

そんなことあるんだよー！ 私の中じゃなー！

まあ適当に言つたけどー！

てへへ。

「ま、緋色が満足してるなりここけどね」

ナコタが微笑む。

「ーん、相変わらず可愛らしこ笑顔だことで。

「とりあえず最低限の家具は用意してあるよ! ですね」

ソウが部屋の中を覗いて囁く。

確かに、机とかタンスとかはあるし、布団も部屋の隅のたたんである。

「これなら、本当に最低限ではあるけれど、生活するのに問題はないかな？」

「どうする？ なんならもうしばらくなつてもいいから。」

「んー」

ナコタの提案に、ちよつと悩む。

ぶつちやけ、魅力的だよな。その提案。

美少女の家にこながつこめるなんてそれなんてエロゲ？

……まあでも、実際にこながつこまで世話をかけるのもどうかと思つ。

「うして家まで用意できたわけだし、ここひで強がり一つくらうしておいたほうが恰好がつくだろう。」

わすがに甘えてばかりといつわけにもいかないし。

うん、決めた。

「いいよ。とりあえず一人暮らしだしてみる。お金は、明日にでもギ

ルドの仕事を受けてみる。それでもとまつた金が出来たらいろいろ買い物してみよつかな」

さすがに最低限のものだけあればいい、なんて言つ程女捨ててないしねー。

それなりに部屋の内装には気をつけたことじゅうだ。

実はアロマとかが趣味だつたりするのだぜ？

今意外と思つたどこの誰かをぶつとぼやく。

……「ほん！

いかんいかん、電波を受信してしまった。

他にも下着とか、見につける物も用意しなきゃだし。

「そつか……それじゃ、その買に物には付合わせてよ？」

「お、いいの？」

「うん、その辺りも少しなら案内はできるから

「そりやありがたい」

その時は是非とも試着室でナコタのことを襲ふ　「ほん！・

「どうあえず、緋色。学生服出して？」

「うん？」

言われて学生証を出す。

すると、ナコタも学生証を取り出し、私のそれに重ねてきた。

青い光が学生証から発せられた。

光はすぐにおそれる。

「……なにしたの？」

学生証に、一見して変化は起きていない。

「ま、ちょっとばかり餞別として、食費をね」  
「え」

ナコタがウインクする。

ついで、ちょっとだけと。

「私はヒモになるつもりはないよ？」

「無期限無利子で貸すだけだよ」

「えー」

それはなんといふか……。

「受け取つて置いてください。ナコタの好意なのですから」

ソウで言われやあこれ以上はなにも言えないとじやないか。

「それじゃあ、ありがたく」

「うん。ま、緋色ならすぐ立てできるから、返済はすぐだひつねえ」

「地味にフレッシュナーを……」

この学園の授業を覗いたら、もう全然そういうことがなくなつたんですけど。

「ふふつ、頑張れ、緋色」

「…………そりゃまあ、頑張るけど」

ナコタが身を翻す。

「それじゃ、そのうち遊びこへるね  
「おーう、来い来い」

「どうか来てください。

やつぱり分からなこととかこころあるしねえ。

立ち上がって、ナコタに小さく手を振る。

ナコタが手を振り返してくれた。

ソウが先に部屋から出ていく。

「じゃね

「うそ」

ナコタが部屋を出て扉にてをかける。

「うーん」

「あれ、どうかした?」

「うん? うーん、まあ一応聞いておいた方がいいかと迷ってね  
「……?」

「ほつて、なにをだらつか。

「ねえ、緋色」

「なんでしょう？」

「……強くなつてね」

「は？」

「は？」

いきなり、なにを言いだすのだろう。

「あの人達だけじゃ……せつと足りないから。私達じゃ、届かない  
から。だから、緋色にお願いをせて」

「……？」

ええと、よく分からんだけど？

なにを言われているのだろう、私は。

「……ふふつ」

ナコタが微笑む。

その笑みが、ビートなく寂しそうに見えた。

「お角違いなのは、分かってるけど……なんでだろうね。緋色は、  
の人とおなじ匂いがする」

「に、匂い？」

なんの江北。さす。

「期待したりやつよ、緋色。別にいいよな?」

「え……あの?」

ばたん、ヒ。

扉が閉じた。

「……ええ?」

えつと、つかづきひこいれとへ。

まるで分からなーんですけど……。

う、うう?~

あー……まあ、構えても分からないんだし、置いておくか。

ぶつけやけ、不穏な空氣を感じるナビ、それも置いておこう。

こめはめめ、この異世界生活を楽しもへ。

……楽しめたひ、いいなあ。

え、これフラグ？

+

緋色と分かれたあと、私は校舎の中を走っていていた。

向かう先は、理事の一人、……総合技術クラスの最高責任者の部屋。その部屋の扉の前に立つて、深呼吸を一つする。

「大丈夫ですか？」

隣のソウが声を賭けてくれた。

「……うん」

あの人には、ちょっと緊張するけどね。

扉をノックする。

「入りなさい」

扉の向こうから聞こえた声に従い、部屋にはいる。

中は、ツクハさんの部屋と同じような感じ。

ただツクハさんのところより、幾分か堅苦しい空気が流れていた。

それはこの部屋の主のせいだろう。

「……珍しく、呼び出しに応じたのね？」

「今日は機嫌がよかつたからね」

机に座つたその人が、私を見つめた。

金色の髪が揺れる。

ウル＝バルカングローヴ。

それが、この人の名前。

「ふうん？ なら、その『機嫌ついでにいい加減、教えて欲しいのよね』

私の事を、鋭い視線が貫く。

「あなたの生みの親の居場所……吐いてくれない？」

「駄目」

即答する。

他のどんな質問にも応えていいけれど、それだけは、教えられないと。

「……いい加減、力づくとこう手も考えた方がいいかしら？」

「どうぞ？ 私はどれだけほいほいこれでも、言わないから」

「……あなたといつ子は」

深い溜息を吐かれた。

と、ソウが私の前に立つ。

「ソウ？」

「……これ以上は無駄とご理解ください」

不意にソウの手の中に金色の粒子がつまれ、それが漆黒の剣を作る。

なにもかもを塗り潰すような、美しい黒。

黒い剣尖が持ちあがる。

「 私に刃を向けるの？」

「ナコタの障害は斬り伏せ、と、いつ使命を受けていますので」

「敵うとでも？」

「いいえ。ですが、あなたがこのよつなどこりで愚かしく力を振るうとは考えていません」

「……やな性格ね」

「それほどでも」

ソウの口元に小さな笑みが浮かぶ。

「それでは私達はこれで」

ソウの手の中から剣が消える。

そのまま、ソウに促されるように私は部屋の扉を開く。

「……ナコタ」

声をかけられて、止まる。

「《顯現》は使えるよつになつた？」

「ど」となく、意地の悪い瞳が私を見ていた。

……ふん。

「それなら、六つできるから大丈夫だよ」

+

「それを《顯現》と呼べないと、いつになつたら気が付くのかしら……あの子は」

ナコタ達が出て来てからしばらぐして、そう齒く。

すると、扉が開かれた。

入ってきたのは……、

「アリーーゼ。ノックくらいしたら?」

「そう堅いことを言つたな。ナコタがここに来たと聞いてな……もつ帰つたが」

「ええ」

「そうか」

アリーーゼが少し残念そうな顔をする。

まつたく……甘いわね。

「それで、聞かせたか?」

「出来たと思つ?」

「……その顔を見て分かったよ」

「ふん」

長い付き合いだし、わざわざ言葉にする用也没有。か。

「なんていうか……ぶっちゃけ、あいつとこちやこちやしたい気分だわ」

「また堂々と言つものだな」

「今更言葉を飾つたりしないわよ」

「……ふ」

アリー・ゼが小さく笑う。

「しかし……ナコタが早く教えてくれないと、私達としても困ってしまう」

「そうね……」

溜息を吐く。

「……そういえば、聞いたか?」

最近、溜息の回数が増えてきた気がする。

「んー？」

「新しく特別クラスに所属した少女は、あいつに招かれた、という話だ」

「へ？」

ちょっと……なにそれ。初耳なんだけど。

あいつの招きついで……。

「……ええー?」

思わず大声をあげてしまう。

「そう驚くな」

「驚くわよ！」

「まあ、それもそうか。わざわざあいつが、だしな」

「なに考えてるのあいつー！」

「さて」

アリーゼが苦笑する。

「あいつの考えることなど、私達に分かるわけないだろ? ついでに、直接聞くしかないだろ?」

「 知り

「あー」

そりやそつか。

身体から力が抜けれる。

「……………まったく…………いろいろあつすかぎよ」

新生活はっ！

裂く。

裂かれる。

潰す。

潰される。

斬る。

斬られる。

抉る。

抉られる。

貫く。

貫かれる。

壊す。

壊される。

殺す。

殺される。

消す。

消す。

消す。

淡々と繰り返す。

それは作業。

行程を消化するためだけに流れしていく時間。

終わりはない。

終わらせない。

いつまでだつて、続けよう。

感情もなく。

ただ、それだけを行う機械として。

+

「 つー?」

飛び起きる。

「え？」

つて、あら？

「こはどー、わたしはだれ？」

……あ。

そつか。そういうえば私、異世界で一人暮らし始めたんだっけ。

「うむ。

……なんかいやな夢を見た気がするぞ？

「まあいつか」

言つて、ふとんから這い出る。

そのまま備え付けの小さな冷蔵庫のところまで行って、中から飲むヨーグルトを取り出す。

朝はこれですよ。

……まあ単に朝飯をつくんのがめんどーなんだけどー。

ストローで飲むヨーグルトを飲む。表現がなんかおかしい。仕方

ないけど。

「ひむ。

田舎へ、どうひとしてて……ん、おいしい。

「ちゅ……ん、ふ、わや……くわよ……」

卑猥な音を立てる意味は特になー！

だがどこかの誰かに私はおひねりを要求しますー！

……なこを考えているんだ。

ふつ。一人暮らし最初の朝でテンションあがつてゐるのかな。

「いえーい

「いえーい

おんや？

……なんか今、私の声じゃない声がどこからか聞こえた気が……。

気のせいだらつか。

といつか飲むヨーグルト出してから冷蔵庫あけっぱだつた。

閉めないとな。

冷蔵庫の扉を閉じる。

と、その扉の影にちいさな人影がしゃがみこんできた。

「つてえええええええええええええええええええい！？」

ホラー！？

え、こんなファンタジー路線な世界でホラー！？

い  
や  
！

ええ！

「嘘だけど、てへつ

ペルツと舌を出してみたり。

あん、舌の上に飲みこんでなかつた飲むヨーグルトが……垂れちやう。

白て白濁をすする。

……おひねりね！

最低千円からー。

つと、そんな電波言つてゐる場合じやねえ。

私は冷蔵庫の影から現れた怪奇！ 冷蔵庫人間に視線を向けた。

……ふむ。

くりつとした瞳。

艶やかな髪はいい感じにウェーブがかかってる。

服装は、けつこつ大胆。

基本は黒いコートなんだけど……。

胸元とかふとももとか結構見えちゃつてますよ？

いいんですか？

見ちゃいますよ？

……とうえず一言。

「つむ、美少女であるー。」

「……？」

彼女が首を傾げた。

ゆつくつと立ち上がり、私より頭一つ低い高さの彼女の瞳が私を見た。

「はじめまして、私は茉莉<sup>まつり</sup>……」

彼女 茉莉が私に手を差し出して来る。

「おお、これは芷<sup>ひ</sup>。緋色です」

もちろん美少女との握手に否はない。

握手。

ぶんぶん。

茉莉が手を上下に振るつ。

そして放される。

なんていうか無邪気な握手だった。

「……で、一つ聞いていいかな?」

「ん?」

茉莉が「ん」と首をかしげる。

……え、なにこの子かわいい。

「えつと……どうやつて茉莉は私の部屋に入ったの?」

私、昨日はちゃんと飲むヨーグルト十本買って家に戻ってきて寝る前に鍵閉めたんだけど。

「ん」

茉莉が玄関を指差す。

……うん。

えつと?

おおう?

「な、なんじや」つやああああああああああああああああああー。」

げ、玄関のドアが……なくなってる！？

つか、なんか砕けた木片が辺りに転がってる！？

これもしかして扉の残骸！？

よく今まで気付かなかつたな私！

「ノックしたら、開いた」

「これがこの世界の開いたといつ現象なのか！？」

それは勘弁してください。

ノックされる度にドアの修繕をしろと？

「……脆い」

「そんな馬鹿な！」

木製でも扉は扉だよ？

ノックでこんな木端微塵になるものなわけがない。

「……これは、迷惑？」

「……あー」

そんな無垢な田で聞かないでよう。

頷けるわけねえ。

でも、茉莉は私の態度からなにかを察したのか、少し俯くと、片手を机のほうに差しだした。

次の瞬間、巻き戻したいに木端が集まって扉になつた。

おおつ。

「修復つすか。手際いいねー」

私でもこんな綺麗に修復は出来ないよ。

基本、私つて破壊特化だし?

まあそのうち練習してもいいかもね。

「どうもですー。」

びしつと茉莉に敬礼。

「……私がやつちやつたから」

無表情にみえて、どうとなく茉莉の表情はきまづそつに見えた。

「気にしない気にしない！」

茉莉の背中を叩く。

「ところで、茉莉はまたどういつ理由で私の部屋に？」

「……面白い人がきたから会つてきたり、って言われたから  
『言われた……誰に？』

あと私はそんな面白い人じゃねえぞ。

素敵な人さつ！

……自分で言つてて残念な気分になつてしまつた。うぐう。

「いろんな人」

「ほほう」

いろんな人、ですか。

心当たつばかりもあるな。

……まあいいか。

「ちなみに、特別クラスだつたりある？」

今まで出会つたのが教師だつたり特別クラス所属ばかりだつたので、一応聞いてみる。

なんか実力半端なやつだし。

茉莉がゆつくつと首を横に振つた。

あ、違つんだ。

「私は生徒じやなくて……教師」

なんとなー？

「んなかわいい子が教師とは。

」の学園、やるなあ。

「いちお、特別クラスの担任

「え、まじで？」

「Jの子が特別クラスの担任なの？」

「へー。」

「すげえ、んだよね？」

「……うーむ。」

「茉莉、強いの？」

「ナコタ以上、ライスケさん以下」

端的な答えが帰つて來た。

「うん、つまりすげえってことだな！」

「……えーと、それで茉莉……先生は」  
「茉莉でいい」  
「……じゃあ、茉莉は私を見に來ただけなの？」  
「……ん」

「Jぐり、と茉莉が頷く。」

「う、なんだこの小動物系。」

かわこすきて抱きしめたこそ。

「じゅあむへ歸る?」

「……」

茉莉が天井を見上げる。

どうやらなにか悩んでるらしい。

「今日は、わざと暇」

「……ひみつ」

これはあれですか?

今選択肢出でやつてる感じ?

「……このまま一緒にお出かけ。

」「……このまま一緒にお出かけ。」

「……告白。」

やめ。

「とりあえず」「」は段階を踏んで「」を選択しようが！

「ぶつちやけいろいろまだ分からない」とびまっかりだし、誰か一緒にいてくれると心強いんだよねー。

「ちなみに私、今日はギルドでなんかお金稼ぎしたいんだけど……付き合つてくれない？」

「構わない」

即答された。

「生徒を引率するのも先生の役目」

あー。

なんだろ。

茉莉が先生の役目なんて言つてると……背伸びしてゐみたいでかわいい。

うーん。

「いやつ」

「……？」

とりあえず抱きついてみた。

茉莉は首を傾げただけで、特に抵抗はなかった。

あー、これいいわー。

ちなみに。

五分後、いい加減に離れて、と引きはがされるまで私は抱きつきっぱなしだった。

その際に私の肋骨が一本折れたんだが……まあ茉莉なので許す。

どうせ私の身体つて心臓の一つ一つくらいなら破壊されてもすぐ治る感じだし。

そういう魔術を常に身体にかけてるからねえ。

ミッションはつー

上位竜種百体。これがなんのことか、分かるかなつ？

シンキングターム。

うんたんうんたん！

お前に足りないもの！

それは以下略、そしてなによついつー

以下略！

はいシンキングタイム終了！

皆、分かつたかな！

ようし、正解発表だ！

正解は……私が最初に受けたミッションの討伐対象でした！

「……つて」

拳を握りしめる。

私は青空を飛んでいた。

音速の一十二倍で。

その速度のまま、思いきり目の前にいたサファイヤで出来ている  
かのような綺麗な巨躯をぶんぬぐる。

巨躯が一瞬で塵になつた。

上位竜種…… それも世界が世界ならば勇者が倒す魔王以上、つまり裏ボス的強さを持つた存在である。

それが、私を囮るように百体近く飛行していた。

？」  
？

そこで首を傾げないでください、茉莉さん。

茉莉はなに一つ気負う様子もなく、ぼんやりと空を飛んでいた。

今絶賛戦闘中ですけど！？

それでいいんですかねえ！？

「……ハード？」

「セリヤ カツー！」

言いながら、竜を一匹殴り殺す。

つか武器一 なにか武器が欲しいとです！

「……イージーモード」

「こやなにがーー？」

もしかしてこの状況のこと？

いやいやいや。

「ど！」がイージーですかー！」

叫び、巨大な魔力の刃を生み出して竜を十体程度まとめて切断する。

「やつぱつ、イージー」

「ど！」をど！見ればイージーだとーー？」

「もう半分くらい減ってるあたり

「く？」

言われて、私は周りを見回した。

ええと……あれ？

最初と比べると、なんか竜の数が減ったよくな……。

「緋色が喋りながら倒してた」

「え？」

マジで？

自覚ないんだけど……もしかして無意識のついに結構やつりやつてた？

ハードモードだと思つたのつて、竜戻りについて情報が頭にきて目がくらんでただけ？

そういうや、わざわざから竜を素手で消し飛ばしたりしてこの気がしないもない。

あと攻撃くらつてもオートで防御出来りやつてこの気が……。

あれ？

やしかしてこれ、ほんと『イージーモード』。

「緋色は強いから、この五倍は数がいても問題ない」  
「せりや言ことわざじょー。」

+

「おせよー、」やれこめーす」

茉莉とともに、私は教務課を訪れていた。

カウンターには田舎先生の奥さんである悠希さんが眠そうな顔で  
仮想モニタをこじついていた。

私に気付いて悠希さんが仮想モニタを消す。

「あ、緋色じゃな」。どうしたの?  
「いや、ちょっと労働しようかと  
「ああ……」

それだけで悠希さんにほんとうに会ったようだつた。

「それなら、はい」

私の前に仮想モニタが現れる。

そのモニタに細かな文字が大量に浮かび、上に流れしていく。

「今あるあんたが受けられぬシショソはそれだけよ

……それだけ、つて軽く干はありますよね？」

おおい、Jの中かいりシショソを探せ、と。

「ええ、と……討伐的な分類のだけって見れます？」

「早速討伐？自信家なのね」

いやりと悠希さんが笑つ。

「いやあ、まあ、一応軽く戦つ」となら出来るんで……手っ取り早  
そうですね」

「ふうん……茉莉は同行するの？」

悠希さんが茉莉に問つ。

「……」

茉莉が小さく頷いた。

「そ。なら最高ランクまでの討伐系を受けられるわね  
「ん、どうこいつですか?」

最高ランクつて……。

「学園の生徒は全員ランク付けがされてるの。FからSランクまでの七つでね。緋色は今、最低ランクのFで大したものは受けられなければ、Sランクの茉莉が同行するなりそつちに合わせて高ランクのミッションも受けられるわ」

「へえ

「で、どれにする?」

田の前に仮想モニタにミッションがずらりと表示される。

うーん……。

ぶっちゃけ、どれがどれだか分からんんだけど。

「茉莉、なにか手頃なのない?」  
「……なら

茉莉が横から仮想モニタを操作する。

そして、一つのミッションを選択した。

「それを受注するのね？」

悠希さんがどこか呆れたような顔をする。

……あ、なんかやばい予感がしてきた。

「ちょ、茉莉、待つ」

「……」

私の制止も聞かず、茉莉が頷いてしまう。

「それじゃ、このミッションをあんた達一人に任せると。内容は、ここから少し離れた所に巨大な巣を作った上位竜種約百匹の討伐。よろしくね」

「へ？」

上位竜種？

「ええと……響きからして凶悪な感じなのですが、上位竜種とはなんでしょうか？」

おそるおそる尋ねる。

「ひとつと悠希さんが笑う。

背筋に寒気がはしる。

「それはね」

そして、私は上位竜種の強さを聞いて絶望することになった。

+

……んだけど。

「案外いけるわー」

腕を振るつ。

魔力の暴風が竜の一体に襲いかかり、その巨躯がミニキサーにかけられたよつに粉々になる。

よくよく考えたら、私って大陸殲滅魔術とか使えるし、裏ボスだらうがなんだろうが問題なさげなんだっけか。

……あの学園の授業見てから、自分の能力を過小評価していたらしい。

そうだよね、大陸殲滅とか、けつこう凄いよね？

私ちょっとくらい自信持つてもいい感じだよね？

少なくともRPGゲームなら間違いなくバランスブレイカーにされる感じだよねえ？

「……ちなみに茉莉、これってランクはなんだっけ？」

「……B」

あー、これでBなんだ。

裏ボスみたいな強さのやつが百匹でB。

うん、この世界で裏ボスなんてそんなものなのか。

仕方ないな！

仕方ないって思っちゃうところが仕方ないなって思っちゃうところが以下エンドレス。

仕方ないって思っちゃうところが仕方ないなって思っちゃうところが以下エンドレス。

「よつ、と」

魔力を掌の中に圧縮すると、そこに黒いなにかが発生する。

高密度の魔力によつて、あつとあらゆるものを消滅させる概念が  
生み出されているのだ。

それを砲撃のように放ち、竜三体を消滅させる。

「つづむ。

残り二十体か。

よつし、頑張るかね！

とか思つていたら、今まで静かにしていた茉莉が動いた。

「見てたらちよつと、身体を動かしたくなつた」

茉莉が私を見る。

「残り、もうつていい？」

「え、あ、そりやあもちうんいいけど……」

次の瞬間。

茉莉が竜の一体の尻尾を掴み、他の竜にその竜を投げつけた。

ぐしゃり、といつ音がして潰れた血肉が落下していく。

ひょ？

さらに、茉莉の姿が消えて、直後なにが起きたのか、突如竜が数体水風船のように破裂した。

虚空から黒い光線が雨のように降り注ぎ竜をまとめて薙ぎ払つて行く。

残りの竜は、一体。

ほんの数瞬のことだった。

それだけで、あれだけいた竜が一体を覗いて殲滅される。

おいおい。

そんなの、あり？

残り一体の竜の前に、茉莉がいた。

竜が咆哮をあげ、茉莉に向けて口から白い炎を吐きだす。

逃げることはできないと、悟ったのだ。

茉莉は動かない。

ただ、その右手がゆっくりと持ちあがる。

白い炎が茉莉を包む。

だが、その炎の中で茉莉は微動だにせず、服を焦がすこともなく、  
浮かんでいた。

竜の瞳に、わけのわからないものを田の前にした恐怖の色が浮か  
ぶ。

「

茉莉の口が、動く。

……なにか呟いた？

刹那。

なにかが起きた。

黒い暴風が吹き荒れる。

「ひ……！」

恐怖が私の心を塗りあげた。

なに、これ……！？

暴風が私の視界を遮る。

少しして、暴風が収まる。

開けた視界の中……それでは……。

竜は消え、茉莉が変わりなく浮かんでいた。

「……終わり」

茉莉の身体から、光の粒子がこぼれる。

「……なにしたの？」

「……すぐに緋色も分かる」

「え？」

「緋色は、どうありたい？」

「……それ、どういうこと？」

「うん、なんでもない」

……ええと？

「………… ひとりあえず、歸る？」

考へても答へは出なかつたので、やうに提案する。

「……」

茉莉が頷いた。

買い物にはつー

「…………ねねつー。」

教務課で報酬を受け取った私は、廊下に出て、学生証を取り出す。すると学生証の上に小さな仮想モニータが現れ、学生証の中にある金額を表示した。

「…………とんでもねえ」

「この世界の通貨価値を日本に換算してみると……その額は、私なんかが一生働いて稼げるかどうかといつ額になる。」

「これ日本円に両替できないかなあ」

そしたらしばらへ豪遊しながら生きていくれる。

「その分、武器などは破格の値段がするものもある

横から茉莉がぼそりと言つた。

「 そなの? .」

茉莉が頷く。

「 まあ…… 武器を必要としない強さがあれば問題ないけれど  
「 セリヤ セリヤだけじ…… 私はまだまだセリヤじゃないかなあ」

苦笑する。

まあ、茉莉なんかはさきつとその武器を必要としない強さに到達してこるのである。

私も田舎すべきといふのはそこなものだらうか。

セリヤだとちよつと憂鬱だ。

どうやつたらあんな化け物じみた強さが手に入るのか。

「 これがセリヤの? .」

「 んー」

学生証をポケットにしまって、考える。

時間は毎。

余裕はあるし……そうだな。

「買い物にでも行」うかな」

「買い物？」

「うん。まだ家具とか最低限しかないし。小物なんかも揃えておきたいしね」

「そう……それじゃあ

「あ、おい茉莉」

茉莉の言葉を遮る声が合つた。

声のした方を見る。

そちらから、田護先生が歩いてきていた。

「なんだ、もう緋色と短つ合つたのか？」

田護先生がそういひと、茉莉が小刻みに小さく頷いた。

……つて、あれ？

なんか茉莉、顔がちょっと赤いよつな……。

え？

……も、もしかして……茉莉、やつこひとなのー…?

いや、でも臣護先生には悠希さんか……！？

え、ええー？

修羅場？ これが噂に聞く修羅場といつやつ！？

教師の職場恋愛！ けれど男教師には既に妻が！ それでも諦められない女教師！

冒ドラ的展開だな！

とか思つてゐると、横から軽く肩を叩かれた。

「……尊敬」

「お？」

えつと……尊敬つて……？

……あ、もしかして茉莉は臣護先生が好きなんじゃなく、尊敬しているつてこと？

あー、なるほど。

尊敬の方向つすか。

……シマンボ。

「……ん！」

「……ん！」

もう一回肩を叩かれた。

ちよつち痛かったです。

「どうした？」

「……なんでもない」

田護先生が不思議そうな顔をすると、茉莉が首を横に何度も振る  
う。

……なんだこの様子、かわいい。

小動物具合がさらにぐんと上昇していくんですけど。

「そういえば茉莉。これから久しぶりにいつもの面子で模擬戦する  
んだが、混ざるか？」

「……！」

ぶんぶんと茉莉が首を縦に振るひ。

なんか精一杯な感じがこれまたかわいい。

うへへ。

「 そ う か。 そ れ じ ゃ あ 行 く か ? 」  
「 ん 」

茉莉が私を見る。

「 …… そ う じ つ 」 と

「 あ、 うん 」

「 買 い 物 、 頑 張 つ て 」

行つて、茉莉は臣護先生のあとについていった。

……あー、臣護先生羨ましい。

私もあんな風にちょこちよこ後についてきてほしになあ。

……さて。

「 そ れ じ ゃ あ 、 買 い 物 い き ま す か …… つ と 」

とほいえ、一人で買い物というのも味気ない。

そもそもこの世界のどこで買い物が出来るのかも見当がつかない  
し、ここはあれだよね。

頼りになる人を呼ぼう！

仮想モニタを出して、連絡の取れる相手を表示する。

ゲームならここで選択しが出でるところだな！

- ・ソウ
- ・ナユタ
- ・アイリス
- ・エレナ
- ・スイ
- ・やつぱり一人で

みたいな？

んー……。

まあでも、ここはナユタだよね。

買い物行く時は一緒に行こうか、みたいなことを言つてもうひつしね。

といふわけで早速ナコタに連絡を取る。

仮想モニタに表示されたナコタの名前に触れると、通信中といつ文字が浮かぶ。

しばらく電話のホール音が聞こえる。

『どうしたの、緋色』

そして、ナコタの声が聞こえてきた。

「あ、ナコタ？ 今暇？」

『うん、暇だけど？』

「そつか。それじゃあさ、今から買い物いかない？ ひょっとお金が準備出来たから。あと、借りたお金も返すよ

『もう？ 随分早かつたね』

「うん。茉莉に手伝つてもうつたんだ？」

『あ、そつなんだ。なるほど』

茉莉とこう名前が出ただけでナコタは全て納得したりしき。

『それじゃ、ちよつと待つて、今そつち行くから』

「オッケー」

「お待たせ」

「うんええええええええええええいーーー」

いきなり後ろにナユタが経っていた。

お待たせって……いや待つてないしー

「は、早い！？」

「んー。急いで来たからね」

「こりとナユタが笑う。

そのナユタの後ろにはソウが静かに立っていた。

今日もクールビューティーですね。

「あ、それじゃあ緋色。早速行こうかー！」

ナユタが私の手をとる。

つて、おこおこ。そんな気軽に手を握られると思わず顔が赤くな  
つちまづちー？

「それじゃあまあ、どうに行ひつか？ 家具とか？」

「あ、うん。そうだね」

「オッケー。じゃ、ちやんといふことに紹介してあげるね」

ナコタがウインクする。

んー。

この学園、かわいい子、多いなあ。

ハーレム作りてえ……。

あくまで夢なんだけどね。

……泣ける！

「ん……むつ」

布団から這い出で、背筋を伸ばす。

「むふう」

冷蔵庫から飲むヨーグルトを出して、一気飲み。

ああ、身体の奥までねばつっこのが落ちて……。

なんひととを考えつつ窓から外を眺めて、小さな溜息をつく。

「んむ、今日もいに朝であるな」

とかちゅつと貴族気取つてみたり。

さて、今日はなにをしようかな。

「まだギルドで依頼受けとみよつかなー」

あるいは、どつかの学科にもぐらつむのもいいかも。

……まあ、あれだけど。

ナコタに案内された時の教師の人達のところにはいかないけど。

特にライスケ先生。

ありやねえわ。

+

「うぐつ！？」

「どうかしたんですか、ライスケさん？」

「……い、いや。な、なんでもない、ぞ？」

+

今、なんか言葉の槍がどこかの誰かに突き刺さった気がする。

まあいつか！

私の言葉に貫かれるならばその人も本望つてもんよー。

「さて、と」

とりあえず、指をはじく。

すると、次の瞬間私はパジャマ姿から私服になっていた。

必殺、超早着替え！

なんつってな。

まあたんに着替えるのがめんどくさいとかそういうわけだったりわけじやなかつたり。

え、乙女にあるまじき理由？

いいんだよ！ 私は乙女じやなくて乙女を狩る者 乙女ハンタ  
ーだから！

さあ今日も乙女を狩りに行こうか！

はーはつまつ、レッツパーイイイイ！

……なんでもない。

「わー」

まあやる」といなら、ナコタに連絡を取るつてのもいいか？

もしくは茉莉でもいいかも。

んー。

つか、さ。

私……交友範囲、狭くね？

いやまあまだこの世界に来て数日なわけなのでそれは当然と言え  
ば当然なんですねけど。

ちょっと、交友範囲を広げる努力とかしてみようかな

「あ」

そういうや、ソレって部活動とかってあるのかね？

ふむ。ソレいつ時は検索だ！

仮想モニタを出して、検索を起動。

「学園世界の部活、と」

検索結果が表示される。

「ふむ」

やはり膨大な数の検索結果が出た。

軽く目を通す。

「ええと……学園世界の部活の総数……いち、じゅう、ひゃく、せん、まん……力行の一番最後を発音したいがなにか世界の抑止力的なものが私の咽喉を抑えて放さない！？」

まあ嘘だけど。

とりあえず「」の世界にある部活数がどんなことは把握した。

そんじゃまあ、今日は部活巡りでもしてみますか？

つても流石にこれ全部は回れないし、私の好みにあつた部活を探すかね。

んー。

「検索、学園世界、部活、オタク、っと」

表示された大量の部活名。

「」の中から適当に行くか

巡っている中で知り合い増やしていくところ。

+

薄暗い空間。巨大な円卓を、二十人前後の人影が囲んでいた。

その人影を照らす光は、それぞれの手元にある小さなモニターの明かりのみ。

全員が、そのモニターを凝視していた。

「ふむ」

響く声が聞こえた。

「いかがかね、諸君。これは」「素晴らしいかと」「期待値は高いな」「同意にや」「我々が待ちわびるに、相応しい」「俺様が特別に許す。これは宝と呼んでいいものだとな」「しかし万が一の可能性はある」「今後の調査もぬかれぬが……まあ、決めてしまつてもよいだろう。このブランドでこの出来ならば間違いなど憶に一程度しかありえぬしのう」「それでは

モニターに表示されるもの。

それは……今度この世界で発売される新作エロゲのプロモーション映像。

ふ、ふふ。

本当にいい出来じゃねえか。

この世界、なめてたぜ。

今日は帰りにパソコン買って、明日はエロゲ漁りだな。

ぐへへ。

「ジーク・エロゲ！」

『ジーク・エロゲ！』

重なった声が闇を震わせた。

「ふ……同志、緋色。どうだね、アーカシヤ級廃人を三千人排出した我がエロゲ部に、入部しないか？」  
「君ならば、すぐにでも幹部級に」  
「いいや、あるいは大幹部すらも夢ではないだろ？」「うう」  
「ゆくゆくは、大總統の可能性もなくはない」

そんな声に、私は顔を上げた。

「汝らの言葉、嬉しく思つ。だが、私は先に進まねばならん」

ゆうべつと、私は円卓から立ち上がった。

「『I』でとまるわけにはいかんのだよ。私はね。アレを倒すために……『I』の世界を、救済するために」

『つー?』

円卓がざわめく。

「『I』、これはまさか、人の心を揺さぶる厨二病……？」

「厨二病・セカンド……！」

「ありえん！ 厨二病・セカンドの発現者はいまだ数人しか確認されておらんのだぞ！」

「ば、馬鹿な。緋色殿はすでにアーカシャ級を越え、マルドウーグ級の廃人だとでも！？」

円卓のざわめきを背中に、私は歩き出す。

『汝ら、その道を信じて進むが良い』

10

円卓に、再び衝撃が走る。

「汝らが私に…… 敵に迫いつこてへぬ！」の心の臓に新世界の刃を突き立てるその瞬間、楽しみにしておいた

†

回転する巨大なルーレットが目の前にあつた。

そのルーレットを転がる銀色の玉。

「頼む……！」

私に相対する男が、手を組む。

私はただ、黙つて見つめた。

そしてルーレットの回転が弱まり、玉がルーレットの数字が書かれた枠におさまる。

あたりを、ざわめきが包んだ。

ପାତ୍ରବିନ୍ଦୁ

男が叫ぶ。

「お、俺はもうあんなところには戻りたくない……お、おかしいんだ！あの女、なにかイカサマをしているに違いない！」

そんなことを言つ男を、どこからか現れた黒いスーツの男達が両脇から持ちあげて、引きずつて行く。

「うあああー、うあああああー。」

そのまま、男はどこかへと消えた。

「…………馬鹿な。これで何連勝田だといふのだ？」

「イカサマというのも、あながち……」

「だがここに一体どれほどのイカサマ破りがいると思つてゐる?」「そのなかでバレないイカサマを使つてゐると?」

「あるいは、ただ純粋な強運の持ち主、か

ギャンブルマニア部。

ふふふ……ちよい樂しいな、これ。

ちなみに書いておく。

イカサマ？

……なんのことか緋色わかんない

わやぴつ。

「 も、次！」

私の言葉に、周囲にいる誰も動かない。

ふむ。

まあ、じぶなものか。

「 んー、じゃ、とりあえず私はこれで退散しようつかな  
「ま、待つてくれ！」

「Rの部の部長が前に出てきた。

「あ、あなたならギャンブル界の星になれるー。入部、しないか?」  
「悪いね」

「やりと笑う。

「私は、弱い者いじめは好きじゃない」

それだけで、全て通じたりじー。

部長が崩れ落ちる。

「それじゃあね」

+

ふむ、私はなかなかおちゃめしてゐるな。

とか思いつつ、次の部活はなにしようかと仮想モードを見ながら思案する。

「あ」

なんかおもしろそうなの発見！

「戦争」ヒューマニア部、か。うむ、これだな」

## 活動内容は？！

ふう。

まあ、あれだよ。

私の話を聞いてくれるかい？

まあ今、戦争<sup>1</sup>のジャーナル部とかいう意味わからんねえ部にきているのや。

意外や意外……というわけでもないが、その部にはひやんと部室があつた。

明らかに野外活動っぽい部活なのだが、この学園で野外とか青とか露出プレイとか関係ないし。部屋、明らかに部屋じゃなくて一個の環境だし。

ちなみに青のに入るの春だからー おいおいあんたらなにかんがえちやつたんですかあ。ぶひひ。

いやまあほんとは姦しい的な文字を入れるんだけどね！

でへつ。

……じまつ。

いやん皆えつちだなー。

……おえ。

んん！

はーい、私は今、戦争じつこマニア部の部室にノックも無しに突入したところです！

まあそのくらいのサプライズは必要じやん？

でね！

中はね！

なんとね！

東京でした！

一面火の海の！

……ホワイ？

ええと、一面、火の海？

ファイヤーシー？

フレイムシー？

ヴァーミコオングー？

インフェルノシー？

萌え萌えきゅん？

今、確實にエターナルフォースブリザード並みの寒さがどこかで生まれた。間違いない。

んで、まあ……あれだわ。

んで、火の海な東京の上空に、巨大な三つの影が浮かんでる。

つかあれは……なんだ？

なんか、黒い……闇、っていうか……うん。とりあえず、そんなの。

そして、その闇の中にそれぞれ人影が浮かんでいた。

それに見覚えがある。

一人は、アイリス。

一人は、エレナ。

一人は、スイ。

「さて……残るは私達三人だけ、みたいね」

スイが田を細め、アイリスとエレナに対し身構えた。

スイの周囲の闇が、その背中に、まるで翼のような形状で集まる。

「Jの第三次三勢力衝突・ヒートーキョーも終結だ！」

アイリスが手を上げると彼女の周りの闇が大量の剣の形状を形作る。

「……」

エレナは、無言のまま溜息をつく。

すると、残りの闇がエレナを中心に渦を巻いた。

「とりあえず、今回は私が勝たせてもらつわ……でも、その前に」「今回こそ勝利を我が手に納めさせてもらひや……が、その前に」

スイとアイリスの瞳が、同時に同じ方向を向いた。

すなわち、エレナに。

二人が同時に、エレナに向かつて飛び出す。

「正しい判断、だね。正直、常闇の扱いは私が一番上手いわけだし……三竦みで戦えば最後に残るのは当然私……って、そんなことに今更気付いたんだ?」

Hレナの口元が歪んだ。

「つー」

アイリスが腕を振るつ。

すると、闇 どうやら常闇とこいつらしい の剣が、大量の雨となつてHレナに降り注いだ。

それに対し、Hレナは指をならす。

すると、彼女の周りの常闇が一度脈動して、巨大な竜の顎となつて飛んできた剣を一瞬みで消滅させる。

「甘い……やるなら、今の質量の千倍は持つて来なよ  
「他所見してて、いいのー?」

Hレナの背後に、いつのまにかスイが迫っていた。

スイの常闇の翼が羽ばたき、そこから無数の爪のようなものが生

えてエレナに襲いかかる。

串刺しこなれるエレナ。

そんな未来を私は見た。

けれど。

「他所見？ ちょっと違つ

スイの爪がエレナの身体に突き刺さる 直前。

爪が溶けた。

「これはね、余裕のあらわれ

首だけで振り向いたエレナが微笑む。

「そもそもあなたや姉さんの常闇の制御を奪うのなんて、そう難しいことじゃない……ここで取るべきは、下手な鉄砲を数撃つではなく、必殺の一撃を私にこれ以上ないというタイミングで撃ちこむことだった。まあ、そんなことはさせないんだけど」

つまりなそりて、エレナが手を上げる。

「常闇……喰らいなれー」

と、エレナの頭上に巨大な黒い闇が生まれた。

次の瞬間、強大な引力がその闇から生まれた。

「つー？」

その場のエレナ以外の誰もが動搖した。

その引力は光すらも吸い込んで、辺りを暗闇に染め上げていく。

これってまさか……ブラックホール！？

遠くにいる私すら関係なく吸い込まれそうだった。

あんなのに飲みこまれたら……冗談じやすまない！

私は慌てて、べりべりと剥がれていく地面に、自分の身体が壊れることが悟りで魔力による重圧を加え、吸い込まれないよう固定した。膝が地面にめり込む。

「う、ぐつ

身体中の骨が軋む音がした。

やつ、べえ……。

そんな中、私は上空に再び視線を向けた。

アイリスとスイは、どうにか空中に留まっていた。

だがそれが限界のようで、上手く身動きがとれない様子だ。

「まあでも、今回は良い線いってたかな……うん。それじゃあ、二女からの教訓」

エレナだけは至つて普通に動いていた。

エレナの手がアイリスとスイに伸ばされる。

「一人とも、私に挑む前にせいぜい『顯現』くらいい使えるようになつてから、来なよ」

『顯現』？

なんだ、それ。

私が首を傾げると、エレナの手から強大な魔力の塊が放たれ、アリスとスイの身体を打ち、そのまま一人を地表に叩きつける。

東京タワーよりも高そうな土煙が一ヶ所で立ち上った。

と同時に、ブラックホールが消える。

私も自分への重圧を解除して、身体を再生させる。

「……パネエ」

「」の部活、関わるのはあまりにも命知りあずやれる。

どうして私はこんなところに来てしまったのだろう。ちゃんと下調べをするんだった。

「それで？」

びくりと肩が跳ね上がった。

エレナの瞳が、私を捉えていた。

「……は、はるー」

「」んにちは、緋色」

「ひこうと綺麗にエレナが笑う。

「なに、部活見学？」

「ま、まあ、そんな感じ？」

「もうなんだ。それじゃあ、ヒーロはまだつだつた？ 楽しこな？」

「あー」

ヒーロと周りを見回す。

うん。

控えめに表現すると……地獄、かな。

「他の部活も見に行きたいんでこの辺りで！ じゃー！」

びしり、と手を擧げて、私は身を翻す。

「ふふっ」

背後から聞こえたエレナの微笑に背筋がこれまで以上なこぼれで冷えた。

「わあ……。

## 最後の一人はつー

「はあ……あの三姉妹は危険だ……とくに二女」

滋きながら、校舎の廊下を歩く。

……つていうか、歩いてこるつむこと、廊下がなんか「こ」は旧校舎です「みたいな感じになつてきたんだけど。

ほら、床なんか軋むし。

これ明かりなかつたらホラーのレベルだよ？

とか思つていると、廊下の突き当たりにぶつかつた。

「おひ?」

適当にあるいてたしなあ……迷子になつたかも。

まあ迷子つていつても転位扉さえあれば迷子なんてビリーハーとないんだけど。

「やあ、ここの校舎つむと便利だわ。

噂によると一年で東京ドーム一個分の大きさずつ増築されている  
らしい。

「んー？」

突き当たりにあつたのは、一つの扉だつた。

その扉の上にかかげられたプレートをふと見上げた。

「風紀委員会外特別支援殲滅執行部……？」

なんだこの恐ろしくものものしい名前は。

ええと、風紀委員？

いや、でも外つてことは、そうじやないのか。

んー、つまり、風紀委員ではないけれど、風紀委員を支援する人があつまる場所、つてことなのだろうか？

にしても、殲滅執行部つて……え、殲滅？

学園に殲滅なんて単語が介入する余地は 。

その時、これまでの記憶がフラッシュバックした。

うん、納得した。すべてこ。

殲滅あるな！

「でもまあ、とつあえず覗いてみるか

なんか興味あるし。

一応これも部活、なのかな？

というわけで、扉にてをかけて、そつと開く。

「失礼しまーす」

そつと扉の中を覗き込む。

「…………あ

そこにいたのは、一人の少女だった。

広い部屋。

真中に長机が一つといへつかのパイプ椅子が置かただけの殺風景な部屋。

その部屋のパイプ椅子に腰を下ろし、窓枠に肘をかけて外を見ている少女は、この学園に来て何度目かは分からぬけれど、それでも「これまで」に劣らぬ衝撃を私に与えた。

黒い髪は、腰よりも低いところで折り返しをして、頭の後ろで留められていた。普通に伸ばせば、身長よりもずっと長いのだろう。

「……」ことなく憂いを帯びたよう表情は、それだけで絵になる。

「…………なにか、御用かしら。特別クラス所属の、棘ヶ峰紺色さん？」

凛、というよりも、突き刺すような声が私に向かつて放たれた。

彼女の顔は私に向いていない。

「え、なんで私の名前…………」

「同じクラスですもの。知つていて、不思議はないでしょ？？」

同じクラス？

「つてことは……あなたが特別クラスの最後の一人か」

といふかちよつと待つた。

同じクラスだから、名前が分かるつてのは、まあこによ?

でもなんで顔もしらないのに私の名前を言ふるの?。

会つたこと無いんだから顔と名前が一致するわけなくない?

……まあ、この学園にいる人にそういう疑問を感じる方が間違え  
なのかも知れないけどさあ。

「えつと、そつちの名前は?」

「あら、教えないことはならない理由などあります?」

「う……」

な、なんだる。

もしかして私、この子ちよつと苦手かもしれない。

「……はあ」

私の態度を見て、彼女が溜息を吐く。

「まあ、同じクラスのよしみとして応えて差し上げましょ?。小夜。<sup>セイナ</sup>

それが私の名前です

「小夜……」

「気軽に呼ぶのですね」

「あつ……え、えつと、じゃあ、小夜ちゃん?」

「ちゃん、ですか」

「……」

「え、ええとじゅあ、小夜さん…」

「……」

小夜さん（仮）が再び溜息を吐く。

「呼び捨てで構いません」

「あ、ありがと」

「……」

やつ。べりや

「、いなつたら……」

「といひで、こんな部屋でなにしてたのー? あ、もしかして一人つてことで、ちよつとイケナイこととかしちゃつてたり? そのスカ

ーートの下とか濡れ濡れだつたりしぃやこまかー・? あまつ

下ネタは全人類の共有言語!

「……」

うん、小夜の視線がブリザード。

まじ死ねるレベルで滑った。

若干滑ることはず予見できていたのだが、止まれなかつたのを。

それがこの私、緋色ちやんだからさー

きりんちつ。

「……」

といひでその絶対零度の皿をやめて欲しいなあ。

死んじゅうよ?

私、凍死しちゃうよ?

「あなたは、恥ずかしい人なのですね」

ぐわつ！

全てを諦めたようにそんなことを言われて、私のガラスのハートは粉々だ！

「私はただ、外を……この世界を眺めていただけです。なにも問題が起きないのならば、それでよし。起きているならば、そしてそれに私の力が必要ならば、出ていく。その為に控えているだけのことです」

「……そう、なんだ」

うーん、かたつくるしげ空氣だ。

それにしても、控えている、か。

いつから控えてるんだろ、この子。

「もしかして朝から晩までここにいたりして」

「暮らしていますから」

「…………」

聞き間違いであります。

「もしかして朝から晩までここにいたりして」

「……」

「リアクションを頂戴！？」

「ちよ、ちよっと、リアクションないとこか真実味が出ておかしく  
うじやん！」

「ま、まさか『マジで』こんな感じで暮らしているの？」

「ええ」

あつそつと小夜が頷く。

「生活感もないけどーー？」

「生活に必要な物資は収納空間にありますし、調理や入浴などは近くの設備で済ませます。前者ならば家庭科部の部室で。後者ならば湯めぐり部の部室で備つることができますので。その他、いかよ  
うござむ」

「……」

「この学園マジ便利。」

つかあとで湯めぐり部は行っておこう。部室とかに何種類も温泉  
があつたつするのだろうか。

「で、でもエログッズとかは！？」

「……必要ないでしょ！」

「ええつーー？」

MA JI DE!?

「……といひで、いい加減出て行つてくれませんか？」

「へ？」

小夜が私の事を見つめる。

ああん、そんな見つめられたら照れちゃうー。

「わざらわしいのですが」  
「わざつーー？」

ダイレクトに言われちゃったよーー！？

うわあ、自覚ちょっとあるナビ美少女に言わるとダメージだけ  
え。

「…………うん」

ショボーんとしながら、私は小夜に背中を向けた。

ちらりと後ろを見ると、すでに小夜は私を見ていなかつた。

「わあ……これは悲しい。

……つか、さ。

なんだろ。

部屋の中を見回す。

リビングに、朝から晩まで、かあ。

なんかそれって……寂しくないのかな？

少なくとも私なら、絶対にノーサンキューなんだけど。

「あの……」

「なんですか？」

「……時々、遊びに来てもいい？」

出来るだけ小動物オーラを出しながら尋ねる。

果たしてそんなオーラを出せていたかは定かではない。

「……」

再三、小夜が溜息を吐く。

「だ、駄目だよね。」めん、変なこと聞いて」

「……別に、この部屋は部員以外立ち入り禁止、などとこう規則はありません。もちろんそれを推奨するわけでもありませんが、特別、私にはあなたの行動を止める権利はない」

「……お?」

それってつまり……オッケーってこと、だよね?

おお!

美少女の部屋にいつでも来ていって許可もらつたビー!

「お茶もお菓子も出ませんし、面白い話相手もいませんが」「別にいいよ! それに、面白い面白くないじゃないでしょ!」

小夜みたいな女の子がいるんだよ?

「小夜と話せるなら、それはけつこう嬉しいことじゃない?」

「……そうですか」

小夜は私を見なかつた。

「それじゃ、また来るね！」

「……」

返事はなかつた。

よし、決めた。

第一目標。出でいく時に小夜に「またね」って言われよう。

†

「嬉しい……？」

そつと、自分の掌を見る。

「……馬鹿なのでしょうか、あの人は。こんな私と？」

## 不穏な空気はつー

お腹が空いた。

朝から結構歩きもわったしなあ。がつたり食べたい気分。  
つー。

といつわけで……。

「食堂に寄ってまいりました！」

じゅじゅん！

うわー、すげえ。

食堂って……これも小さいホールってレベルの大きさじゅん。

収容人数何人ですか……。

イメージとしては、ショッピングモールとかにありそうなフードコートみたいなかんじ？

壁際にはずらつといろいろな店が並んでいる。

これだけ広い空間にも関わらず、7割ほどの座席が埋まっていた。

「む、期待値高し。

というわけで私は早速昼飯をなにして歩きまわる。

ほんといろいろあるなあ。

「和洋中はもちろん…… ディジタルの民族料理みたいなものまで……」

ふーむ、なににしようかな。

私的には「ケバブ一口ホール」というアホな商品に心惹かれるのが、流石にそんなのは食べれないし。

うーむ。

かつ丼にしておくか。

え、女の子のチョイスじゃない?

いいんですよ食べたいんだから!

というわけでかつ丼専門と書かれた看板の店へ近づく。

すると、その店の前にいる人影に視線がいった。

「お?」

「あ

アイリスが、そこに立っていた。

あれ……アイリス、さつきエレナに……。

復活早いな。

私なら半日は寝込む自信があるんだが。

「緋色じゃないか。なんだ、昼食か?」

「うん。アイリスもかつ丼?」

「ああ。ここのかつ丼は疲れた時にこそ美味しい」

……私がいうのもなんだけど、アイリスは女の子として昼食をかつ丼にしていいのだろうか?

いや、べつに私はいいんだよ?

でも、こう、美少女がかつ丼って……絵的にねえ?

「早く注文したらどうだ?」  
「あ、うん。すみませーん

アイリスに言われて、店の人のかつ丼を注文する。

卵一倍とかあつたけど、やつぱり最初はスタンダードでしょ。

少ししてアイリスのかつ丼が運ばれてきた。

「一緒に食べるだらう? 席をとつておう」

「ん、あらがと」

その後、私もすぐにかつ丼を受け取ってアイリスがとつていてくれた席に向かう。

そして、ちゅくちゅく会話も交えつつ、かつ丼を一人で食べた。

周囲から奇妙なものを見るような目を向けられたのは氣のせいだったろう。きっと。

ちなみに味は文句なし。

これまでの人生で一番美味しいかつ丼だつたと言つても過言ではないレベルだった。

これであの値段なら十一分だよなあ。

「へーん、JUNの学食、いいわあ。

食事を終えて、私とアイリスは椅子にもたれかかっていた。

余は満足じや。満腹満腹。

「アハ～いえば、わたくしの端に見学しておいたんだって。」

「あ、まあねえ」

ただすぐには逃げだしたけど。

「入るのか？」

なぜかきりきりした田で尋ねられた。

「断固拒絶」

もちろん笑顔でそつ答へる。

あんな部に入つたら三時間で死んでしまうわ。

「ふむ……嫌なのか？」

「そりゃあ、ねえ」

Hレナの振るひ暴威が脳裏をかすめた。

あれは……ひどかつたなあ。

「緋色が入れば、面白そつなんだがなあ」

「あはは。」めんね

「……まあ、いいわ」

あ、意外。

なんとなく、アイリスの言動から無理にでも勧誘されるものとばかり思つてたんだけど。

「同じ部になどこなくとも勝負はできるしな?」

いやり、と。

怪しい笑みを浮かべ、アイリスが私を見る。

「へ?」

あ、逃げよ!。

そう思つた時には遅かった。

「勝負をしよう、緋色」

いつの間にかアイリスが私の手を握んでいた。

「ふ、あやー。」

「離してく、だせえー！」

「無理だな」

「無理とこー」「とほなこでしょー。」

「ああつ、だめえつー！」

「そんなに強く手を握られたわ、私……骨が砕けるー。」

「痛い痛い！」

「ちよ、逃がさないために私の手を破壊しそうとするのやさしくじや  
じゃねー!?」

「わ、私このあと用事がー！」

「どんな?」

「え……そ、それは……じ、自分を慰める感じの行為ー!?」

「……」

おおつ、アイリスの口角の角度がさらにあがつたぞ。

「それなら、この後は暇だな？」

「ええ、聞いてた！？」

「別に「自主規制！」など、こいつでも出来るだらう」

あ、あぶねえ！

今私が言葉挟まなかつたらこいつマジで言つてたやー。

オで始まる四文字の単語を口元にしてたやー。

美少女がそんな」と言つちやこけませんよー？

「ああ、では行け。部室でいいよな？」

アイリスが私の手を引いて立ち上がる。

「ちよつー。」

「こーだらう。ほり。」

「いー強引になんて……そんなの、ひどいわー。」

「そつか」

「あつさり流されたー。」

とか、あやこのあやいの騒いでいたら、

「あ

がちゃん、といづ音がした。

見ると……アイリスが背後を通った誰かにぶつかっていた。

そしてその誰かはお盆を持っていて、その上にはパスタ料理がのつていた。

そう。

のつていた……過去形だ。

その皿はアイリスがぶつかった衝撃で、お盆から落ちて床に転がっていた。

もちろん料理は台無しで、しかもその人物の服が汚れている。

白いソースで、汚れている。

しかし残念ながらその人物は男だった。

ほんとうに遺憾ながら。

「ああ、悪いな」

アイリスが振り返って、その男子に言ひ。

男子は俯いて、肩をふるふる震わせていた。

あれ、これやっぱな雰囲気？

「……また貴様らか。特別クラス」

え、貴様ら？

複数形つすか？

「ん？ また、とは？ どこかで会ったことがあつたか？ ふむ。  
それなら悪いな、記憶に残るほどの存在感は私の中ではなかつたら  
しい」

こニドその台詞が出るとかマジパネエツすアイリスさ。

そろそろオイラ逃げていーっすか？

「俺個人でなくとも……特別クラスが、他の生徒達にどれほど迷惑  
をかけているか、分かっているのか？」

彼の手の中のお盆が軋み、砕ける。

膨大な量の魔力が滲み出してきた。

お、おお？

かるーく私の魔力量越えてません？

もしかしてこの彼、結構すごい人？

「授業に気紛れで参加すれば、その授業を受けていた生徒達を全員入院させ」

それは酷い。

誰だ、誰がやったんだ。

「ふむ」

アイリスさんなんか覚えがありそうな顔してません？

「ちょっと声をかけようとしただけで付き人が襲いかかってきたり」

付き人のぐだりで一人しか思いつきません。

……声をかけるくらいでソウがそんなことするかな？

なんかそれ、誇張とか入ってるんじゃない？

もしくはただ声をかけようとしただけじゃなかつた、とかかな。

「ちょっと機嫌が悪いからと殺氣で周囲の人間を気絶させたり」

あー……スイかな？

つんけんしたイメージがある。

「ちょっと魔が差してからかっただけで、その後唐突に姿を見なくなつた生徒もいた」

順当にいくならこれはエレナか。

エレナなら生徒の一人一人、引きこもりさせるのは簡単そうだ。

なにせ腹黒っぽいし。

「担任は担任で訓練で力加減を間違えたとほざいて校舎の一割近くを消し飛ばす」

茉莉エ……。

「他にも風紀関係の仕事をしているかと思えば、違反者捕縛の際に世界一つを壊しかける」

小夜……そんないことしたの？

うん。

総評。

特別クラスとかマジ迷惑じゃん？

「貴様らのなにが特別なのかは知らんが……全生徒を代表して、この俺……ゼファー＝ローゼンベルクが言つてやる！」

彼が　ローゼンベルクが顔をあげ、アイリスを睨みつけた。

「貴様らは、この学園の汚点だ！」

「……ふむ？」

そんなことを言われて、アイリスは微動だにしなかった。

「それで？」

「なんだと？」

「それがどうかしたか？」

アイリスが鼻で笑う。

「汚点？ 別に美しく在ろうなどと考えたことはない。汚点結構。好きに評価すればいいさ」

そんなアイリスの言葉を受けて、ローゼンベルクがたじろぐ。

「つ……改心するつもりすらないか」

ローゼンベルクの目がさらに鋭くなつた。

「ならば、もういい。実力行使だ」

「ほう？」

ありや？

これは……マジでやばくね？

アイリスとローゼンベルクの間に、魔力が渦巻く。

「特別クラスなどとこいつもの実力を教えてもらおひじやないか」「構わんが……？」

そんな一人の危険な雰囲気を感じ取った周囲の生徒達が、そそくさと避難していく。

ちょ、待つ、こんなにいたりいたら私は避難できなーよー…？

誰か助けてよー。

思つが、勿論誰も助けの手を伸ばしてはくれない。

「ふん。その調子、こつまでも続けられると困つなんよ」

ローゼンベルクの纏つ雰囲気が変わる。

背筋に悪寒が走った。

「  
『顕げ  
』  
はこそこまで」

悪寒を、悪寒が塗り潰した。

「校内でのそれは、厳重に禁止されているの知ってるかな？」

いつの間にか、小柄な青い髪の少女。

その手には黒い水晶で作られたような剣が握られ、剣尖はローゼンベルクの首筋にあてられていた。

……誰？

ローゼンベルクの顔が、真っ青になる。

「ナ、ナンナ……理事」

理事……？

え、この子が？

マジか……。

「それじゃ、ゼファー君。反省室に入る覚悟は決まってるかな？」

につこりとナンナ理事が笑う。

それだけなのに、妙な威圧感を感じた。

ローゼンベルクが小刻みにこくこくと頷く。

「そ。物分かりがいい生徒は好きだよ？」

ナンナ理事が、ちらりと私とアイリスを見る。

「そつちは……まあいいか。一つ言ひなら、あんまり食堂で暴れちゃ駄目だよ、アイリス。それに……棘ヶ峰、緋色さん？」

「善処しよう」

「あ、はい」

私達が頷くと、ナンナさんがローゼンベルクを連れて歩いて行つた。

……なんかローゼンベルクの背中が可哀そうだった。

「……ナンナ理事って、何者？」

「この学園でも最強と呼べる人の一人だ。逆らわないのが身のためだぞ。特別クラス総出でも勝てるかどうか……いや、勝てんだろうな」

うん、なんだただのチートか。

「メルさん。最近、特別クラスへの不満が生徒間で溜まっている、といふ噂を聞きましたか？」

ティナさんがそんなことを言いだした。

来月の校舎の増築予定表から顔をあげる。

「不満、ですか？」

「ええ。実際、当然と言えば当然なのですが……特別クラスはなにをもつて特別なのか、と」

それはまた、もつともな疑問が出てきたものだ。

「……まあ、『顕現』だけで言つのであれば、他の学科でも出来る子は何人もいますからね」

「逆に、特別クラスには『顕現』の出来ない子が約半数……」

そういうところから、特別クラスへの不満が生まれているのだろう。

「……特別クラスの意味を説明出来れば楽なのですけれどね」「説明して分かってもらえるようなものでも、ないですから」

ティナさんが溜息を吐く。

「心配ですね」

「そうですか?」

私は別にそういうでもない。

心配と言つのであれば、その問題よりもよほど心配なこともある。

特別クラス。

それは……大きな力を秘めた、それ故に危険な生徒を集めたクラスのことだ。

決して間違つた道を進まないよう、特に注意して導くために……まあ、ちょっとの臘履もあって作られたクラス。

もしなにか一つ間違えてしまつたら。

そう考へると……私は一番それが怖い。

特に、あの子。

恐らく一番大きな可能性を秘めた……あの人の娘。

武器はつ！

「武器が欲しいー！」

ばん、とドアを開けて部屋に突入する。

出来ればこいつ、部屋の中では寂しさを慰める例の行為が行われてたらなんてよこしまな思いがなくもない。

……もうそろそろこのネタ使いまわせないな。

「へえ、  
そうなの？」

そんな私の願望も虚しく、部屋の主……ツクハさんは平然と窓の外を眺めながらそう返してきた。

「……そんな美味しい展開、ないつて分かつてたですとも」

「ふふつ」

私の呻きに、ツクハさんが微笑む。

「それにしても、随分といきなりだね？」

魔法だけじゃなく何か武器も使いたいじゃなこですか?」

「そうこ'つもの?」

「アハニ'つものです」

「ふハん……でも、武器かあ」

シクハさんが顎に手をあてて考え込む。

「どんな武器がいいの?」

「んー……覗かれても。分からなこんじすよねえ。生憎武器なんて使つたことないんで」

「だとしてもイメージへりこあるんじやない?」

「イメージ……」

まあ確かに、ラノベとか呼んでれば、ぬまとへりこはあるけれど。

「例えば、剣とか」

「あ、それは嫌です」

「そ'うなの?」

「だつてそれは、あんまりにもんのまほじやなこですか?」

ファンタジーに剣?

そんな平凡は私が許しません!

わったなにか……」「……非凡であつスタイルッシュな……！」

「武器の種類に詳しい、と言えばあの子だけ……緑色を帯びせるのせ……」

「ふつぶつヒシクハセダがなにかを説く。

「佳耶に話したら間違になくチーンサーだし……」

チーンサー……？

え、チーンサー？

ビ、ビービービービーダッテナよ。

嫌な予感しかしないでありますな。

つゝこまない方向で！

ああ、もちろんこの「つゝこむ」じゃないからねー。

「……茉莉も……絶対に刀をすくめへる……小夜は、まず呼び出しへ感じないだろ？」「……」

ツクハさんはなおもぶつぶつ呟いている。

考え込むと周りが見えなくなる人なんかなー。

「あの三姉妹は武器とはほとんど無縁だし……ナコタは剣以外使つたことない……教職員は今は授業中だし……」

「あ、あの、そこまで真剣に考えてもらひつ程のことはじやないですよ？」

ちよつとツクハさんのところに乱入する駄菓子みたいなところもあつたし。

そこまで真剣になられると、逆に申し訳ないっていうか……。

「んー……あ」

ぽん、と。

ツクハさんが手を合わせた。

「緋色」

「はい？」

「いい手を思いついたよ」

「ほう。それはいかような？」

にやりとツクハさんが笑う。

「想像して……貴方が思つ、貴方にもつともふさわしいと思つ武器を」

「は？」

想像？

どゆこと？

「いーからいーから！　目を瞑つて！」

困惑顔をする私に、ツクハさんが言つ。

仕方なく私は目を瞑つた。

「とにかく、強く想像……ううん。信じて。貴方の武器が、貴方の手の中にある、と」

「……？」

「いーから」

ほんと、なんなんだろ？

まいにいや。

シクハやんが「お前は嘘うそだよ」と云ふんだし、やめてみよ。

ええと、手の中に、私が私にもうともふねわしこと思ひ武器があると信じればいいの？

つても、ふさわしい武器つてなんだろ？

分かんないから適当でいいや。

むむむむむ。

緋色ちゃんにふさわしいウエポンよ、いですよー。

十五  
卷之二

「むむつ？」

なんか違和感があつた。

「へえ」

ツクハさんの感嘆の声が聞こえる。

「『す』」い、まさか一発とは……とはいえ、未完成か」「え、うことですか？」

言われて、目を開ける。

すると、私の手の中に大鎌がありました。

てへつ。

つて、うえええええええええええええええええええええい！？

「なにって、緋色の武器」

「いやいやいや、いつの間に！？」

「緋色の想像が形になつたものだよ。」

さらりとツクハさんが教えてくれる。

「え、そんなのアリ？」

「ありあり。まあ、一応秘奥義ちづくな技だけビ……緋色は凄いね  
え」

ひいろ は ひおひき を ますたー した。

マジかよ……。

私は改めて、手の中のそれを眺めた。

柄は私の身長程もあり、色は黒に血管のような筋が赤く刻まれている。刀身は半月型で、なんとなくギロチンをイメージさせる。色は漆黒に赤い幾何学のラインが入っていた。

ふうん……へえ……。

悪くない。

「でもなぜ大鎌？」

「緋色が緋色っぽい、って感じたんでしょ？」

「いやいや、私イ「ール大鎌つて……」

厨一の自覚はあるが、まさかそんな痛い考えをしているとは。

へへへ、自分にびっくりだ。

「まあ、私から見ても、らしいといえばらしこけどね

「へ？」

「似合つてゐよ。なんか、緋色つてさ、強い自分を装うタイプがじゃない？」

「そ、そんなこたあねえですよーーー？」

### 図星つー。

「そんな……言い方悪いけど、虚勢がさ……その禍々しい大鎌にぴつたりだよ。大鎌なんて見かけはかっこよくて強そうだけど、実際はとこどん扱いにくいものだしねえ」

「今私、なにげなく「お前は見かけばっかりだ」とか遠まわしに言われませんでしたか？」

「さあ、どうかなあ」

否定してほしかった。

「でも緋色、これだけは言えるよ？」

「はー？」

「緋色は、虚勢を本当の自分に変えていくよ。それだけの力がある。それは私が保証してあげる」「……」

あ、ありや？

褒められた？

「……でくく」

人に褒められるのはとことん弱いと近所で評判だつた緋色ひやんですよ?

そんなこと言われたら……でくく。

「よしひ、ツクハさん、私頑張るよー。」

「うん」

「そいじや、ちょっとくらいの武器の扱いでも練習してみよつかな?」

「それなら特別クラスの三姉妹に協力してもうつたら?」

「……」

え、あの三姉妹に?

「……か、考へては、みます」

「うん」

「そ、それじや! またね、ツクハさん!」

「あ、待つて」

「ん?」

部屋を勢いよく出て行こうとしたところ、ツクハさんと呼び止  
められる。

「私には敬語とかこいらなし、呼び捨てでもこころへ。」

「……マジで？」

「ほんとはこけないんだけどね……緋色の髪は、 McConnell がやね！」

笑顔でツクハさんがそんなことをおっしゃる。

……が、まさか私が一口ボウルの口が来るとはー。

「了解、です。」

ツクハさんの笑顔破壊力高ええええええええー。

内心で叫ぶ。

「や、それじゃ、またねー、ツクハー！」

「うそ」

逃げるよつに私は理事長室を飛び出した。

+

「未完成とはいって、《顯現》をああも簡単に……未恐れしこなあ」

まあ彼女も、最初は未完成の『顕現』を使ってたし……ある意味で、これはなによりも喜ぶべき成長なのかな。

なにせ、彼女と同じ路を辿っているところだとばかり。

……ううん、でもそれじゃあ駄目なんだ。

彼女と同じじゃ、意味がない。

緋色……あなたには、期待しているんだよ？

「ねえ、エリス？」

「ええ」

窓際にいつのまにか腰をかけている人影が合つた。

その背中からは、六枚の白い翼が広がっている。

ボニー・テールでまとめられた長い銀髪が風に揺れた。

私と瓜二つの顔立ち。

私の、最愛で最強の妹。

「あと、どれくらいかしら？」

「まあ

エリスが微笑み、肩を竦める。

「私には、なんとも。あくまで今の私は、見守るだけだから……」「そうだったわね」

ぐすり、とエリスが笑う。

「緋色には素で喋つていいと言つわりに、あなたは素を見せてあげないのね？」  
「そりやそりよ」

私も微笑み返す。

「私の素は、重いのよ？　まだまだあの子には委ねられないわ……  
まあ、今は、だけど」  
「あの子は十分に強いわ」

エリスが空を見上げる。

「……そうかもね。あなたには、それが分かるの？」  
「……」

無言のまま笑みを深くして……次の瞬間、エリスは消えていた。

「まつたく」

軽く溜息を吐く。

「もうこいつと喧われたら、期待しちゃうわよ？」

似非関西弁はつ！

辺りに草の根一本すらない荒野。

学園からは、音速で片道一時間の場所に私はいた。

「ブゥレイヴァアアアアアアアアアアアアアアア！」

大鎌を振り下ろすと、濃い紫色の炎が巨大な柱となつて空を貫いた。

もちろん技名はノリだ。

その火柱に巻き込まれて、四本の腕と蜘蛛の胴を持つ巨人が消滅する。

なんでもどつかの世界から紛れ込んだ魔神だとかなんだとか。

「よつ、と」

肩に大鎌をかつぐ。

「あつけないなあ」

ぱつりと呑いて、大地に開いた直径十メートルはありそうな大穴を眺める。

「ふふ。

一週間くらい特訓したら、結構この大鎌使えるようになつたぜ。

とりあえず恐ろしく使い勝手がいいことは把握した。

だつてやるひと思つたこと、なんでも出来るんだもん。

今みたいに炎を出すことが出来れば刃を伸ばすことなんて朝飯前だし、空間だつて切り裂ける。

なんてチート武器。

未だにどういう原理で私がこれを取り出せるのかは分からんけれど、とりあえずそういうものだと納得している。

「さて、ギルドに任務完了の報告」

「あかんなあ」

そんな声が聞こえた 次の瞬間。

私の背後に、いつの間にか魔神がいた。

あれ、消滅させたはずなんですか？」

「腐つても魔神。消滅させたくらいで素直にやられてくれるわけないやろ？」

つか、なんだこのエセ関西弁は。

どつから聞こえてるのさ。

声の主を探す暇はなかつた。

魔神が私に腕を振り下ろして来る。

それを大鎌で切り落とすが、一瞬で腕は再生してしまう。

「そいつ倒したいなら、せめてこんくらいはしどかんとなあ

不意に、視界の隅に火の粉が生まれた。

火の粉は徐々に大きくなり、あつという間に巨大に膨れ上がる。

その炎の中から一つの人影が現れた。

真っ赤な髪の男性だ。

その人が、人差し指を魔神に向ける。

「運がなかつたなあ…… もこなら」

彼の指先が、光の粒子に変わる。

あれつて…… 前にもどつかで見たよつな……。

一條の光が、魔神の胸の真ん中を射ぬいた。

そこから、魔神の身体を金色の炎が包んで行く。

刹那…… なにかが起きた。

なにか、とした表現できない。

眩い光とともに熱風が吹き荒れて、気付けば魔神の身体が消滅していった。

「…… ほかーん」

思わず口でこいつをやつへりこはせまかんとしてしまひ。

「な、なんぞや」

「「コシはなあ、とつあくすぶつ飛ばす」とや」

笑いながら、男性が私の方に歩いてきた。

「そんなこと聞いてないし……つてか誰？」

「おう、ワイはツイルフゅーもんや。よろしうな、棘ヶ峰ちゃん」

「え、なんで私の名前……」

「ワイラ教員の中じゃ有名やで。いろいろとなあ」

……あ、この人先生なの？

にやにやと笑いながらツイルフさん……先生が私の顔を覗き込ん  
できた。

「せやけど、まだまだ未熟やなあ。使いこなしておらん」

その目が、私の大鎌を見た。

「武器の形で、なんてケースは初めて見るなあ。まあ、そんだけ不  
完全で不安定にやつとるつてことか……逆によつそれでそこまで持  
つてこられたもんや。器用ととるか不器用ととるか……」

「Jのロゴぶり……。

「私の大鎌がどういうものか、知ってるんですか？」  
「まあなあ。今のワイの攻撃と同じ性質のもんやし」  
「へ？」

それって、さつきの魔神を消し飛ばしたやつ？

「そうなんですか？」  
「まあまあ」  
「……」

「うむ、ヒリは一つ、あれだな。

「師匠！」  
「おおおおおお！」

ツィルフ先生の手をとる。

「な、なんや！？」  
「私にこの力の使い方を教えて下せえ！」

ツィルフ先生の口ぶりからして、私の力はまだまだ……。

なんかそれは気持ち悪い。中途半端とかマジ勘弁。

今の力でも十分だけど……いや、やっぱこの世界のパワーバラ  
ンス考えると不十分か？

まあどうでもいいや。

とにかく、どうせなら完璧に使えるようになりたいじゃない！  
人間だもの！ ひい。

「あー」

ツィルフ先生が頭を搔く。

「それはどうにも、ワイに教えられるものやないなあ……『顯現』  
は、それぞれ使えるようになる切っ掛けがないと……」

「『顯現』？」

「ん、知らんかったか？ この力はな、そう呼ばれてるんや。自ら  
の想いを顯現させる力……自分という存在によつて世界を圧倒する、  
そういう力としてな」

「……想い？」

「つまり、考えたことは何でも出来る、つかよー」とや  
「え、なにそれ」

どんなチートだよ。

世界滅べ、って考えたらやれちゃうわけ？

出鱈田にむほどがあんや。

「まあ、その想いを自分自身で信じ切らなきゃならんし、そう簡単じやないけどな。それに、欠片でも不安や迷いがあれば、それも顕現させてしまうんや」

「あ、そりなんだ……それは確かに」

マイナスもおつきいな。

それってつまり「もしかして自分、この勝負勝てないかもなあ」つて冗談交じりに考えたらアリンゴにも負けるつてことでしょ？

うわあ……シユール。

「で、この力は想いの問題やから……教えて使えるよいつになるもんでもないんや」「なるほど……」

自力でなんとかしないといけないわけか。

……どうすればいいのか出鱈田見当もつかませんな。

「あ、こちひて時には使えるよいつになるや」

「ほん、ヒツィルフ先生が私の肩を軽く叩く。

「氣長にせつ

「……はあ」

私、気が短いほうなんだけどなあ。

焦らされるのは好きじゃないの！

焦りしたいの一・

あふん！

「……アホな顔してるで？

「そんな馬鹿な

こんな美少女捕まえてなんて失礼な。それでも先生ですか。

「ま、せんじやワイはもひ帰るわ。あ、依頼報酬はワイのもんやからな？」

「え、なんで！」

「そりやワイがとどめ刺したんやもん。しつとるやが、ギルドの依頼は早い者勝ちなんや」

「うえ……

確かにそうだけど……でもお。

「……今晚の『』はんを、食べるなど先生はおっしゃるのですか？」  
「我慢し」

笑顔で言られた！

ぐつ、まあエログッズを買いすぎて有り金全部消費した私も悪い  
けどもあー！

「（）は最低でもお（）る場面ではー！？」  
「金と女の問題にはシビアにいかんとなあ」

あつはつはつ、ヒツイルフ先生が笑う。

「甲斐性なし！」  
「おつわつーー？」

大鎌をツイルフ先生の首に叩き込む。

もちろん学園の教員ならこれくらいは防げるだろーと見越しての  
行動 なのだが。

すぱり。

つて音が聞こえそうな感じで、ツィルフ先生の首が飛んだ。

お……？

「……おお」

あたつたぞ！

いえーい！ 首とんだつ！

「刈つたどー！」

「つてなにアホぬかしとんねん！」

ばしゃん、と首無しツィルフ先生の手が私の肩を叩いた。

ちなみに声は宙を舞つ首から聞こえてきました。

重力に引かれて落ちてきた首をツィルフ先生の首から下が受けとめる。

なんだこの絵。

そしてツィルフ先生の首がドッキングして、切断面から炎が噴き

出す。

「まつたく、あぶないやつやなあ

「…」

呆れたようにツィルフ先生が私を見る。

ツィルフ先生は首をこきこき鳴らす。

「……よく生きていますね？」

「お前が言うな」

「全くその通りで」

「……彼は、よほどのことがない限り死にませんよ」

372

一陣の風が吹き抜けた。

そして、いつからそこにいたのか。

一人の女性がツィルフ先生の横に立っていた。

碧が少し混じったような銀髪が揺れている。

「はじめまして、棘ヶ峰緋色。私はナワエと申します。ツィルフと同じく、学園で教員をしています」

「ああ、これはどうも」

ペニンと頭を下げられたので、レザーブルーフ。

「ようナワエちゃん。遅かつたなあ」

「貴方が先走りしすぎなのです……追いついてみれば、生徒一人に夕食を奢ることを済していますし……まったく、そのくらいの懐の深さは見せてもいいのではないか？」

「えー」

すぱつ、ヒ。

突然ツイルフ先生の首が飛んだ。

わ、私は今度はなにもしていなーぞー！？

恐らく、ナワエ先生がなにかしたのだわ。

「まったく……仕方ない。では棘ヶ峰緋色。私が夕食を奢りましょ

う  
「マジですかー！？」

「うわ、こんな綺麗な先生に食事に誘われちゃった！」

もしかして私、今夜は寝られない！？

さやつー

「え、ナワエちゃん奢ってくれるの？」「いやありがたい話やなあ」

首をくつつけ直したツイルフ先生が笑顔になる。

その笑顔に対し、ナワエ先生は冷たい視線を返す。

「なにを言つているのですか？ 誰もあなたに奢るなどとは言つていませんよ？」

「……えー」

「どうか貴方はジャンクフードでも食べていればいいでしょう。それでは棘ヶ峰緋色、なにが食べたいですか？ 特に要望がないのであれば、私の行きつけにでも」

「あ、じゃあナワエ先生におまかせで！」

満面の笑顔で言つ。

奢つてもらうんだし、スマイルは大放出ですよ。

「なんや、ワイヤつてちょっと悪ふざけしだだけやないか」

「それでは棘ヶ峰緋色。行きましょうか」

「あ、緋色でいいですよ」

「そうですか？ それでは、緋色と」

「それで、行くのってどんな店なんですか」

「私の知り合いがやつてている店で、少し値段は張りますが、味は間

違いますよ

「そうなんですかー」

「ワイは無視か！？」

なんか聞こえるけど緋色知らなーい。

晩ご飯奢ってくれる綺麗な女教師と、なにも奢ってくれないエセ  
関西弁男教師なら、どっちが優先順位高いかなって決まってるしね  
！」

「ちょ、マジ無視！？ ネタやないの！？ ねえ、ねえってば！？」

フレゼントせつー

「じゃ、緋色。学園には馴染んできた?」

ナコタに誘われて、私は商店街に来ていた。

もちろんソウも一緒にだ。

「うん。まあ、そこそこ」

「セレセレ、か」

「セレセレ」

ソロにきて一週間くらい……。

いきなり変わった生活環境に馴染むには、まだもう少しあと時間が欲しいところだ。

だつてさ……。

「私、未だに商店街に武器屋とかあると違和感感じるもん」

「Jの商店街、防具屋とか呪物屋とか、普通にいろいろ意味わかない店があるんだよ。」

もつね、なんだそりゃ、って感じですよ。

「うあえず」こんな商店街に違和感を感じなくなつたら、私もよつやく「」の学園に馴染んだとこうことになるのだね。

「」の聞ちよつと覗いたら、十メートルもある大剣とか、厚さ三センチの全身鎧や、口が一つある頭蓋骨とか、いろいろあつたし……。

「そつか……まあ、でもそれなりにやれてるよつだなによつだよ。ギルドの方でも、結構ハイペースで依頼を達成してるので聞いてるよ?」

「いやあ、まだロフランクだしねえ」

「」の短期間でそこまでいけるだけす」「こよ」

「そつ?」

そんな褒められると照れけやつなあ。

ぐふふ。

「そんな頑張ってる緋色には、なんかプレゼントが必要かな?」「え?」

プレゼント?.

マジで?.

かわいい女の子からのプレゼント？

……おおー

「やつたね！」

「あはは、そういう顔でもいるとか體てい甲斐があるなあ

笑んで、ナユタが視線のある方向に向けた。

「それじゃ、あの店でなにか選んでこようかな」

ナユタが見ていたのは、小さなお店。

ちょっとした感覚の店構えで、看板には「Hーメンス」と刻まれている。

「ここは？」

「アクセサリーショップ。それなりに有名なんだ」

「へえ」

ナユタに先導されて、私は店内に足を踏み入れた。

「す……」

店内には、所せましと様々なアクセサリーが飾られていた。しかも数が多いだけじゃない。その一つ一つが、おそらく美しい。

私は正直装飾品とかには詳しくないんだけど、それでもジのアクセサリーも一流のものなのだろうと推察出来た。

「いらっしゃ なんだ、ナユタか

店の奥、カウンターに座っていた女性がナユタを見た瞬間に力の抜けたような表情をする。

青く煌めく長髪に、幾重にも黒い布を重ねたような服を纏った女性だ。

「なんだ、って……いいの、そんな態度で。せつかくなにか買おうと思つてきたのに」

「あら、そうなの？ それなら高いのを買つていきなさい。財布には余裕があるでしょう？」

「……まったく。ところで、ウイヌスさん一人？」

「ええ。ティナは留守よ」

「やうなんだ」

言いながら、ナユタが店内を物色しあげる。

「ねえ緋色、どんなのがいい？」

「んー、任せた」

「どうか私そこまでセンスあるほうじゃないし、ナユタに任せた方が安心できる。」

「うーん。ソウはどんなのがいいと思う？」

「……そうですね。無難に選ぶのであれば、この辺りではないでしょうか？」

問われ、ソウはネックレスが並べられた場所を指す。

私へのプレゼント選びをしてくれている一人を眺める私の横に、いつの間にか気配があつた。

見ると、カウンターにいた女性が立っていた。

「Jの学園の人はどうして唐突に隣にいたりするのだろう？……。

ウイヌスさん……って呼ばれてたっけ？

「なに？ ナユタの彼女？」

ちゅうと意地の悪い田で、ウイヌスさんが歸ねてくる。

「え……い、いやいやー、もうこのじやないですよー?」

こきなり言われて、ちょっと動搖する。

「ふうん……ナコタってあなたみたいのがタイプだったのね」

だから違うじゃー!。

ジー、ヒトウイヌスさんが私の顔を見つめてくれる。

「な、なんですか?」

「……いや。なんていうか、貴方はあれよね」

「あれって?」

「鈍感なくせに、むやみやたらに女をたらじるむ顔してるわ

「失礼なー!」

「これなつなことをいつかと思えぱー!」

私はそんな」としませんよー?..

そして鈍感でもない！

……何故だらう。今どいからか「ははっ、」の人に言ひつけたりやつてゐるの？」「つて意思を感じたんだが。

「なにを根拠にそんなこと言つんですか」

ふんふん！

「なについて……実体験？」

「実体験……？」

「そ。私の男がそういう感じだから。まあ、いい男であることに間違いはないし、仕方ないと言えば仕方ないのでしょうけれどね」

……あ、今私もしかして惚氣られましたか？

うわー！

「ま、問題はいつまでもヘタレが抜けないと」とかじり  
「はいはい、」とかじりませー」

くつせつ、幸せ空氣巻き散らかしやがつて。

リア充爆発しろ！

「ウイヌスセーン」

「あー、どうやら決まったよしね」

ナコタの声が聞こえた次の瞬間、ウイヌスさんの姿はカウンターに戻っていた。

……これは瞬間移動を多用しなくちゃいけない、って法律でもあるのか。

まあ、それはいい。

それよりもあれだ。

ナコタはどんなものを買ってくれたのかなー。

つかつかだ。

+

「はー、これ

店を出たといひで、ナコタが小さな紙袋を渡してきた。

「中、見てもいい?」

「うるさい

ナコタの許可を貰つて、私は紙袋の中身を取り出した。

中に入っていたのは、翼をテフォルメしたような細工のついたネットクレスだった。

シンプルだけど、なにか惹かれるものがある。

間違いくらいなのだ。

値段を聞きそりになつて、やめる。そういうのはマナー違反だ。

「ソウと選んだんだ。気に入つてもらえた?  
「もちろん!」

これを気に入らないとか、どんだけって話だ。

「ありがとね、ナコタ、ソウ!」  
「喜んでもらえたならによりだよ」「私は大したことはしていませんので」

うーん、しかしほんとにいい感じのネックレスだ。

「つけたわ

「どうぞ」

断つてから、私は首にそのネットクレスをかけた。

「どうかな？」

「似合つてるよ」

「ほんと?」

似合つてる、か。

んふふー。

なんていうか、嬉しいなー。

これ、大事にしよう。

「それじゃ、ナユタ！ 次はどこに行く！？」

今日は一日楽しい気分で過ごせそうだった。

放送はつー

「やはー、小夜……つて、おひへー」

風紀委員会外特別支援殲滅執行部の部屋を訪れた私は、室内に小夜ともう一人、見知った顔を発見した。

「茉莉ちゃん」

「……ん」

「入る時はノックくらいしてください」

無表情の茉莉に対し、窓際に座っている小夜が冷ややかな目を私に向ける。

そんな視線にぞくぞくしながらついー

まあ冗談ですけど。

……ま、マジじゃねえしつー！ 本当だしー！

「次からは『氣をつけろ』よ」

言つて、並んでいたパイプ椅子の一つに腰を下ろす。

「ちゅうじどこー……緋色も、聞いていく」

茉莉がそう口を開く。

「うん？ なにを？」

「最近の不穏な動き」

「不穏……？」

これまた、なんか嫌な響きだ。

「どうこう」とですか？」

「……最近、というわけではないけれど……一般生徒の間で、特別クラスへの不満が溜まってる」

「不満？」

小夜がちらりと茉莉を見て、眉を寄せた。

「どうこう」とですか？」

「……特別クラスだけが巣廻されていると、一般生徒は感じているみたい」

「……なるほど」

頷く小夜だが、私にはよく分からぬ。

「別にそれっておかしなことなの?」

首を傾げながら尋ねる。

「特別クラスって、優秀な生徒を集めてるんでしょ? それが巔員されても、特権でしょ。別に不満を抱かれるようなものじゃないと思ふんだけど」

「それは持てる者の口調でしうつ

溜息をつきながら小夜が呟つ。

「自分で言つのもなんですが、私達は本当に特別なのです。それなりのものを持つて、それなりの力を持つて、それなりの理由を持つて、今この時まで生きて、特別クラスに所属している。私達は、それなりのものを最初から持つているのです」

「それなり、ねえ」

「例えば才能とか?」

「……まあ、ぶつけやけその辺りは否定しないけど。

でもそれだけじゃない。

私だって試練で延々自分と殺しあつてやつやへじまで追いついたんだ。

他の特別クラスの人だって、私と同じようなものではないのだろうか。

「この学園には、特別クラスの者より努力している者はいる。中には、特別クラスの者並みの実力を持っている者も、少なくはない」「へ？」

あれ、そなの？

私はてっきり特別クラスって突出した生徒の集まりなんだと思つてたんだけど……。

「……知らなかつたようですね  
「め、面白い」

「なんだ……へえ。

……あれ？

「それじゃあ特別クラスって、なにを基準に選ばれてるの？」

「……」

そこで、小夜は口をつぐむ。

私は代わりに茉莉に視線を向けた。

「……正直、私にもそれは知らない」

えー。

担任さんも知らないんですか。

それっていいのだろうか……。

「……ごめん」

「あ、いや。謝るほどいの」とじやないよ?」

……ただ、特別クラスってのは、思ったよりも複雑らしい。

てっきり強い人集めただけのものだと思ってたのになー。

うわー、もしかして私、とんでもないところに所属しちゃった?

厄介事の予感がする。

「……それで、その不満とやらせ、今どのよひに動いているのですか？」

小夜が話題の続きを促す。

「今のところは、学園側への特別クラス撤廃の活動。でもこれは、理事達が抑えてくれるから問題ない」

「へえ……それなら心配ないんだ」

「あなたは馬鹿なのですか？」

「うぐっ」

さうりと小夜に罵倒されて、胸の奥が熱くなつた。

ああ、なにこの痛み。

き、気持ちい　げふんげふん。

いけない。

私はマゾではない。

ノーマルだ。

どつちかと言えばサドだ。

……ま、まさか私の内にはうどMが同居していながら…?

「いいですか。人というのは、行動を抑え込まれると、別の方に向かうものなのです。時として、さらに強引に

小夜が目を細める。

「この場合、訴えが通らないとなれば……次に考えられるのは、実力行使でしょうね」

「へ？」

実力行使？

またそんな、物騒な話があるわけが……ある、わけ、が……。

……ありそうだ！

だつてこの学園だし！

いきなり特別クラスの面子と一般生徒から選出された面子で総当たり戦やるぞ！

みたいな展開になつても不思議じゃない！

「で、でもそういうことになつたら学園側でなんとかしてくれるんじゃない？」

「そういうアリケートな問題に学園側が手を出すと、余計に状況を悪くしかねない」

茉莉がぽつりと言ひ。

……つまり、学園側に期待するな、とにかく？」

そんな殺生な。

「まあ実際にどうなるかは分かりませんが、気をつけるに越したことはないでしょう。この話、他の特別クラス……特に、アイリスには？」

なぜアイリス、と考えてすぐに答えは出た。

あの性格だしなあ。

こないだの学食でもやらかしてたし。

……ああ、よく考えればあの時のあれも、特別クラスへの不満からきてたんだなあ。

でも私的にそれを言つならHレナも十分やばいと思つけど。だって人の人、腹黒だし。腹黒だし。大切なことなので一度言いました。

改めて、特別クラスの面子を思い浮かべる。

私。

ナユタ。

アイリス。

エレナ。

スイ。

小夜。

それと担任の茉莉。

……なぜだらう。

クラスメイトと担任の顔を思い浮かべただけで悪寒が止まらない。

やつべえ滅茶苦茶不安だ。

頭を抱えたい衝動に襲われていると、不意に校内放送のピンポンパンポーンという音が流れた。

あ、この学校で校内放送流れるの初めて聞いたかも。

『いきなりの放送失礼する。ゼファーエローゼンベルクだ』

そんな声が聞こえた。

ゼファーエローゼンベルク？

んー？

どつかで聞いたことあるなあ。

『今日、この放送を流した理由はただ一つ……私達の要求を学園全体に知らしめるためだ』

おや、なにやら嫌な雰囲気。

というか背筋に汗が……。

あー。

やつべ。

思い出した。

ローゼンベルクって、あの食堂でアイリスと問題起こした人じやん。

あの、特別クラス大つきらいです、つて顔してた。

『我々はこれまで、ずっと疑問に感じていた。特別クラスという存在について』

ほりね。

あつはつまつー。

『私はいい判断しよう。特別クラスとは、学園の最頂に他ならぬ  
いとー!』

「派手にやるものですね」

眉間に皺を寄せ、小夜が呻くように呟く。

『故に、私は要求するー。特別クラスの解散をー!』

「言つちやつたよ……」

もつやめよつよー。同じ学園の生徒だー。アイラブ平和! ノ  
ーモア闘争!

『しかし言葉だけでは学園側も頷いてはくれない。そこで、私はこ  
こに提案する』

私の本能が警鐘を鳴らしまくっていた。

絶対まづい。

いけないことが起きるや。

『特別クラスの担任を含めた七人と、我々が選抜した一般生徒七人による対抗戦を行い、それに勝利した方の要求を敗北した方が受け入れる！ それでどうだ！』

ほりきたあー！

やつぱりね！

そんなことだらうと思いましたよ！

……うわあい。

もうなんか憂鬱だねえ。

『再度言つ

天井を見上げる。

他の皆はこれをどんな気持ちで聞いているのだろう。

『特別クラスよ、覚悟しろ！ 私達は、貴様らを認めん！』

アイリスあたりはニヤニヤしてそうだなあ……。

あ。あとで一回軽く殴るう、そりしそう。

殺す。

殺す。

意思など持つていられない。

感情など持つていられない。

壊れてしまふから。

ああ、なんて残酷なことだらう。

殺したくなど、ない。

けれど残酷なこと。

殺さなくてはならない。

悔しいけれど。

悲しいけれど。

大切なものは、順番づけされる。

だから、私の大切なものを守るために、大切でも、殺す。

やう決めても、やつぱり辛すぎるから。

だから、機械になることを選んだ。

私のこの身体はただ殺すところの作業をこなすだけのもの。

殺す。

殺す。

邪魔なものを排除して、殺しに行く。

あの子達は、どう?

あの子達は、どうなるの?

殺しに行こう。

愛おしくとも、愛おしくとも、拾つことのできない、彼女達を。

私はきっと、最低なのだ。

本当に 最低だ。

飛び起きる。

呼吸はひどく乱れていた。

「つ……な、こ……」

胸を抑える。

心臓が張り裂けそうなくらいに激しく鼓動をさせんでいた。

「……今の」

いつか見た夢に、すく似てた。

なんなの、この夢。

すく、嫌な感じがする。

「…………」

やめよ。

所詮は夢だ。

考えたところで、なにか分かるわけでもない。

だったらきれいさっぱり忘れてしまったほうが、よほどいい。

そう。

悪夢なんかにうづくじするのは私のキャラじゃない。

私はいつでもどこでも面白おかしく愉快に奇天烈に、そして余裕で。

そういうキャラでしうが、私ってやつあ。

棘ヶ峰緋色つてやつあね。

あはっ。

+

ゼファー君、独身からの熱いメッセージが全校生徒どころか学園世界全土に届けられた翌日。

私は初めて、特別クラスの教室というものを訪れた。

教室は、至極一般的な学校の教室だった。

……うん、そうだよね。

机があつて、椅子があつて、教壇があつて、教卓があつて、黒板

があつて……これが教室つてもんだよね。

うんうん。

……なんで特別クラスだけ教室がまともなんだろ？。面子はアレなのに。

というわけで、教室に六つ置かれた机に特別クラスに所属する生徒達が座っていた。

つまり私、ナユタ、アイリス、エレナ、スイ、小夜である。さらに教室の後ろには静かにソウが立っていて、教壇の上には茉莉が立っている。

「それで、どうするのだ、茉莉」

アイリスがタメ口で茉莉に問いつ。

こら、彼女あれでも先生ですよ！

私も敬語使つてないけどね！

てへつ。

「どう、とは？」

「回つぐどこのはい。」うして集められた理由は全員承知しているだろ？。

言つて、アイリスが教室にいる面々を見回す。

「……そうですね」

エレナが頷いた。

「先日の、ゼファー＝ローゼンベルク、でしたか？」

について、ですよね？」

彼の宣戦布告

「まあ、常識的に考えてそれ以外ないでしょ」

エレナの言葉にスイが同意する。

「…………ですよね。」

「面倒なことするよね、その彼も」

ナコタが苦笑しながら言つ。

また、ナコタンはいつも通りだねえ。

私を見てみなさい。

小心者の私はこれからの中園生活がどうなるのかと戦々恐々です  
よ。

おひまほひま。

……ごめん、実は割とそこまででもない。

ぶつちやけ、どうでもこつかなー、つてのが本音だつたり。

諦めてるとか他人事みたいに感じてるとかじゃなくて……なんだ  
うね。

この面子と一緒にいて心配」ととか、馬鹿馬鹿しくない?

ねえ?

「それで、どうするのですか? あの話、受けれるのですか?」

小夜がどことなく面倒くさいみたいな雰囲気を漂わせながら茉莉に質  
問する。

全員の視線が茉莉に集中した。

「……理事長と、理事五人からの伝言がある

茉莉がそう口を開いた。

理事長つてのは、ツクハさんだよね。

で理事はこないだのナンナ理事とかのことか。言い方からすると、複数いるっぽい。

まあこれだけでかいところだし、理事が何人もいてもおかしくはないか。

って、ありや？

「ん？」

なんか……おかしいな。

私以外の面々の顔がちょっと青くなっているような。

「その面子からの話なんて聞きたくないわ」

スイがそう嫌そうな顔をする。

アイリスとエレナも似たような顔だ。

というかエレナは「うわあ、きたよ面倒事。ウゼュ」みたいな顔してるんだけど。あの、いつものいい子ちゃんの顔はどうぞへ？

小夜は田を瞑り眉間に寄つた皺を揉みほぐしている。

でソウは天井を仰いでいて、ナユタは……なんか疲れた顔だ。

暗どじつけやつたんだろ？

「緋色、どうして平然としてるの？」

ナユタがそう尋ねてきた。

「いやいや、そっちこそなに顔青くしてるの？」

「……あ、そつか。緋色は知らないのか」

ナユタが溜息を吐く。

「ツクハさんはともかくとして、うちの理事連中は、その……うん。濃いんだよ。いろいろと。それでねえ……あの人達からの伝言かあ、絶対まともな内容じゃないよ」

嘆くようにナユタはそう机に頬杖をついた。

うーむ。

ナユタにここまで言わせるとは、一体何者なのだろうか、理事の

人達は。

会つてみたいような、会つてまたくなじような。

「云々は二つ」

茉莉が指を二本立てる。

「まず一つは、ローゼンベルクの挑戦を受けること」

指が一本減る。

「二つは、負けるといふ面倒なので、絶対に勝て、とこつ」と

さらに指が減る。

「それで最後が……もし負けたら、おしおきに……本気の全講師との戦争やられる。二日間耐久で、瀕死になるまでリタイア無しで」

茉莉が手を下ろし、俯く。

教室中に、一気に思い残気が発生した。

……うわ。

え、なに。

負けたらそのままバッドハンドルート？

全講師ついたあ、あれですよね。

ライスケ先生や丘護先生、さらには佳耶先生とかもくるわけで。

ガチですか。

……あれ、なんでだろ？ 田から汗が……。

「……試合は、今日金曜日後から、一日二組ずつ、やるって

「！」

ばん、と。

机を叩いてアイリスが立ちあがる。

「特訓だ！ ハレナ、スイ！」

「ええ、ええ！ 姉さん！ スイ！ 二日で『顕現』をマスターして  
もらいますからね！」

「やむをえないわ。ハレナ姉さん……殺す気で特訓して。負けるよ

り、その訓練のほうが、絶対に楽だし……。」

「おお、三姉妹が燃えている。

小夜は静かに席を立ち上がり、そのまま教室を出していく。

だがその途中には、しつかりと静かに炎が灯っていた。

「…………うわあ、びひじょ」

思わずそんな言葉が口から出た。

チーム戦だし、私足引っ張れないじゃん。

「大丈夫だよ、緋色」

ナコタがそう声をかけてきた。

「緋色以外の全員が勝てば、問題ないんだから」

「そ、そりゃそうだけど……」

「でもなあ……それでも、なんかしないと。」

「ね、ねえナコタ、《顯現》の訓練とかしてくれない？ なんかいいの？」

「え……？」

ナコタがきょとんとして、次に苦笑した。

「「めん、緋色。普通の訓練ならともかく、《顯現》はねえ……人に教える教わるつてものじやないんだ」

そういうえばいつぞやの似非関西弁もそう言つていたなあ。

「じゃ、じゃあどうしよう……」

「まあ、やれるだけやつてみたら？ そうだなあ、とりあえずこのクラスの一人一人の訓練に付き合つてみるとかは？ もしかしたら、なにか掴めるかもよ？」

「おおっ」

ナイスアイデイアですよ、ナコタさん。

残り三日か……。

おし！

「そんじやとりあえずナコタさん！　まず訓練突き合わせてください

いっス！」

「了解」

ナコタが笑顔で頷く。

「それじゃあ、広い場所に移ろつか

酷いのはつ！

本当に後悔しましたありがとうございました。

今日一日を振り返って、もはや私は賢者モード。

邪念を抱く余裕すらあつませんわー。

……は、はは。

自宅の畳に寝転がり、天井を見上げつつ溜息を吐く。

あのあと……ナコタの言葉通り、皆の訓練にちつと入ってみたん  
だけど……うん。

結果は、もういつまでもないと思つただ。

あれは、酷いよ。

+

荒野がひたすらに広がっている教室の中。

「それじゃ、軽く命の危険を感じて見よつか

朗らかにナコタがそう告げた。

「……え？」

今私の顔を是非とも全人類に見てもらいたい。おそらく全員が全員十点満点で間抜け面という評価をくださることであろう。

「あの、ナコタ？ 今、なんて？」

一応、聞き返してみる。

「だから、死にかけたりしてみよつか、って」「いやいやいや」

思いきり首を横に振る。

「何故にそうなる！？」

「え？ だつて『顯現』を使いたいんだよね？」

「そりや、まあ」

聞くと、これまで何回か見て来たけれど、凄かったし。

実際ちうつところまでも何回か見て來たけれど、凄かったし。

私の大鎌はそれが未完成の状態だつていうから、どうせなら完成させたいし。

「……あ」

そこまでも考へて、ふと思に至る。

「そりいえばナユタと初めてあつたとき使つてたあれつて、《顯現》？」

あの異世界の破壊神だかなんかを消滅させたやつだ。

馬鹿みたいにでかい槍とか出してたやつですよ奥さん。

「うん、ううだよ  
「はあー、やつぱり」

うん、やつぱり凄い力みたいだ。

「……で、どうして私に命の危険を感じひとつ話になるのでしょうか？」

「《顯現》って、大体がそういう危機的場面で使えるようになる場合が多いから、かな」

「危機的場面……」

あー、そりゃそうか。

いわゆるテンプレってやつ。

命の危機に、今私の新たなる力が用覚めるー。

魔法少女、リリカル緋色、始まるよー。

嘘です。

……閑話休題。

「というわけで、緋色。やってみようか?」

につこうナユタがスマイルを浮かべる。

「

ぞくりと背筋を冷たいものが伝う。

これはやべえ笑みだ。

本能的に感じた私は、すぐに離れた所にいるソウに視線をやった。

「そ、ソウ様……！」

困った時のソウ頼みである。

しかし、知つてゐるかい、私よ。

いつの時のソウ頼りつてのはなあ……。

「頑張つてください」

成功率がめっちゃ低いのですわよ！

「うざやああああああああああああああ！」

ソウがさらりと離れていく。

待つて！

ここで見捨てられたら私、死んじやう！

「大丈夫、殺しあしないから」

殺しは、つてところがもう駄目！

あと心読むな！

「それじゃ緋色」

ナコタが近づいてくる。

死神の足音とこゝのまゝこゝのものか。

へ、へへ。

そして私は拷問じみた訓練を受けることになった。

ナコタにしては、もひ、語りたくないし、思い出したくもない。

私、死んじやつてしまあ……。

+

ナコタとの訓練に嫌気がさして逃げだす。

校舎内を走る。

通りがかつたアイリスに捕まる。

……三行で今の私の絶望っぷりがおわかりいただけただろう。

さて。

氣を取り直して現状の説明といかせていただこう。

場所はいつぞやの戦争」ハ「マニア部の部室。

日本の首都、東京が壊滅し、盛大に燃えあがつております。

その様はまさに地獄絵図。

そんな東京上空に私はいた。

なんでここにいるか、なんて今更尋ねても無駄だろうと分かっているので、あえて聞かない。

じうせ氣分とか、そんな感じのもので私の迷惑を考えもせず引っ張ってきたに決まっている。

だつてアイリスだもの！

「とりあえず私はある程度本気を出すので、貴方達はさつさと私の本気を引き出せるよう頑張ってください。まあ、つまり《顯現》を使えるようになれ、ということなのですけれどね。《顯現》は《顯現》でしか越えられませんから……ちなみに、流石に完全な《顯現》『まではしないので安心してください。したら死んじゃいます』

おい今なんか最後ちょっと不吉なこと言わなかつたか？

私はアイリスとスイに並んで、エレナと相対していた。

エレナがゆっくりと右腕を上げる。

その腕が、光の粒子になつて弾けた

かと思つた次の瞬間。

そこに、透明な、まるで水晶で出来たような美しい弓を手にした、  
青い帯が絡みついた右腕が現れた。

「腕一本……まあ、この程度で十分でしょう」

悠然とエレナが言って、弓を私達に向ける。

それだけで私は……敗北しかけた。

恐ろしい。

とんでもなく、恐ろしい。

こんなのは勝てるわけがないじゃないか。

あれは戦える相手ではない。

そう、私の中で、なにかが叫ぶ。

隣を見れば、アイリスとスイもまた自分の中に生まれた恐怖心を感じ、それなんとか抗っているようだつた。

「……」

拳を握りしめる。

「　」「、の…」

どうにか声を振り絞りながら、私は未完成の《顯現》である大鎌を取り出した。

その大鎌に、三人が目を丸くする。

「あら?」

「え?」

「……貴方、それ」

スイが私の大鎌を指差す。

「え、これがどうかした?」

「どうかしたって……それ、《顯現》ですか?」

「うん。まあ不完全なんだけどね」

言いながら大鎌を素ぶりする。

眼下の東京の街の三分の一ほどが消し飛んだ。

「……す、するこではないか！」

「おおつー？」

アイリスが突如叫ぶ。

「いつの間にそこまで使えるようになったのだ！」

「いつの間にって、この間？」

「あつさつ言づなー」

「えー」

だつたらどうじゆうてのや。

使えるものは使えるんだから仕方ないじゃーん。

「くつ……ー」

悔しそうにアイリスが大鎌を見つめる。

「スイ！ 私達もさうあと使えるようになるぞー！」

「……そうね」

アイリスとスイが囁き合ひ。

「それとルール変更だ！」

「え？」

あれ、なんか嫌な予感がしますよ？

白櫻じやないですかごこの学園にきてから嫌な予感がはずれたことがありません。

「私とスイ対エレナ対緋色！ 緋色はもうここまで出来るんだから、チーム組む必要なんてないだろ！」

「えー？」

ちなみに。

このルールで始めた直後、私はエレナとアイリスとスイにフルボツ「やれることとなつた。

エレナは「一番危険なので」と言い、アイリスとスイは「なんか悔しかつたから」と言つた。

……ちくしょー！

「の流れを説明するまでもないのだろ？」「一応説明しておけ。

例の三姉妹のもとから逃げだす。

茉莉にばつたう会ひ。

問答無用で引きずられる。

へへへ。

私あ、もう駄目だ。

田の前には、茉莉と、そして小夜がいた。

場所は砂漠。もちろん教室だ。

もうね、バリエーションありすぎ。

きつときのうち宇宙空間とか出てくんだけ、これ。

「で、どうして私が彼女を鍛えなければならないのですか？」  
「……緋色が『顕現』を使いこなせば、全体の勝率が、あがる」  
「それはそうですけれど」

小夜がいかにも迷惑そうな顔を私に向ける。

そんな田で見ないでよ。私だって望んでるわけじゃないんだし。

「……はあ、まあいいでしょ？」

え、いいの？

「私や茉莉は『顯現』は既に使いこなせてますし……」

「え、小夜と茉莉つてもう『顯現』使えるのー？」

「ええ」

「……ん」

あつさつと小夜と茉莉が頷いた。

「……でも」の一人なら使ってそづだよなあ。

「ひへ、霧岡氣つてこのの？」

なんか納得。

「……そつか」

「……」

それじゃあ……。

私は大鎌を手の中に出現させる。

刹那

私は小夜や茉莉が戦闘態勢をとる前に切りかかつた。

「つ、なにを……！」

焦つた口調の割に、小夜はあっさりと攻撃を避ける。

茉莉も動搖だ。

「アーリー」

私だって学習するんだ。

「そのまま流れに身を任せれば、自分がボコボコにされる」とは分

かつている！

ならば！

# 結果。

駄目でしたつ

訓練が終わってた頃には、私はボロボロだったそうな。

めでたしめでたし

……ちごともめでたくなしよ。

九三

+

「……あは、あはは」

あれ、なんだろ？

視界が滲んできちゃつた。

「私、頑張ったよね……？」

その言葉を最後に。

私が意識を手放した。

体力の限界つ！

妄想はつ一

地獄のような一日の翌日。

「……明後日、かあ」

呟いて、私は飲むヨーグルトを飲む。

……やつぱりこの表現おかしくね?

飲むヨーグルトを飲む。

「つむ。

じゅうとした白い液を飲む。

……いやいや。

……私がやつても誰得だよ。

つて自分で考えて少し落ちこんだ。

「……わ、私にだつて需要が」

……あつ、ますよね?

べ、別にいいし！

靈體とか氣にしねえし！

私はいつだってアナガーワンなのさー。

泣いてねえし！

いいもんいいもん私のことを他の美少女達に置き換えてやるからー。

そう、例えば……！

「ん……」

白い液を口に含んで、ナコタが頬を上揚げさせ、少しそこに手を

…。

+

「これはいかん」

思わず鼻息が荒くなってしまった。

「破壊力抜群だな！」

たつたの一行で「これとは……おそらくしげ、ナユタン。

仕方ない。ナユタは諦めて……。

+

くちゅ、といつ音がした。

+

「……ふふつ」

ソウが妖艶に微笑する。

「美味しい……」

+

おつといけねえ鼻血が。

ティッシュ、ティッシュ。

ソウが妖艶な微笑とかそれなんてチート?

いいわー。

いいわー。

テンションあがつてきたわー。

次いつてみましょー。

+

「ひ、は……！」

アイリスの口の端が持ちあがる。

そこからは、白い筋が垂れている。

「まだ、こんなものでは足りんな」

アイリスが口の中身を嚥下する。

「もつと……もつと、飲ませる」

+

「ひは。

ばんばん飲ませひやいますねー

たまらんー！

みなぎつてきたああああああああ！

+

「こんなのが飲ませて、嬉しいんですか？」

見下したよつた田でエレナがこちらを見下ろす。

「………… せひナヘ」

エレナが少し口を開くと、そこには白いどろりとした液が……。

彼女は自分の口に人差し指を差しいれると、それをぐちゃぐちゃと搔き混ぜる。

+

エレナさあああああああああああああん！

Но и, но как же!

あふん！

次だ次いいいいいいいい！

1

「いせり」

せき込んだスイの口から白い液が零れだして、彼女の掌の上に溜まる。

「う……もつたい、ない……」

言つて、スイが掌に溜まつた液を、一気に飲み込む。

「……う、……つー」

+

まさかの健氣キャラ！

あのクールなスイちゃんがもつたいなって！

もつたいなって！

つかつかおおおおお飲ませたい！

ちからん飲むヨーグルトのことだよー？

はい次いつ！

+

「……これを……」

茉莉が胸元に垂れた白い液を、指でそつとすくう。

その指を、茉莉が舐めた。

彼女の可愛らしい小さな舌が、白い液をすくって……茉莉の咽喉  
がなった。

「……美味しい」

+

美味しいですかそうですか！

ぐへ、ぐへへ！

ええでんなあ、ええでんなあ！

「ミーミーが止まらないぜ！」

次だ次！ 次に参るぞー！

+

「貴方は、どうして」「……」

頬を赤くしながら、小夜が視線を彷徨わせる。

「……いいですよ。飲めばいいのでしょうか、飲めば」

溜息をついて、小夜が意を決して、一気に白い液を口に呑んだ。

そして、口の端から少し白い液をこぼしながらも、小夜は一生懸命にそれを飲みほした。

「……はあ」

小夜の吐息に、白い液の匂いが混じる。

+

「これまたエロいでんなあ！」

あひやひやひやひやひや。

畳の上を転がる。

もううイイイッ！　これイイわあっ！

だが！

だが嘘だよ！

これで終わりではなくてよー。

まだ「ザート」が……あるいは真打ちが、残っているではありますか！

そうー！

次イツ！

+

「……ふふつ、えつち、なんだ」

妖しげに笑い、ツクハさんがゆうくつと近づいてくる。

「こんなことでも興奮して……でも、私も人のこと、言へないかなあ」

舌舐めずりをして、ツクハさんが白い白瀬を口に入れると

「濃くて……絡みついて……おこし」

ツクハさんの身体が、小むく震える。

「ねえ、見て？」

ツクハさんの指が、ゆっくりと自分自身の太股から、その内側へと移動していく。

さらり、もう片方の手の指は、口元から、首、鎖骨……そして……。

「私も、こんなにえっちなんだ……」

+

「我が生涯に一片の悔いなしぶりやあぶつまうつ！？」

後半鼻血のせいでまたもに喋れませんでしたよ。

「おーい、緋色……って、なんだこれ！？ 殺害現場！？ ちくし  
よいやつら！ 緋色を夜討しあがったのか！？ くつ……緋色、お  
前の無念はこの私が……！」

どうからかそんな声が聞こえました。

あの……ドアをノックするとか、インター ホン鳴らすとかしてくれません？ いきなり鍵壊して部屋に入つて来るんじゃないですかよ。

現れたのはっ！

鼻血によつて演出された殺害現場（笑）の掃除を終えて。

私はアイリスに飲むヨーグルトを出した。

アイリスは「何故これ？」という顔をしながらも、それを普通に飲む。

……まあ、そうだよねえ。

普通に飲んじゃうよねえ。

ちえつ。

「で、といつわけで付き合つてくれ」

いきなりそんなことを言われた。

「恋人としてなら」

とりあえずそつ返した。

「なに馬鹿なこと言つてこりのだ。ふざけでないで……訓練に付  
れ合ひや」

おや命令形になりましたよ。

まつたく、やあねえ。

つか脈絡がなさすぎて素で意味が分からんのですよ。

「いきなりすぎる……どうこいつことなの？ 説明してよ」

「ふむ。説明しなかったか？」

アイリスは家に来て殺害現場（笑）を叩撃して一般生徒陣営に特攻かけようとしただけだよ。そして私がそれを一生懸命止めたんだよ。

説明のせの字もなーってば。

どうして説明したなんて勘違い出来るのや。

「ふむ……あれだ。エレナがなあ、今日はスイを徹底的にしゃべ  
とこうので」

「しゃべー。」

「むー。」

私の反応にアイリスが眉を寄せた。

……そんな訝しむような顔するなよ。

「じゃくなんて言われたら反応しけりののが緋色やなんだよ。  
分かってくれよ。

「……続き、どう？」

「うむ……？ まあ、それでな。私はどうしたらいい、と聞いたら  
緋色のところにでも突っ込んでくればいいと言ったのだ。だから私  
はここに来た」

Hレナ あ……。

あの子絶対に私に面倒事を押し付けたよねえ？

「……私にも、予定とこっちものがあるんだナビ  
「なんだ？」

きょとん、と聞き返された。

「いや。修行つていうか、《顯現》を使ってこなせぬよつにならない  
と……」「  
「ならそれ对付合おう」

「えー」

「なんだ、文句があるので」

「いやあ、そういうわけじゃないけどさあ」

実は、昨日氣絶する前にライスケ先生に連絡を取っていたのだ。

別に愛の言葉とか送ったわけじゃないよ。

修行に良い場所ないうすかー、って聞いたんだよ。

それで、とある人を紹介してくれるらしいんだ。

なんでも『顯現』を使いこなしている人の一人で、いろんな世界を放浪している人なんだとか。

名前は……なんていつたつけ？

イ……イなんとかさん。

確か名前は三文字くらいだつた氣がする。

で最後があ行だったね。

なんかライスケ先生の口ぶりから、結構先生と親しい人っぽかつたけど……。

曰く、下手したら死ぬかもしれないけど、そっちのほうが丁度いいんじゃない？まあよほどのことがないなら死なないって。うん、多分、きっと、そうだろ。

と、素敵なものに不確定な感じのことをおっしゃられました。

そんな危険人物のところに行くの、言ひちゃなんだけど《顕現》もどきもあり出来ないアイリスを連れていくのはなあ。

「……危ないんだけど？」

「問題ない。私だからなー。」

意味の分からぬ自信だ。

「……むう」

しかし、この様子からして、引きががつせつにない。

……まあ、いつかなあ？

死なない、よね？

危なかつたら返せばいいんだし。

……うん。

まあいつか。

ライスケ先生が相手の人に約束を取り付けてくれたらしいので、集合場所である氷原教室に入る。

氷原のど真ん中に、一つ人影があつた。

「　悪い、緋色。私は急用を思い出した」

その姿を見た瞬間、アイリスが身を翻す。

「え？」

アイリスの顔は、青を通り越して土色だ。

「ほう？　まあ、待て、アイリスよ」

その時、教室の扉に奇妙な剣が突き立つた。

刀身の色は白と黒が入り混じり、柄は仄かに金色に輝いている。剣には、水と、そして細い竜巻のようなものが巻きついていた。

えーっと？

氷原に立っていた人物に視線を向ける。

凄く綺麗な女の人だった。

歳は……よくわからない。

外見だけ見るなら私と同じくらいかな、とも思うけれど、雰囲気はすごく大人っぽいっていうか……なんて言えばいいのかな。

端的に言つと、多分、格が違つ、つことになるのかもしれない。

私の横で、アイリスが涙目になりながら振り返る。

「ひ、緋色、お前はなんという人のところに連れてきたのだ……」

「え？」

えつと、もしかして、お知り合いなのかな？

「……初めまして、だな。棘ヶ峰緋色。噂だけは聞いている。有望株だ、とな。今日はその噂を確かめる意味もあつたし、ライスケから頼まれたのもあり、お前の面倒を見てやろう。私はイリア……そこには、アイリスの母だ」

！

!!

!!!

重大な件なのです二度驚きました。

「え、え!? アイリスの、お母さん…?」

「ちよつ、待つ、若狭じやない!?

こやこの庄界ならアリなのか…?」

「早速お前の修行をつけてやる……と言いたいところだが」

ちらりとイリアさんがアイリスを見る。

「アイリス。何故お前がここにいるのだ? なんだ、お前も面倒を見て欲しいのか?」

「せつとイリアさんが笑う。

「い、いや……私は、その… なんとか、そういうつもりで

はー」

必死にアイリスが首を横に振る。手。

「もう遠慮するな。なあに、たまには母の胸を貸してやるわ」

嬉しそうに、イリアさんが言つ。

……うわあい、悪魔の微笑みだぜ。

アイリスの姿は、もう見ていろだけで哀れなほどだ。

「 『顕現』 」

空間が砕け散つた。

そう錯覚するほどの衝撃が、私の身体を通り抜けた。

実際には、空氣の流れ一つとして変わつてはいないのに。

「……これが」

気付かぬうちに、私の声は震えていた。

よくよく考えれば、私は《顯現》といつもの初めて見るのだ。

それらしいものは何度か見てきたが、完全な《顯現》ではない。

「これが……《顯現》」

ゆったりとした赤い衣が舞う。

まるで舞踏会に向かうお姫様が切るような豪奢なドレス。

その腰から、白と黒の帯が伸びる。

左肩のあたりに、細い水色の結晶柱が、右肩のあたりに翠色の結晶柱が三本ずつ浮かぶ。

さらに右手の中に、光すら吸い込むような漆黒の剣が一本現れる。

……綺麗、だった。

そのイリアさんの……《顯現》は。

怯えではなく。

恐れではなく。

これは……なんといつべきか。

言葉には、とても出来ない。

ただただ……挫けそうだった。

こんなものを前に、どうして私なんかが立つていらぬよ？

そう思わずにはいられない。

心が、粉々に打ち砕かれる。優しく、柔らかく、それでも着実に、敗北していく。

……駄目だ。

駄目だ駄目だ駄目だ駄目だ！

そんな自分の意識を塗り替える。

なにを考えている？

敗北？

いやだ。

こんな……こんな敗北を私が味わうなんて、私は認めない。

《顯現》 もどきの大鎌を取り出す。

「ほう？」

少し感心したようなイリアさんの声。

心臓は弾けそうだった。

声一つで、何度も殺されかけるのだろう。

胸を抑えながら、大鎌を真横に構える。

「……！」

余裕なんてなかつた。

切りかかる。

距離を無にして。

時間経過を超越して。

大鎌の刃はイリアさんの咽喉元に突き刺さらない。

イリアさんに触れた瞬間、大鎌にひびが入り……。

砕け散った。

「……え？」

「素人にしては上々。だが真の《顯現》を相手にするには児戯に劣る」

イリアさんが微笑んで、私の目を覗きこんだ。

「お前は見所がある……そうだな。今日中に《顯現》をものにしないでなければ、殺す。いいな？」

……え？

「アイリスもだ。無能な娘など持つた覚えはない。いい加減お前も《顯現》をしろ。でなければ、縁を切るぞ？」

イリアさんのあまりにも傲慢で高圧的で絶対的な言葉に、私もアイリスも、ただ固まるしかなかつた。

「なあに安心しろ。もちろん私は……全力でいってやる。光栄に思え？」



## 片鱗はつ一

「 こふつ 」

気付けば、肩口を切り裂かれていた。

おびただしい量の血が、口の中から溢れだす。

呼吸がまともに出来ない。

肩から入つて、肺か気管かが傷ついたのだろう。

普通なら致命的な怪我だが、収納空間から取り出した有機液体金属が血液を代替し、魔力によって強化された細胞がまたたく間に傷を塞いでいく。

「遅い。再生に一瞬たりとも時間をかけるな」

左腕が切り飛ばされた。

「いやで、私は自分を切り裂くものの正体をようやく知るにいたる。

イリアさんが握っていた黒い剣だ。

振るわれたことにすら、まともに気付けなかつた。

嫌だ。

逃げだしたくて、逃げだしたくて、たまらなくなつた。

こんなのを相手にしろ？

不可能だ。

絶対に勝てない。

……そんな弱音が次々に溢れだす。

「つ……」

左腕が再生して、私は再び大鎌を取り出した。

「う、おおおおおおおー。」

大鎌を振り上げる。

「だから、遅い」

大鎌が砕け、私の両手首が消し飛んだ。

さらり、そこから侵食するよつた私の両腕が肩まで破裂する。

全身に裂傷が生まれ、血が滝のように全身を伝った。

死ぬ。

死んでしまう。

止のままでは、殺される。

まさか、これは訓練なんでしょう？

ならほ」の渾茶苦茶な身体をどう説明する？

殺しにきてるよ  
これ

絶対、  
そうだ。

二〇

嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ！

「…………」

声にならない呟きが出る。

どうして私がこんな田に遭わなくちゃならなーいの？

「えなの…………」

……違つ。

違つ、違つ、違つ違つ違つ違つ！

「違つッ！」

今を呪つことなんつって、なんの意味があるの。

そんなの私ひじへなーいよ。

私は……棘ヶ峰緋色は……こんなキャラフじやないー。

腕の一本一本が違つた！

身体が碎かれて、だから違つだといつのだー。

私は……私と違つ人間は……ー

なにかに追い詰められるなんて柄じやない。

なにかに屈するなんて柄じゃない。

信念も理想もない。

でも、矜持だけはあるんだ。

私がこれまでに生きてきた人生は、面白おかしくて……だから、それは、これからも曲げるつもりはない。

私はこれまでの生き方を、自分の在り方を、曲げたりはしない。

なら……」これは違う。

「……。」

いつのまにか倒れていた身体を、ゆっくりと起こす。

傷は治っている。

なら、問題などないにもない。

「ほつ……」

イリアさんが感嘆したような吐息を漏らす。

「立つか……折れるかとも思つたが、存外、いい根性をしている」  
にやりとイリアさんが笑う。

「…………まつ」

だから笑い返してやつた。

「！」の程度、ビリビリして」とないね

「……」

イリアさんの表情が、僅かな驚きに変わった。

「貴様……ふむ。なるほど、あいつが選んだというのも、納得か……  
これはあいつと同質の特異だな……」

「なにぶつぶつ言つてるの、ヤー！」

次の瞬間、私はイリアさんに肉薄し、瞬時に取り出した大鎌を振るつた。

ありとありゆる概念を引き千切り、大鎌の刃はイリアさんの首を狩る。

なんて、あるわけないよね。

大鎌は、碎ける

触れただけでイリアさんに圧し負けて、砕け散る。

「……このっ！」

さらに大鎌を取り出し、叩きつける。

碎かれる

叩きつける。

それを、刹那に数千回も繰り返す。

「ふん」

イリアさんが剣を振るうと、私の身体が横に吹き飛ばされた。

空中で私の四肢が切り落とされ、右の眼球が貫かれ、内臓が破裂し、咽喉を裂かれた。

地面にボロ雑巾よりひどい有り様の身体が転がる。

「がはつ」

痛いなんてもんじやない！

痛みになれた私でも、痛いという次元を優に超えた感覚を叩きつけられる。

常人なら、きっと狂つて、狂つて、狂いきつていったろう。

雄叫びをあげながら、私は再生した四肢で身体を起こした。

そんな私を見て、イリアさんが鼻をならす。

「ふん……いい気迫だ。それに比べ

イリアさんの視線が、アイリスに向いた。

アイリスの身体が震える。

「お前のその様はなんだ？」アイリス。お前、わたしの娘ならば絆色程度の気迫は見せてみる

「ひ……」

その言葉に、アイリスが動いた。

常闇を纏い、イリアさんは突撃する。

常闇がイリアさんに襲いかかった。

「 それがビーフした」

イリアさんは、微動だにせずそれを受けた。

常闇がイリアさんの身体に巻きつめ……霧散した。

「 いやな常闇もどきでわたしを傷つけられるとしても、もしそんなことを露ほじも考えていたなら……失望したぞ。少し甘やかしきずたか？」

イリアさんは剣を投擲する。

剣はアイリスの胸を貫いて、そのまま遙か彼方の氷山まで吹き飛ばし、縫いつけた。

「 本当に縁を切るか……」されではな。情けないにもせびがある

イリアさんが溜息を吐く。

「戦いが目前に迫っているのだろう? 犯められ、侮られ、挑戦されたのだろう? ならばどうして牙を剥かん。今の貴様は、子猫が怯えから爪をむやみやたらに振るつているようなものだ……それを可愛いと言つてやるほど、私は優しくはないぞ」

と、縫いつけられた氷山」と、アイリスの身体を眩い光の柱が貫いた。

「本当に……やはり子には厳しくすべきだ。あいつの教育方針は甘すぎる」

呆れたように肩をすくめるイリアさん。

その背後から、私は大鎌で切りかかった。

「無駄だ」

大鎌の刃を、イリアさんが掴んだ。

そのまま、握りつぶす。

……思わず、笑ってしまった。

「防いだ……」

「……！」

イリアさんが目を見開く。

「どうやら、自分が大鎌を防いだ、という直覚がなかつたらしい。  
きつと身体にしみついた経験が、自然と防御させたのだろう。」

そう。

防御させた。

これまではそれすらなく、ただ攻撃する度に触れては碎かれるこ  
とを繰り返していただけなのに。

手で受けとめたのだ。

それはつまり……イリアさんが、僅かながらにも私の大鎌を危険  
だと判断したということ。

私のこれは……強くなっている！

碎かれても、碎かれても、いい。

なら次はもつと硬く、鋭くするだけだから。

だから届いた。

「もつと、もつと……！」

さらに大鎌をイリアさんに振るう。

千の刃をイリアさんは拳で碎く。

万の刃をイリアさんは生み出した剣で碎く。

億の刃をイリアさんは剣で相殺する。

「……なんだ、お前は」

イリアさんの頬には、一筋の汗が伝っていた。

「まともな《顯現》もしていないくせに……なぜいじまでじめる…

…」

得体のしれなものを見る目。

……それでいい。

誰かの定規で測れるような私じゃがない。

でも、まだ足りない。

もつと上まで。

「もつと……もつと」

大鎌が鼓動する。

肌を、生温いなにかが覆う。

「――！」

イリアさんが息を飲んだ。

「まざいな……ふむ。まあ及第点といつ」とぞ、一度眠れ!」

イリアさんが、初めて動いた。

これまで一步たりともその場から動かなかつたイリアさんが。

そして 黒い剣が私の視界を覆う。

それは、数え切れぬほどの剣尖。

その真中に、剣を構えたイリアさんがいた。

「 」

頭の後ろで、硝子の碎けるような音がした。

次の瞬間私は、地面に倒れ伏していた。

意識のスイッチが、突然切られたようだつた。

気絶するのだと、はつきりと分かつた。

でも、それに逆らう。

まだだ。

まだ、私は……！

「無理をするな。『顯現』じゃ出来ずとも、お前は十分な力を見せた。それ以上は、今はいい」

言ひイリアさんの背後で、巨大な黒い柱が立つた。

「む……あちらもか」

イリアさんが振り返る。

気絶する直前、私はイリアさんの視線をたどつた。

そこには。

巨大な黒い獣が、いた。

†

「やれやれ」

足元に倒れているアイリスを見て、苦笑する。

「軽い挑発と重圧で我を失うとは……まだまだ未熟だ」

眩きながら、私は自分の左肩を見た。

そこから先は、消滅していた。

「私など恐れるな……お前は、私を越える力を秘めてこるのでから」

笑んで、私は左腕を再生させた。

そのまま《顯現》を解いて、しゃがみこんでアイリスの頬を撫でた。

「未熟ではあるが……まあ、これだけのものを見せたのだから、一応、合格といつことにしておこしてやるか」

……なんだかんだ言つて、やはり私も甘い、か。

しかし……ほんとうにこんでもない。

「まともな《顯現》すらせず、私の《顯現》を越えるか」

緋色も、アイリスも。

「この子らは……一体どこまで行くのだらう。

「……ヒリスト。やせつこの子らは、特別だ……いや

違う、か。

特別などと聞こえのいいものではない。

これは……。

「隔絶」とでも言つのか

才能なのか。

環境なのか。

それとも、他なのにかしらの要因があるのか。

「隔絶は、きっと、多くのものに影響を与える。

「……だからこの特別クラス、か

我が子の力を、頼もしいとは思つ。

だが、力には、必ず重いモノが付きまとつ。

それを背負えるものか。

……くじけるなよ。

その為になら、私はどれほどこの子に嫌われても構わない。

強くなれ。

自分の力に押し潰されない強さを、手に入れてくれ。

気付いたのはつ！

気付いたら朝だつた。

な、なにを言つてゐるかわからねえだろうが、私にもわからねえ。

……ぶつちやけ氣絶してただけなんだけどねつ！

てへつ。

とりあえず、私は白い天井を見上げていた。

保健室かどこかだねつ。

「知らない天」

「緋色、起きたか」

「……」

テンプレの台詞くらゝい言わせて下さいお願いします。

「知らない天じよ」  
「身体のほうは大丈夫か？」  
「……」

狙つてんのかくのやうに。

……仕方ない。

諦めて身体を起します。

やはうこには保健室のようだ。いかにも、って感じ。

そして私が寝ていた隣のベッドには、アイリスがいた。

「……一つ聞いていい?」

「なんだ?」

「えつと……あれ、私死んでないの?」

注。心の底からの疑問です。

そりやねー?

もつね、脳裏に焼き付いてますよー。

ほんとどうして「なにが、あったの?」みたいな記憶が飛んでる  
っていう流れじゃないんだろー。

やうやあれだけ散々こせられたひたすらかわいがれませんと  
モー。

後半、半死半生であやふやだけど、やれでもやれたやれたの  
は覚えてる。

イリアさんマジ鬼畜。

「……生きているようだ」

自分の身体を確認しながら、アイリスが言つ。

その表情は、無表情ながら、ひどく安堵しているようにも見えた。

「なに物騒な」と言つてるの?」

ふと、気付けば私とアイリスの間に人影が立つていた。

……だから、瞬間移動しなきやならない規則でもあるの?

「ツクハ……」

その人は他でもない、ツクハだった。

「おはよう、緋色。よく眠つてたね。アイリスも」

ツクハが微笑む。

おおう、今日も破壊力抜群な笑顔ですね。

「緋色。お前、ツクハさんを呼び捨てとはなかなか勇氣があるな」

呆れたようにアイリスが私を見た。

「私が許可したんだよ。臘原で」

「公然と臘原って言つちやつた!」

それでいいの!?

「はあ……そうですか」

どこか諦めたようにアイリスが肩を落とす。

「どうしてツクハがここに?」

「私、保健医もかねてるから」

「へ?」

つまり、理事長兼保健医?

「案外、理事長って暇だからね」

軽くツクハが言つ。

「……ちなみに、ツクハさんが理事長だと知っているのは教員と特別クラスの生徒くらいだ。あとは、全員ツクハさんはただの保健医だと勘違いしている」

「うしょよ」

いや、うしょよ、って自分のことでしょう？

「正体不明の理事長ってことで、この学園の七不思議のひとつにもなってるんだよ」

ツクハが胸を張る。

……一つ言えることは、七不思議の残りの六つは知らない今までいい。

知りたくない。

知つたら絶対面倒になるから。

「というわけで、今まで一人の様子を見てたつてわけ」

ツクハがウインクをする。

様になりすぎててもう、なんていうかね！

「お世話をおかげしました

アイリスが丁寧にしている！

……でもきっとツクハに逆らうのが怖いだけなんだろなあ、とかなんとなく察してみたり。

だつて考えてもみないな。

私はまつたくそういうふうは見てないけれど、ツクハはこの学園の理事長で、そうなると当然……この学園でも、かなりの実力者、なんだよね。きっと。

つていうか、なんていうかさ。

最初は少しも感じなかつたんだけど、最近になつてツクハから底の知れない力を感じるし。

私も成長してることなのだろな。

「ありがとね、ツクハ」

「うん。それで、二人にイリアから伝言

「」

身体が強張った私とアイリスは悪くない。

当然の反応だ。

「まづ緋色」

聞きたくないテス。

「仮合格。そのうちまた来る」

聞きたくなかったDEATH。

「で、アイリス」

「……」

「一応家族の縁は繋いでおいてやるわ。わざと私の足元ぐらいで  
は躊躇ついてこい、だってさ」

「……」

アイリスが少し眉を歪めて、情けない表情になる。

……イリアさんってかなり厳しい親だよなあ。

うーん。

母親であれだもん。

父親の顔も見てみたいかも。

ああいう人と結婚するくらいだし……きっと。

ぶるぶるぶる！

考えるのは止めよつ。

「……母様は、相も変わらずお厳しい」

ぼそりと、アイリスがこぼした。

「それとアイリス」

「さあ姉さん。昨日は大変だったみたいですが、昨日は昨日。今日は今日。昨日言った通り、訓練しましようねー」

突如現れたエレナが、アイリスの襟首を掴んだ。

「ちよつ、エレナ！？」

「はーい、行きましょうね」

そしてエレナとアイリスの姿が消えた。

「エレナが起き次第特訓を　つて、もう遅かったか

大分ね。

まあ伝えられていたとしてもアイリスは逃げられなかつたろ? けれど。

なーむー。

ひひそり手を合わせておく。

そういうえば、エレナもイリアさん……あ、でも一夫多妻とかの可能性もあるのか。

どうなんだろ。

……でも、顔立ちとか結構違うし、親は違うのかもなあ。

「それじゃ緋色。起きたならベッドを空けてくれるかな。流石に元気な人間をいつまでも保健室にいさせんわけにはいかないんだ」

「あ、うん。了解」

セリヤセリヤ。

私はベッドから降りて、衣服を軽く直した。

とりあえず、家帰つて、お風呂入るひつかな。

ヒログソズ満載の風呂なんだぜ。

ぐへぐ。

まじ変態緋色ちぢやんなんだぜい！

「それじゃ、またねツクハ！」

「うん、またね」

ツクハに別れを告げて、私は保健室を出た。

「あ、緋色。ちよつと訓練付き合ひなことよ」

そして廊下にいたスイに捕まりました。

「……あの」

「ん？」

「……せめて、風呂に、入らせて貰えこ

どうせ逃げられないんでしょ?  
分かってますよ。へん!

## 温泉はつ！

というわけでスイの特訓に付き合ひつ前に風呂に入ろうと、私は湯めぐり部を訪れていた。

ずっと来たかったんだよね！

ちなみにツクハにはちゃんと湯めぐり部の部屋を使つてこいつで言つ許可を取つた。

スイはなんかちょっと用事があるとか言つてどこかいったから、たつぱりゆつくつとつづくつお湯につかることにじよ。

「お邪魔しまーす！ つて言つても誰もいな

湯めぐり部の部屋のドアを開けたその先は、なんていうか……銭湯の脱衣所だった。

マジ、そのままま。

で、そこに……先客がいました。

「……」  
「……」  
「…………」

いたのは、なんと小夜でした。

たりりりーん。

小夜の姿は、俗に言つて一糸も纏わぬ、に限りなく近かつた。

今からお風呂だったのか、小夜は身につける最後の一枚、下着を膝下まで下ろしていた。

「む。

歯の衆、よろじいな?

まあ仲良く声を合わせて……！

「眼福である。」

「ノックくらいしなさい。」

「げふつ」

なにかが私の顔面を思いきり強打した。

高密度に圧縮された魔力だと気付いたのは、私の身体が後ろに吹き飛んで廊下の壁にめりこんだといふでだった。

部屋のドアがひとりでにしまる。

「……痛いっす」

+

「ティーク、ツウー！」

ばばん！

ドアを勢いよく開く。

ノック？

そんな無粋な真似はしねえよー！

「……」

「えー」

「なんですかその声は」

小夜が半眼で私を睨む。

小夜は身体にタオルを巻いていた。

「えー」

なにそれズルい。

「ブーブー！」

腕を振り上げ、唇とどがりせん。

「我々に裸体鑑賞の権利つぼあーー？」

首が千切れるほどの威力で顔面を強打された。

+

「テイーク、スリィイイイイイブッバッ」

+

「ちょっと待ったなんで今吹き飛ばしたのーー？」

まだテイクスリーとしかいってなかつたのに！

「いえ、なんとなくです  
「なんとなくとなーー？」

緋色のやんばりつくりだよー。

「……まったく、あなたも入るのですか？」

「うん。ツクハには許可貰つたからねー！」

▽サインを突き出す。

「……」

小夜が溜息をついて、無言のまま浴場への扉を開ける。

「ちょっと待つてよー。」

一人でいく気か！

いく気か！

いく気かー？

ええいやうせむせませんですよー。

「あらまあまあまあ。」

我が血統が最終にして究極！

一子相伝！

空前絶後にして、色即是空！

もはやこれは常識の範疇になし！

意味など通じなくてよN)

秘奧義一

ぼーん、という効果音と共に、私の来ていた服が脱げて辺りに放られる。

すっぽんぽんの私は、小夜に飛びかかつた！

グシヤ！

見せられないよつ！

浴場は、やつぱり凄かつた。

室内温泉はまあ、普通つちや普通。

電気風呂とか身体の老廃物を食べてくれる魚が泳いでる風呂とか妙な粘り氣を持った風呂とかあつたけどさ。

凄いのは、露天風呂のほう。

室内温泉に二桁近くのドアが備えられていて、それが全部別々のシチュエーションの露天に繋がっているようだつた。

つていうか溶岩風呂とかそれ多分浸かるのはお湯じやありませんよね？

硫酸風呂も以下同文。

「まつたく……貴方と書つ人は」

雪の露天風呂に肩まで浸かつた小夜の顔は、ほんのり赤くなつていて色っぽい。

「……また不埒なことを考へていいのですか？」

『やうりと睨まれた。

「まさか」

口笛などを吹いてみたり。

「……はあ」

びつやひめんで信用されていない様子。

まつたくじうじの私を信用できないのだひつね?

客観的に見れば、私を信用すべきなのは明らかなの。

まず脱衣所での出来事でしょー? ?

その後浴場に入つて身体を洗つてゐる時に隙を狙つて小夜に手を伸ばすこと三十回程度。うち実際にタッチできたのは四回。ちなみに触つたのがどこかは、ヒ・ミ・ツ。

で、粘り気のあるお風呂に死ぬ氣で引きずり込むこと一回。

電気風呂で痺れたふりして胸の中に飛び込む一回。

床に滑つたふりして抱きつける十回。

見せられなによー 状態になる」とおもや二行。

ほり信用できるでしょー

流石、緋色ぢゃん。安心の性能だね！

「そんなことで、試合は大丈夫なのですか？」

「……」

いきなり真面目なことを言われて、硬直する。

……。

あー、雪が綺麗だな。

一面銀世界にほつと露天風呂がある。

いいわあ。

うふふふ。

「現実逃避ですか」「なんのことかしら？」「期待できやつにありませんね」「うつ」

だ、だつてしょうがないじゃん！

我まだここに来て、実際の時間はそれほど立つてないんだよ！

精神的な時間で言えばめっちゃ長いんだけどね！

「……実際さあ、どうなの？」

ふと、気になつたことを尋ねる。

「なにがですか？」

「試合。特別クラス、勝てるの？」

「……」

小夜が僅かに考え込む。

「……正直、私にも分かりません」

「へ？」

「おそらくは、勝てる、と言つたことないのですがね」

言つたいといふ、つてことは……確定ではない、と。

「私、貴方、茉莉にナユタ、アイリス、エレナ、スイ。試合は全部で七試合。うち、絶対にこちらが勝つと断言できるのは……茉莉とナユタくらいでしょ?」

「え……小夜とエレナは?」

「人もちゃんと《顯現》が使えるって話じゃん。

「……まあ、負けるつもりはありませんよ。私も、エレナも。けれど、欠片も不安要素がない、と言えば嘘になります」

小夜が手を細める。

「それに向こう側も……」

「緋色!」

「ばん、と。

ドアが開いて、いきなり服を来たスイが乱入してきた。

「……え?」  
「行くわよ」

行くつてどりぐ、とか聞く間もなかつた。

いきなり、黒い槍が私に向かつて跳んできた。

奇声を上げながらなんとかそれを回避する。

卷之三

「……」で訓練していいっていう許可を湯めぐり部の部長から貰つて

来了わ」

ふふん、  
とスイが笑う。

卷之三

たの！？

「ええ。ここなら、私に有利だしね！」

すると、温泉のお湯が爆発するように空中に舞い上がった。

空中のお湯が、いくつもの水の杭になる。

ପ୍ରକାଶକ.

「ふつ！」

水の杭が、一斉に私に降り注ぐ。

「うわわわわわわわわ！」？

慌ててそれを避ける。

「ちよつ、たんまー。私は服も来てないしー！」

「やつやめぬ……」

言いつつ、服を作る。

この程度は朝飯前どころか寝ながらでも出来る。

……  
あ。

「」で一つ気付く。

小夜の姿が消えていた。

あの子つたら逃げましたか！？

私を助けてくれる気はゼロ！？

「わあ、始めるよ、緋色ー。」

田の前にはやる気満々のスイさん。

スイの周りには、こべりもの水の巻が出来ていた。

「……」

憩いの時間が……。

泣くぞー!?

「とつあえずスイの服を剥ぐ!」

話は全部それからだ!

揉むぞー!

つまむぞー!

舐めちやうぞー。

「ひ……」

すると、顔を青くして自分の身体を抱きしめたスイの身体から大量の黒いもの……常闇が溢れだし、私の事を包み込んだ。

ちよつ、おま……っ。

夢で見たのはつー

「ふう……」

スイとの訓練を終えた私は、自分の部屋に帰つて來た。

「張り切り過ぎだよ……」

訓練は熾烈を極めた。

「どうか、よく考えて欲しいんだ。」

私はそれなりに魔術とか《顯現》もどきを使えるよ?

でもね、それだけなんだつてば。

魔術なんかは、ぶっちゃけ私くらいのレベルならこの学園にはじるじろいいるんじゃないかと思う。

実際、スイも魔術を使っていたけれど、すぐかつた。

どうやつたら小指の先ほどの大きさの水の弾丸で星一つ破壊する程の威力が出せるんだろう。

だから魔術については、私に優位性はない。

となれば、《顯現》もどきだけれど……ぶつちやけ形が武器だから、それを扱う私のスペックが相手を上回つてないと、どうしようもない。

そりやあ某死神さんのよく伸び縮みする刀みたいに私も一瞬で数キロまで刃を伸ばしたりとか、次元を切り裂くことだって出来ぬ。

けれどもここまでだ。

それ以上のことは、私の《顯現》もどきじゃできない。

あくまで、もどき、なのだから。

実際、今日の訓練で私はスイにまともに攻撃をあてられた回数は、そつ多くない。

逆に喰らつた回数は大記録だ。

四桁はやられたね。間違いなく。

つまり、私がなにを言いたいかつていうと……。

「少しは加減しろ」

畳の上に倒れ込む。

「はあ……」

溜息を吐く。

「……ん」

あー、うー。

なんかちょっと眠い。

布団敷こうかな……。

寝る前にお風呂入らないと。スイとの訓練で汗かいりやつた。

ちなみに湯めぐり部の部室は壊滅状態になつた。

……むっ。

風呂に入る前に、ちょっと寝ちゃおうかな?

……う。

もうしよう。

+

殺す。

殺す。

殺す。

殺す殺す殺す殺す殺す口口す口口す口々スコロスコレスロロス  
ロスコロスコロスコロスコロス !

それだけを考えて、力を振るう。

手の中に巨大な矛を作りだし、それで貫く。

何度も、何度も、何度も、貫いた。

殺す。

殺せるまで、殺す。

いつまでだつて殺し続ける。

そうしなくちゃいけない。

思考なんて出来ない。

ただそれだけの為に身体は動いていた。

今のは、それだけを行う機械。

決められた動作を繰り返すだけ。

殺す。

殺す。

殺す。

と、腕が根元から千切れた。

さらに咽喉が潰される。

眼球が弾け飛ぶ。

でも止めない。

腕が再生する。

今度は長剣を作り出して、切り刻む。

刻む。

刻まれる。

殺す。

殺される。

頭がおかしくなりそうだ。

でもそんなことにはならない。

違う。

きっともう、おかしくなってしまったんだ。

そうだ。

だって、こんな普通耐えられないから。

私はおかしくなっている。

ああ、そうだ。

思考を放棄した私が壊れていらないわけがない。

臆病者の私は、私を壊した。

そして殺す。

殺すのだ。

殺さなくてはならない。

? - ? - の為に。

? - ? - の為に、私は殺そつ。

我が子を。

我が子に等しき存在を。

塵芥に変えよう。

私は力を振るひ。

ただそれだけのために。

……あれ？

どうして私はこんなことをしているんだっけ？

誰の為？

あれ？

私は……私は……。

私は？

誰？

「……なに、まさつと、してゐの？」

掠れた声が聞こえた。

どん、と。

頭になにかが突き刺さる。

私の視界には。

私の顔面に手を突き刺した。

輪郭が浮かんでいた。

それは、見覚えがあつて。

間違いなく……。

? - ? - だつた。

私の手は長剣をナコタの心臓に突き立てる。

+

「.....つー」

飛び起きる。

「ひ、エリサ.....」

遅れて、エリサが血室であることに気付く。

「エリサ 私 寝起きって.....」

「……ひるが、今のせ……夢、か。

「……なんだ」

安堵する。

悪夢。

悪夢だ。

やうだよ。

私があんなこと、するわけないし。

ひどい夢。

汗がすじ。.

「風呂、はこり……」

「わうね。それがいい

「つー?」

声が聞こえて、私は弾かれるよひらひらを見た。

窓だった。

窓の外、ガラスの向ひ側、夜の闇の中に、銀色の髪が踊った。

「あ……」

あの髪。

後ろ姿だけれど、ポニー・テールにまとめられたその銀髪を。

そして背中から生えた六枚の翼を、見間違えるわけがない。

「あなたは……」

「元気にやつてるみたいね」

「……また、いきなり現れますね」

「驚かせてしまったかしら？」

「……それなりに」

正直ガチ驚いたけどなー

「そんなに驚かせるとは思わなかつた……」「めんなさいね」

微笑しながら彼女が言つ。

ええいやっぱり考え方読んでやがりますか。

「ふふひ……」

「……もつなにこも言こませんよ！」

「」の人にほきつとなに言ひても無駄だ。

「賢いわね」

「せりやどひも」

褒められても全然嬉しくないのはなんでだろひ。

「……悪い夢を見たのね」

「そこまで分かるんですか？」

「ええ。まあ」

まあこの人なら分かつて不思議じやないか。

「……本当は、貴方に会つもりはなかつたのだけれどね」

「え？」

「貴方は私の性質に近い。だから、もしかしたら私に影響されてしまうかもしれない。そう思つたからなんだけれど……どうやら手遅れだつたみたい。最初の時点で既に、といつことかしらね。それほどに貴方は、私に似ているといつ」と

「あの、なに言つてるんですか？」

「……夢については、今は考える必要はないわ」

「すみません会話についていけないんですけれど?」

「分からなくてもいいわ。ただ、言葉だけは覚えておいて」

……ひひむ。

話が通じてるのか?

「緋色……貴方には、強くなつて欲しい」

「はい?」

またいきなり話が飛躍しておりませぬか?

「強く、強く……私すら越えていつて欲しい……」

すると、彼女の翼が大きく広がった。

白い羽根が舞う。

「少しズルいけれど、貴方に、貴方のヒントをあげる

「私に、私のヒント?」

なんのことひちゃ。

「貴方いらしゃ。それで何でしょ、」

ほわつづ?

疑問を挟むより卑く。

あの人の姿は消えていた。

「……ぼーゼン」

なんだつたんだろ、一体。

意味の分からぬことをかなり言い残していきましたが……。

むう?

むー。

むむむ。

……ま、いっか。

風呂はいり一つと。

## 初日はつ -

ところが、ついでやつてしまつました、おひるねで「あれこれあー！」

……つべー。

ハッピーなイベントじゃないからそんなテンションあがんねえや。わつわと終わらなかなあ、こんなこと。

とか思いつつ、私は指定された会場にやつてきた。

指定された、って言つても事前の通達だと「空に来なさい」みたしたことしか言われてないんだけど。

空つてなんぞ、と私は最初思つたものだけれどね。

今日になつて、その意味が分かつたよ。

朝起きたら、あら不思議つ

空中に「ロジセオみたいな施設が飛んでました。

あひつ。

あひつ、じゃねええええええええ！

え、いつの間にそんなの用意したの？

この世界の非常識ぶりには慣れたかと思つたけど、そんなの自意識過剰でした。

ちなみに。

コロッセオのサイズ、余裕で半径十キロくらいあります。けど。

馬鹿かつ！

サイズ間違てるよね、これ！

一桁くらー！

……この世界で起きるひとことか二三つむんと、もう不毛なことなのかもしれない。

そう悟ったよ。

で、現在会場内、控室に私来ております。

控室はめっちゃ現代風で、壁には大きいモニターがついてたりする。

既に特別クラスの皆は先に來てた。

「それで、今日つて誰の試合なの？ 確か、一日一試合でしょ？」

茉莉に尋ねる。

「……組み合わせは、向こうで決める」  
「不平等ですね」

小夜が溜息を吐いた。

確かにそれはちょっと不平等がすぎるのではないだろ？  
それじゃあ向こうの有利に試合を組むことだって出来るわけだし。

「ま、いいんじゃない？ ハンナだとでも思おうよ」

『氣楽にナコタが言ひ。

「まあ、一応こちらは挑戦を受けた側……だからかと聞けば、上位者です。上位者が下位者の要求を聞き入れるくらいの度量を見せなくては興醒めですからね」

「下位者……うーん、ヒレナは今日も腹黒である。

「なにか？」

「こりとエレナが私に微笑む。

「ナンデモアリマセン？」「

「そうですか」

怖いっす。

「あ」

スイが声をあげる。

部屋のモニターに電源が入ったのだ。

そしてモニターに表示されたのは、一いつの名前。

「……これが今日の試合、といつわけか」

アイリスがにやりと笑う。

なるほどねえ。

今日は……。

観客席の一一番前、特別席で今日の試合に参加しない特別クラス全員が集まっていた。

ちょうど向かい側……つても一二十キロ先の席にはゼファー＝ロー・ゼンベルクを中心に一般クラスからの参加者らしく人達が座っている。

というか、ですねえ。

観客多つー？

え、こんだけ大きなコロッセオの客席全部埋まってるんだけど！

どうからこんだけの人気が沸いたんだー？

「いろんな世界から集まつたみたいですね。これまでの学園の卒業生や、学園世界と交流のある世界の人達。それに、天界魔界の人もいるようですし……注目されていますね」

「ほほう」

ソウが説明してくれた。

最近影の薄いソウが説明してくれた。

言ひなおしたことに他意はない。

「うん、と。

後頭部をなにかで殴られた。

見れば、ソウがどこからか取り出した黒い剣の腹の部分で私の後頭部を殴つてた。

「……危ないよ？」

「お気にせず」

「いやしおつよー」

今のだつて普通の人間だつたら頭蓋骨陥没レベルだつたしね！

なに、ちょっと拗ねちゃつてんの？

「影が薄くても私はちゃんとソウのことを愛してゐるよー 大丈夫ー」

「そうですか」

あつさり流された。

シヨックである。

「まじ、緋色。じゃれてないで、始まるよ

ナコタの声に、私はクロッセオの中心に視線を向けた。

そこには、一人の姿があった。

+

「……どうして、私が最初？」

茉莉が、目の前の女子生徒に尋ねた。

それは私も思ったことだ。

よりにもよつて担任である茉莉を最初に相手に指名していくなんて、なんのつもりなのだろう？

すると相手の女子生徒に口元に笑みが浮かんだ。

「担任のあなたを倒せば、向こうの士気はがた落ちになる。そうすれば、特別クラスと言えど恐れるまでありませんからね。それに、担任のあなたの力を見れば、自然と特別クラスの実力も把握できるでしょう」

栗色の髪を伸ばしたその子は、堂々とした態度で告げる。

おお、なるほど。そういう意図があつたわけですか。

「申し遅れました。私は攻撃魔術クラス所属、葵＝レンファートです」

特別クラス担任、茉莉

「では茉莉先生、手合わせ、よろしくお願ひしますね？」

- 1 -

その瞬間。

試合開始を告げるアラームが鳴り響いた。

直後コロッセオの舞台が半壊した。

うひつ、おま、待つ……。

な、なにを言つてゐるか分からねえだらうが、私にもぶつちやけ  
よく分からねえ。

なんか試合開始と同時に茉莉と葵ちゃんの身体から膨大な魔力が放出されて、それが衝突して超大規模な爆発を起こしたっぽい。

つか空間が割れて次元の狭間くせえのが見えてるんだけど。

そしてそれだけの爆発の余波を防ぎ観客席に張られた障壁パネエ。

試合の様子が土煙で様子が見えない、とかじやなくて次元の崩壊で様子が見えない、って新しくね？

なんか「」……形容し難い光景だ。

なんじや「」や。

次元の狭間がゆつくつと塞がつて行く。

わうして、じばりくじてよひやく試合の様子が見えるよひになつた。

茉莉と葵ちゃんは、光の速度で「ロロシセオの中を駆け回っていた。すみません一秒钟に魔術を万発撃つのやめてもうつていいっすか？

ほりまた次元割れたよ！？

ちょつ、見えない、見えない！

これだけの観客集めたんだからちゃんとパフォーマンスしようよー。

「……どうやら、普通の能力では私の方が僅かに分が悪じようですね」

葵ちゃんが一旦茉莉から距離をとる。

「であれば……」

葵ちゃんの纏ひ空気が変わる。

お……？

「『顯現』…」

ぶはつ。

『顯現』なされたつ！？

いやまあ一般生徒にも出来る人がいるつてのは知つてたけど！

でもいきなりつすか？

実際試合が始まつて三分経つてないんですよ？

せめてカツフーメン出来るまどりつよー

「……」

茉莉は呑氣に葵ちゃんの『顯現』を眺めていた。

……余裕つすね。

「余裕ですね」

『《顯現》した葵ちゃんが鼻をならす。

ちなみに葵ちゃんは白い羽衣を幾重にも纏い巨大な三叉を構えていた。

超綺麗なんですけど。

「……」

茉莉が小さな吐息をこぼす。

「《顯現》をしないでいいのですか？」まあ、待ちませんけれどねー。」

葵ちゃんが茉莉にむかって飛び出す。

飛び出す、といつ行為をとつたときにはすでに、茉莉の眼前に迫っていた。

移動、という過程がまるで消し飛ばされていた。

……これが《顯現》か。

「は　つー」

葵ちやんが三叉を茉莉に突き刺した。

三叉はあつせつと、茉莉の胸の真ん中に突き刺される。

「……」

それでも茉莉は、表情一つ変えなかつた。

「な……」

さすがの葵ちやんも、茉莉のその様子に去んだよつだつた。

「何故……なんの抵抗も……」

「……」

「じりこり」とですか！？

葵ちやんが叫んだ、その時。

茉莉の口元に、薄い笑みが浮かぶ。

「 」

「《顯現》で、それを考えてはいけない」

次の瞬間。

葵ちゃんの三叉が砕け散り、貫かれた箸の茉莉の胸にはなんの傷も残らなかつた。

『顯現』は想いを、そのまま現実に出来る。

ならば、それは自身に利のある想いばかりではなく……不安や恐れといった、マイナスな思いも現実にしてしまつ。

葵ちゃんは、今、きつといつと思つたのだ。

自分の攻撃は、効いていないのでは？

じ。

「心が弱い、あなたの負け」

「そんな、」と……！」

「《顯現》」

茉莉が《顯現》する。

美麗、とでも言えばいいのか。

色は、漆黒と純白。

薄手の白い服の上に袖のない黒い衣をまとい、腰からは淡い光を放つ布が伸び、舞うように揺れる。

茉莉が、腕をゆっくりと持ちあげる。

すると茉莉の素肌に、赤い光が幾何学模様を描くように走った。

紅蓮の光が茉莉の掌から放たれ、葵ちゃんに襲いかかった。

そうして。

決着がついた。

茉莉の《顯現》が解かる。

地面上に、氣絶した葵ちゃんが横たわっていた。

その声はっ！

「……」

ぽかーん、つて感じ。

私だけじゃなく、観客皆さんも。

ていうか、向かい側のゼファー君達もぽかんとしてる。

うん。

だよね。

そうなるよね。

え……今なにが起きたの？

いや。

なにが起きたのかは分かる。

ただ、それがいつ起きたのかが分からなかつた。

茉莉はゆっくりと手を持ちあげた。

それで、掌から赤い光が放たれた。

……で、それはいつのこと?

あれ?

えつと……。

百年前の出来事だよ、と言われても下手したら納得しかねない気分だった。

あるいは、未来の出来事だよ、とも。

……ええ?

「つまり、認識出来ない攻撃。時間軸から外れた場所で、茉莉は行動したんだよ」

ナユタがそんな説明をしてくれた。

けど意味わかんないっすわ。

「……そつか。まあ、そのうち分かるようになるよ  
「そうかなあ」

「茉莉、お疲れ様！」

会場を出たところで私は茉莉と合流した。

ちなみにアイリスとスイはエレナに「まで《顯現》出来てないんですから今日も訓練です」と引つ張られて行つて、ナユタは「やっぱ余裕かな」とソウを連れて買い物に行つた。

勝利の喜びを分かち合つくらいはしていいうよ。……。

「ん」

私の言葉に、茉莉が親指を立てる。

「担任の威厳は、守つた」

「そだね」

我らが担任様がとんでもないことは、よく分かりました。

それはもう、すうじ。

「……あと、これで怒られない

茉莉が感情は薄いながらも、安心した様子を見せる。

「ん、怒られないって、ツクハとかに？」

「……」

ふるふると茉莉が首を横に振る。ハ。

「オリーブに  
「オリーブ？」

ぱつと油の方を想像してしまった。

「名前、だよね？　誰？」  
「私の……妹？」

なんで疑問形。

「つていうか茉莉、妹いたの？」

「……あ

「ん？」

「……これ、秘密事だった」

「あつせりバソシヒヌカビー…？」

「母様達に怒られる……」

茉莉が肩を落とす。

そんな仕草もかわいいなあ。

うふふ。

しかし、何故妹がいることを秘密にしなくちゃならないのだから。  
なに。

なにかいつ、家柄が特殊で妹の存在は隠匿されてたりするの？

妹は地下深く古の封印の糧として捧げられていたり？

やついつ熱い展開が……！

「まあ……いい

……ないか！

そんな展開があれば茉莉がこんなのんびりしてゐるわけないですよ  
ね！

「秘密事らしきから深くは聞かないけど……ちなみに、どんな妹さん？」

「ん……優しくて、怖い」

「普段は優しいけど、怒ると怖いってこと?」

「普段は怖いけど、数か月に一回くらい優しい」

「それほど怖いんですけどー? 優しさが風邪引く感じの頻度だね!?」

それで、茉莉の妹でしょ?

……ふつむ。

どんな人amaruで想像が出来ない!

いつか会えるかな?

「とりあえず、私はこのことは効かなかつたことにするよ。それで茉莉もお母さんに怒られないでしょ?」

「……母様達に隠し」とをしたら、鶯り殺されぬ」

鶯り……!?

つ、すまん!

これは流石に口口い妄想は出来ないぜー!

鶯り、までは良かつたんだが、その後に殺すつてつこちやうと流

石にねえ。

しかもなんか、茉莉の表情が真剣だし。

「つて、どんなお母さんーー？」

「……戦うの、大好き」

「ほお」

「死闘、大好き」

「へえ」

「殲滅している時の顔が、すげく素敵」

「……よし」

なるほど納得。

「茉莉は素直に秘密をばらしかやつたことをバラしましょー！ それで解決ダネっ！」

「……七割殺し、かな」

ぱつりと怖いことをおっしゃらないでください。

「……せめて六割に、ならないかな」

だから怖い」とを以下略。

「……」

茉莉がしゅんとす。

なんでだらい。

別に私は悪いとしてなこのに、凄く後ろ暗い気持ちになる。

「え、えりと……」

な、なにか名案……私の山吹色の頭脳よ、名案をひらめけ！

ぴかーん！

「つ、そうだ、茉莉ー。」

「…………？」

「そういう時はプレゼントだよー。」

「フレ、ゼント……」

「そうー。フレゼントを渡して、気分をよくさせてからバラすのー。」

「そうすれば、きっと……ー。」

「半殺しきりこじ、なる？」

「……それはどうかナア、ウフフ。」

「…………」

茉莉は半殺しきられたかと思えるのか。

……どんなだけ鬼なお母様なのでしょ。」

「……プレゼント、してみる」

「うそ、そうしなよ。なにか送るかはすぐ決まる?」

「……どこのかで、強い魔物でも生け捕りにしてくる」

「え」

「世界破壊くじら出来なきや、駄目……」

「え」

「……行つてへむ」

「え、あ、はい」

そして茉莉は消えた。

「……」

母親へのプレゼントにて、「世界破壊が出来る魔物の生け捕り?

」のあとにをしようつかなー!――

……アーヒ。

+

『バレてしまつたわね』

「……」めん

『いいわ。他の誰かなら面倒だけれど、あの子なら』

「……いい、の？」

『ええ。あの子なら、面倒なことにはならないでしょ？』

「そう、かな……？」

『それに面白いし。そこいらの凡百の輩よりかは、ずっとマシよ』

「……ん」

『直接会って話してみたいかも』

「……珍しい」

『ん？』

「オリーブがそこまで人に興味持つの……」

『まあ、私は貴方と共にいられるのならばそれで満足する性質だけ  
どね……そんな私にも興味を持たせるのだから、あの子は大したも  
のじゃない？』

「そう、なんだ」

『あら？ 少し不満そうね。私が他所見をして嫉妬しちゃった』

「そういうわけじゃ、ない」

『ふふっ。安心しなさい。例えどれほど他人に興味を持つても、私  
にとつて貴方はただ一人の姉……どちらかといえば、貴方のほうが  
妹っぽいけれどね。そんな貴方と私は、ちゃんと姉妹愛という絆で  
繋がっているは、決して千切れるとの無い絆でね』

「……うん」

『さて。母様の気に入りそうな獲物はどうしているかしらねえ』

「どーだろ……」

—試合はつ！

はいはーい、こちら現場の緋色です！

私は現在、事件現場の選手控室に来ております。

今の状況は、決闘一日目。

その組み合わせが発表されたと「うわでござります！」

では、繫迫の発表でござります。

第一試合！

あ！ 戦うのは……エレナだあああああああああああああああああああ

これは相手はズタボロ確定だつ！

ドロー、モンスターカードー、ドロー、モンスターカードー、ドロー、モンスターカードー、やめてもう相手のライフはゼロよーい、ぞもつとやれー、ドロオオオオオオ!

の流れで決まりダネ！

だつてエレナだし！

「……なにか失礼なことを考えていませんか」「あ、ちょ、エレナさん、痛いです、痛いです」

「まつ毛がつわり、とエレナに顔面を掴まれ、締めつけられる。

アイアンクローフてやつだね。

ちよつち耳の奥でグシャツ音が聞こえたところでエレナが解放してくれた。

「……まったく、貴方はいつも変なことを考えていましたね」

エレナに溜息をつかれた。

「エレナは私への遠慮がどんどんなくなるよね」「そうですか？」

きょとんとしないでよ。

あんた会つた当初は物腰の穏やかなお嬢様みたいだったよ。

こまじや私の中の敵にしちゃいけない人リストの上位者だわ。

「ほら、エレナ。そろそろ入場しないと」

ナコタが横からそいつ言ひ。

「そりですね。では、行つてきます。軽く狩つて来ましょ」

今、『勝つて』の発音おかしくなかつた？

ねえ、おかしくない？

+

エレナに相対するのは、武器武術クラス所属のクリストフ＝ゾーグス。銀髪ロングの一見すれば女の子にも見えなくはない少年である。

……まあ、男の娘と呼ぶほどではないが、間違いなくイケメンである。

なぜだろう、無性に彼が気に入らない。

「ふつ……」

クリストフ君が前髪を掻き上げる。

「本当は僕はこんな野蛮な戦いはしたくはないのだけれどね。親友であるゼファーに頼まれては、参加しないわけにはいかないだろう？だから僕はここにいる！」

なんだあいつ。

台詞を口にする度に変なポーズ取つてゐるんだけど。  
若干ジョジョつぺえ。

……もしかしてあの人が、ナルでシーの人？

「……はあ」

エレナは心底どうでもよさげにしてゐる。

「君が降参すれば、これ以上戦わなくていいのだけれどね！」

「……ですか。それで、まだ始まらないんですか？」

エレナさんクリストフ君の言葉を完全にスルー。

「ふつ、僕とて君のような美しい女性を傷つけたくない

そしてクリストフ君もエレナの発現をスルーだ！

つていうか、お前エレナのこと口説くな！

その役目は私んだあ あああああああああ！

「……わざと終わらせてしまいたいですねえ」

溜息をつきながら、エレナは試合開始の合図を心待ちにしているようだった。

と、その時。

試合開始のブザー音が、響き渡る。

そして、エレナとクリストフ君の身体が、光の粒子に変わり、輪郭を変える。

クリストフ君は、上半身裸、下半身は黒い腰布で隠れた姿をして  
いる。

上半身裸とか……。

さらに、その手には巨大な……なんて表現では言い表せないレベルの大剣が握られている。

長さは大体……一メートルくらい？

で、幅が四メートルくらいにある。

うん。あたつたら痛そつだ。

「それがあなたの《顯現》……なるほど、悪くないわね

エレナの静かな声が聞こえた。

その姿に、田を見張る。

ボロボロの、けれど美しい青に染まつた衣をエレナは纏ついていた。

といふどいろ千切れ、穴が開き……それに、その衣は、その  
衣を着たエレナはひびく神秘的だつた。

衣の腰のところから無数の帯が後ろに伸び、まるで水に浮かんでこるかのようにゆらゆら揺れている。

両腕にの帯が巻きつき、右手には水晶で出来たよつなかを携えて  
いる。

前に一度、少しだけエレナの《顯現》に触れたことはあつたけれど……実際に完全なものを作りたまつにして、ぞくりとした。

「君のその《顯現》は、美しいね」

だからナミィ、エレナを口説くなら私を通してからこしなさい。  
通れないけど。

「それはどうも」

エレナはまったくありがたそうでもない顔で礼を言ってから、弓を持ちあげた。

空間が歪む。

「まずは初手、様子見と行きましょう」

エレナは『』に矢をつがえない。引かない。

けれど……弓から矢は放たれた。

そんな矛盾。

けれど《顯現》の前に矛盾なんて単語はなんの意味もなさない。

放たれた矢は漆黒。

言ひなれば、黒い流星とでも言ひのか。

流星は光を突き破り、クリストフ君の身体に突き刺さる。

そう。

普通に突き刺さった。

クリストフ君の身体に刺さった流星は、黒い火花を散らしている。

「ふむ」

クリストフ君は表情一つ変えず、自分の身体に刺さった流星に手をかけ、引き抜いた。

引き抜かれた流星が霧散する。

「なるほど……」

口元を緩め、クリストフ君は笑う。

「これは、舐めてはかれないな！」

気付けば、クリストフ君は……何十人もいた。

へ？

何十人もいるクリストフ君が、揃つて大剣をエレナに向かつて振り下ろす。

いや、ちょっと待て、なんで増殖してんの？

「いくつもの時間軸から私を攻撃しているのですよ」

エレナが観客席にいる私のほうを見て、言つ。

おや、説明どうも。

でもいくつもの時間軸から、つて……うむ？

とりあえず、沢山攻撃してくることいいか！

「余裕ですね！」

クリストフ君の大剣が、エレナに叩きつけられる。

「ええ、もちろん」

大剣は、エレナの肌に小さな傷一つもつけられなかつた。

エレナの肌に触れた途端に、大剣が砕ける。

「余裕ですか？」

エレナの『』が、砕け散る。

クリストフ君の攻撃で砕けたわけではない。

正確には、碎いた、のだ。

細かいくつもの結晶が、空に舞い上がる。

結晶一つ一つが、黒く輝く。

「……これは」

クリストフ君が空を見上げ、呆然とする。

「美しい……」

まるで夢でも見ているかのような声色で、クリストフ君は呟いた。

確かに、美しかった。

青空に浮かぶ、黒い星々。

幻想的、と言つていいだらう。

「……これは、なるほど」

クリストフ君が肩をすくめる。

「思つてしましましたよ、こんな美しいものを、僕は傷つけられないと  
い、といふこと。  
「さうですか」

『顕現』はあらゆる気持ちを適応せん。

つまり、クリストフ君には絶対にエレナを傷つけることは出来ない、といふこと。

「思つてしましましたよ……こんな美しい光にならば、傷つけられてもいい」と

それは、敗北宣言。

「さうですか

黒い星々が、降り注いだ。

その流星群は、とにかく綺麗だった。

一つ一つが落ちる度に、巨大な黒い衝撃波を生み出し、衝撃波と衝撃波がぶつかって、いくつもの黒い力の飛沫を散らす。

その力の奔流に、クリストフ君は飲みこまれていった。

エレナの勝利の瞬間だった。

+

「おめでとー、エレナ！」

「ありがとうございます」

戻ってきたエレナに笑いかけると、笑い返してきてくれた。

ひやつほう綺麗な笑顔だね！

惚れちゃうぜ！

「よくやつたな」

「ま、当然と言えば当然の結果よね」

ちなみに、今回アイリスとスイもいます。

他の皆は例の如く帰っちゃったけどね！

「さて。これで一勝田……あと一勝で勝利は確定です。と同時に、確定したことがあります」

「なにが確定なの？」

Hレナに尋ねる。

「あひらは、全員《顕現》の使える生徒で固めて来ていろだらう、ということです」

「……」

まあ、一連続で《顕現》していくくらいだしねえ。

それに前情報でもうひとつそんな感じの予想は聞いてたし、今更驚きはしないけれど。

うわー、って気分。

だって《顕現》使える相手に、《顕現》使えこなせてない私が勝てるわけないし。

いや勝てるわけないし、って考えがダメなんだけれどさあ。

でもね？

現実的にね？

「というわけで……早く姉さんもスイも、さつさと《顯現》を使えるようになりますよ？」

につこり。

おつとアイリスとスイの顔が青くなりましたよ。

南無……。

「ああ、そうだ。よかつたら緋色も一緒に特訓しますか？　しますよね？　さあ行きましょう」

うわあい。

なんか飛び火してきたぞ。

「いや、私は個人でも大丈夫なんで……ほんと、大じょ

「はい」

エレナに襟首を掴まる。

「行きましょ、うね」

引くすられる。

ええい！

ちくしょつ、つなつたら……一

「どうやあー」

エレナの腰に抱きつく。

するする。

するする……。

「ど、動じないだとー！？」

「アイリスとスイも行きますよー」

エレナが姉妹二人に声をかける。

うわああああああああん、今日はこのまま地獄の特訓ルートか  
よう！

「……なあ、スイ  
「私も同じこと考えると思ひ」

スイと視線を合わせ、頷き合ひ。

「緋色……よくヒーレナに抱きつくなんて真似が出来るよな  
「普通なら消し飛ばされてもおかしくないんだけれどね」  
「しかもヒーレナも嫌がらないってこいつは……どうこいつ」とだ?  
「お気に入りなんじやないの?」  
「……ああ、なるほど。その気持ちは分からんでもないな」

「やりと笑う。

「ええ。分からぬともないわ。私達は姉妹だし、やつとやつこいつ  
とこも似てるのね」

スイも笑う。

「緋色みたいなやつは嫌いじゃない  
「その通り」

一緒にいて、面白いしな。

## 裏側はつ！

「悪いね、ゼファー。負けてしまったよ  
構わないさ。たかがまだ一敗だ。残り五戦中、四戦とればいい。  
それより、お疲れ様だつたな、」

控室に戻ってきたクリストフを労い、俺は椅子に深く腰をかけた。

確かに七戦中の最初の一戦を落としたのは痛い。

だが……問題ない、と言える根拠はあつた。

「調べたところによれば、あのクラスで他に《顯現》を使えるのは  
数名……多くても二名程度だそうだ」「  
「あれ、そうなのかい？」

クリストフが意外そうな顔をする。

「特別クラスと言つ位だから、てつきり全員《顯現》出来て当然だ  
と思つたんだけれど」  
「そうでもないのさ……特別クラスは、《顯現》が出来る出来ない  
ではなく、他の基準で選ばれているらしい。噂によると、理事長の  
顛履、などとも言われているが」  
「理事長……つて、今更だけど、それってどんな人なの」  
「さてな。知らないよ。理事長は一般の生徒の前には姿を見せない

からな「

肩を竦め、見たことの無い理事長の姿を想像してみる。

……顛願などを実際にしているのであれば、ろくでもない人物だ  
るつ。

「特別クラスは、不透明過ぎる」

「……」

「俺だって、ただ特別扱いが気に入らないから喧嘩を売ったわけで  
はない」

「分かつてるよ」

クリストフが微笑む。

「君はそんな安い男じゃない。それは、親友の僕が一番知っている  
さ」

「……そうだつたな」

相も変わらず、頼りになる男だ。

まあ、少しナルシストなところは気持ち悪いが……そこを抜けば、  
本当にクリストフはいい友人だ。

いや。

親友、か。

「一般生徒の中には、特別クラスを神聖化する者もいれば、奇異の対象として見たり、特に酷い者では妬み、忌避する者までいる。今まで大丈夫だったが、この状況がいつまでもバランスを保つてられるとは思えん」

俗に言う、派閥というやつだ。

特別クラスを擁護する側。

特別クラスを敵視する側。

問題は、別に特別クラスと一般生徒の間の格差ではない。

特別クラスというものが他に及ぼす影響だ。

例えその影響が表面化せずとも、いざれそれを利用しようとする人間は出てくるだろう。

人の関係にほこりびがあれば、それをつづきたくなる。そういう人間は、確実にいるのだ。

余計な心配かもしれないが、あるいは、この学園を崩壊させようと画策する者がいたとして、当然そういう連中が狙うのはそういうところだろう。

だから、手遅れになる前に手を打たなくてはならないのだ。

自覚の無い特別クラスの連中では話にならない。

なにも分かっていない一般生徒でも駄目だ。

学園側も、なにを考えているのか……状況を理解できないほど無能ばかりではないはずだが、少なくともこれまでアクションらしいアクションはなかった。

なにか事情があるのだろうと察するのは難しくない。

いくら蠶貝と行つても、学園の運営一いつ変えひみつなどだ。

理事長や地位の高い者の独断で特別クラスなんでもを設立できるわけがない。

だから特別クラスに下手に触れることが出来ないのである。

だったら、俺がやるしかないじゃないか。

特別クラスの連中には、自分達を妬んできた浅慮の輩とでも見られるだろうか？

一般生徒の連中には、祭りの神輿のような扱いを受けているだろう。

それでもいい。

俺は、俺の出来ることをする。

俺を育ててくれた」の学園のために。

例えそれが、学園の方針に反することにならうとも。

「……あまり、一人で背負こすぎないよつこね」

クリストフがそう言つ。

「ああ。分かっている」

「分かつてゐる、ねえ……本当かなあ」

「もちろんだとも」

+

「ねえ、あなたはどう思ひつ?」

既に客がほとんどいなくなつた観客席に、私達は座つていた。

私の隣にいるのは、和服を纏つた表情の薄い少女だ。

「……どう、とは?」

「理事の一人としては、あの連中の行動はどう映つてるの、つてこ

と  
「……」

彼女は、ほんやつと空を見つめる。

「……ウイヌスは、どう思つ？」

「聞こてるのはこいつちなんだけれどね」

苦笑する。

相変わらず、マイペースね。

「ま、私としては、特別クラスが負けて解散するなんて事態にはならない方がいいと思ってるけど」

「……我は、そうは思わない」

「へえ？」

意外ね。

「それはまた、どうして？」

「特別クラスは、一時的な籠に過ぎない。いずれ、勝手に中から壊して外に出ていくのは分かっているのだ。それが早くなるだけのことだらう？」

「あなた基準で言わないでよ」

まつたぐ、あつやつぱづけれど、じじはせんな簡単じやないでし  
みつ。アリ。

「あなたみたいな超越者ならやつなのかもしね。卵の殻をちよ  
つと早く割つて生まれて来てしまつた。まあいか、頑張つて生き  
み、なんて普通は出来なこのよ。未熟なまま殻から出でてしまつた  
離はね、死ぬしかな」の「

「……」

「あの子達はまだまだ未熟よ。籠の外に、出るべき時ではない」

「……ふつ

と、彼女が小さく笑つた。

思わず田を丸めてしまつ。

彼女が笑うといふなんて、いつぶりに見たかしら？

「甘いな……お前がそこまで過保護なことをするなべ  
るべにな」

そりや、あ……。

確かに過保護かもしれない。

でも、仕方ないじやない。

だつてあの子達は……あの子は……。

「……いいでしょ、別に。甘くて悪い?」

「いい親だな」

「……それ、からかってるの?」

「さて」

あー、表情が読みづらいわね。

「……我は、他の者達が甘すぎるのではな。少しは厳しく行こうと思つている」

「へえ。スバルタ?」

「ああ。死ね、とまでは言わん。だが、この程度のこと乗り越えられなにようならば、いずれ折れる。だったらまだ、我らの目が届くところで折れるのも一つだらう?」

「……一理あるけれどね」

でもやはり、私は危険な賭けのような真似は避けたい。

……大切、だもの。

「でも、不安ね」「……なにがだ?」

田を覗く。

つい先日、見かけた少女のことを思い出す。

彼女が選び、特別クラスに入れた少女。

「あの子は、一体どんな役田を負っているの?」  
「棘ヶ峰緋色、か」  
「もう会った?」「ああ。この間、私の店にな.....ナワエが連れてきた  
「そういえばナワエ、あなたのところの行きつけだったわね。どう、  
喜んでいた?」  
「ああ。美味しい、と言つてくれたよ」

表情は薄いながらも、彼女は嬉しそうにした。

ほんと、料理好きよね。

「で、あんたは知ってる? あの子の役田」  
「さて.....な」  
「やつぱりか.....」

思わず溜息がこぼれた。

空を仰ぎ、これからのことを考える。

「人間つて凄いわ」

「なんだ、いきなり?」

「だつてそう思わない? 人間つて、今の私達と同じようにいろいろ苦腦しながら、子を育てて、代を重ねてきたのよ? 実際同じところに立つたら、もう信じられないわ。人間つて、ほんと凄い」

「……確かにな」

そういうえば、彼女も人間じゃないんだつけ。

元は……破壊神かなにかだつけ?

天界とか魔界とかいろんな世界をまとめて破壊しようとした、とかなんとか言つていたよな……。

私達は人間じゃないから、むしろ人間の凄さを今、実感している。

「……エリス、どこ行つたのかしらね」

ぽつりと呟く。

エリスが私達の前から姿を消して、もう何年経つたろう。

十年は余裕で過ぎてたわよね。

「……なんだか、やな予感がするわ」

「奇遇だな、我もだ

「……はあ」

憂鬱な溜息が出た。

振り絞った力はっ！

虫が、這う。

ぞわり、と。

全身の肌が粟立つ。

それは恐怖からか、嫌悪からか……あるいは、そのどちらもか。

地平線までを埋め尽くす、黒い虫。

気持ち悪いとか、もうたまらんのではない。

なんて言ひか……なにもかもが、汚されていくような、そんな気持ち。

「他所見しそう」

そんな声が聞こえた。

どん、と。

胸から腕が生えている。

振り向けば、その顔があつた。

……前の夢と同じ。

どうして、あなたが……？

「そんな甘く見られては、興ざめ。あなたは最大の壁。私が私を得る為の、最大の障害。そんなあなたは、こっちだけ見ていればいいの」

言いながら、彼女は私の胸を引き千切る。

「それが出来ないと呟つなり、ねえ……」いつも、少し他所見してしまうわよ？」

虫が蠢いた。

波打ち、それは巨大な塔のよつに盛り上がる。

+

「……またそんな感じの夢ですか

目が覚めて、とりあえず乾いた笑いが出た。

「あー……なんなんだろ、これ」

「んな夢を見る理由に、私は心当たりがない。

敷いてあげるなり、やつぱり……の人、かな。

「……」

ふと、枕元に置いてある田覚まし時計に手をやる。

「……は？」

えつと……あれ？

んー？

田覚ましをガン見する。

「……」

ふむ。

なるほど。

これは、あれですね？

あれですよね。

「 もう試合始まつとるやんけ！」

遅刻だああああああああああああ！？

+

「おはよ、緋色」

全速力で私はナユタ達がいる観客席に到着した。

起きてから大体四十秒である。

頑張った。

私超頑張った。

朝風呂含めて四十秒だもんね！

ふはは！

能力の無駄遣い？

能力なんて使わなくちゃ意味ないんですよ！

「寝坊ですか？」

「なんのことかしら？」

ソウの言葉にとぼけつつ、席に座る。

観客席には、スイ以外の姿がある。

つまり今日はスイの試合ひとつですか。

「で、今はどんな状況かな」

舞台上に目を向ける。

そこで、思わず目を丸めた。

「…………おひへ。」

なんていうの？

えつと……。

スイの試合相手……お坊さん、だった。

「シドウ=カンザキだと言つたか……なかなかだぞ」「しかし……これは、どうなるのでしょうかね」

アイリスとエレナが、そう言った。

1

スイが叫びながら、常闇で出来た爪を振り下ろす。

しかし爪は、相手シドウ君、もといシドウさんは通用しなかつた。

なんか坊さんを君付けは気が引ける。

「喝！」

そんな声とともに、常闇の爪がシドウさんに噛んで前に押し飛ぶ。

「ちつ」

舌打ちをして、スイは空中にいくつもの水の球を生成すると、そ

れらを一斉に射出した。

一つ一つが人間なんて簡単に消し飛ばせるような威力を秘めたものだ。

だが。

「ふんー。」

シダツさんが数珠を持った手を振ると、それだけで水は蒸発する。

「これも駄目……」

じゅやらスイの態度からして、これまで何度も攻撃は無力化されているっぽい。

……ただ、一つ疑問がある。

……………シダツさんは攻撃しないのだ？！

「…………お主、そろそろ棄権してはくれぬか

シダツさんの声、めっちゃ渋いやん。

わすがお坊や。

いやお坊さんだから泣こ声だとは限らないけれど。

「拙僧はローゼンベルク殿の氣概に心じ、この場に参上した。が、女人を傷つけことなど到底出来ることではない。故に、お主が棄権してくれれば、全て丸く収まるのだが」

「馬鹿、言つてゐるんじゃなこわよー。」

スイがさりに攻撃を加える。

つていうか、なんでだろ?。

あのお坊さんや」はかとなくカツコみく見えてるんだが。

女の子を傷つけないと、紳士じやん。

「……」

シドウセイが溜息を吐く。

「お主の攻撃は拙僧には効かぬ。諦めてはくれぬのか?  
「聞けない話ねー。」

諦めず、スイは攻撃を加え続ける。

「……であれば、仕方あるまい。拙僧、ローゼンベルク殿の信念を裏切ることとは出来ぬゆえ、……今一時、鬼に変じよつ」

言つて、シドウさんが手を合わせる。

と、シドウさんの身体が赤く輝いた。

おおつ？

光は奔流となり、シドウさんの姿を隠す。

スイがシドウさんから距離をとつた。

……じじどその行動をとるといふことは、やはりスイはまだ、使えるようになつていないのである。

光があわまつてゆき、ゆっくりと輪郭が浮かび上がる。

……え。

それは、なんと云つが……うん。

鬼、だった。

比喩表現でもなんでもなく、鬼だった。

全長三メートルはある、むきむきボディ。

肌は真っ赤で、頭からは一本の角が生えている。

腰には獣の毛皮のようなものを巻いていた。

手には、巨大な刀が一本。

……マジっすか。

「今からでも、遅くはない。棄権せぬか

低く響く声が、鬼の口から出る。

「……断るわ

言いながら、スイが常闇の翼を胸中に広げる。

「――」

スイが飛び出す。

「《顯現》には、《顯現》でしか抗えぬ。これは絶対だ」

「そんな絶対、覆してやるわよー。」

鬼を、常闇が包み込む。

「ふんー。」

けれど……その闇を、鬼の刀が薙ぎ払つた。

「はああああああああああああああああああああああー。」

鬼の号砲が空を揺れ立つた。

シドウさんは刀を高く掲げる。

すると、空が急に曇り始め……曇天から、雷が降り注いだ。

雷は、スイへと襲いかかる。

「つ……ー。」

かろいじて避けるスイだが、雷は止まず、次々に降り注ぐ。

「いや、の……！」

スイの手から、水の槍が空に向かって放たれる。

雲天に巨大な穴が穿たれた。

しかし、すぐに穴は埋まってしまう。

ついに降り注いだ雷の一つが、スイの身体を打つ。

「う……！」

スイの身体が大きくよろめく。

けれど、倒れなかつた。

スイは未だ、立つたいる。

「加減したとはいえ、よく立つていられるものだ

感心したようにシドウさんが言ひ。

「うちは、連日エレナにしごかれてるのよ……」この程度、ビリッてことないわ！」

スイがシドウさんに襲いかかる。

……心がこゝで、そこまで真っ直ぐに立ち向かえるのだな。

勝てないと、スイ自身分かつていてるだろ?に。

それなのに、どうして？

決まつていた。

それがスイだからだ。

三一七

感動と言えはしのたゞ、かうの氣持ちを

スイが、すごく大きな存在に見えた。

もしかしたら、シドウさんを破る」とも不可能ではないのです、なんてふうにも思えてくる。

でも、現実は残酷だった。

スイが全力を込めて振るった常闇の爪は……鬼の肌に傷一つつけ

られない。

「……よくやった、と称賛しそう。他の何者がお主をけなそつとも、  
己がお主の武勇を知つてゐる」

鬼の腕が、スイの身体を驚掴みにする。

「ぐつ……！」

「終いだ」

徐々に鬼の手に力がこもる。

「つ、勝手に、決めるんじやないわよー！」

その時、スイの身体が淡く輝いた。

「ぬ　つ！」

「死ぬほどしごかれで、成長一つないわけ、ないでしちゃうがっ！」

一滴の水滴が弾丸となつて、シドウさんに放たれる。

これまでの攻撃と比べれば、なんてことはない。

けれど、シドウさんはスイを手放し、全身に力を滾らせた。

何故ならそれは……不完全ながらも《顕現》の性質をもつた攻撃なのだから。

私の大鎌と同じだ。

スイはただあの一滴を、『顕現』させることに成功したのだ。

貫

敵を倒す、  
と

そう信じ放たれた水滴を、シドウさんは真正面から両手で受け止めた。

刹那。

世界が揺れた。

そう錯覚するほどの衝撃が起つる。

କୁଣ୍ଡଳ ପାତାରେ ଦେଖିଲା ଏହାର ମଧ୍ୟରେ କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା

シドウセーの唸り声。

直後。

シドウさんの両腕が、消し飛んだ。

だが、それは水滴も同じ」と。

「へへ……」

スイが悔しそうに表情を歪める。

「……驚いたぞ」

シドウさんが両腕を再生させながら、ゆっくりと姿勢を正す。

「今想い……なんと重きことか。それでもまだ不完全とは……恐ろしいものだ」

鬼の口元には、笑みが浮かんでいる。

「ま」と、素晴らしい想いであった

「それは、光栄ね」

「返礼に、己もまた、同等以上の想いで答えねばならぬな

「……」

シドウさんがゆっくりと刀を振り上げる。

「θλύπη」

「……ええ、来なさい」

スイは最後まであきらめなかつた。

全力を發揮せんとするシドウさんに、真正面から立ち向かう。

「ウチの社員は皆、お仕事の上手さと、人間としての良さを重視する。だからこそ、お仕事で困ったときに、必ず誰かが手を貸してくれる。」

シドウさんの雄叫びがあがり……刀が、振り下ろされる。

ただそれだけ。

けれどその刀の動きは、とても洗練され……美しかった。

対し、スイは水の盾を作り出すが、盾は一瞬で消滅する。

振り下ろされた刀から放たれた力の塊が、スイを飲みこんだ。

## 悔しがるのねー

田を開く。

天井が見えた。

「……」

あ、そつか。

どうして自分がここにいるのか、把握する。

記憶には、はっきりと刻まれていた。

『顕現』を前に、凌駕され、倒された瞬間のことが。

どうやらあの後、保健室に運び込まれたらしく。

「……」

身体を起します。

節々が痛かつた。

……まったく、堪らないわね。

「ほんと……堪らない」

保健室には、誰もいないようだつた。

ゆうくじと、天井を仰ぐ。

「……はあ」

溜息を吐いて、肩から力を抜く。

「負けた、か……」

それなりに努力したつもりだった。

勝つつもりだった。

でも、そう簡単じゃなかつたみたいだ。

当然と言えば、当然だけれど。

……そりやね。

私は、弱い。

それは認めなくてやいけないとなのだから。

情けない」とだ。

の人達の娘がこんなものだなんて……ほんとに、情けない。

こんな私の姿を見たら、の人達はなんと罵つだらう。

父ちゃんは……うん。

さひと、頭に手をのつけ、甘やかしてくれるんだうな。

でも母ちゃん……考へたくもない。

細切れか挽き肉か……どうかにしても樂しい未来はないわよね。

「……はあ」

また、溜息が出る。

「……くや」

「スーアー、そろそろ起きなよー。」

その時、保健室の扉が勢いよく開いた。

+

ところわけで、じつも緋色です！

「ほひ、皆のアイドル緋色やんの登場だよー。」

「……」

ベッド上半身を起こしたスイが、ぽかんとしている。

つい……おお。

「起きたんだ、スイ」

「ええ、今さつき……あなたはどうしてここに？」

どうして、って……。

「薄情なこと言つなよ。スイが倒れたら看病くらこするに決まつてるでしょ？」

「……」

スイが、少し驚いたような顔をする。

「なに驚いてるの？」

「いえ……うちの家族つて、ほら。父親以外は、基本的にスバルタ  
じゃない?だから、ちょっとね」

「……ああ」

うん、納得。

だつてほら。

現に今だつてアイリスとエレナは「大丈夫だ!」って言ひて訓練  
に行つちゃつたし。

それに、スイとアイリスのお母さんが同じかどかはまだ不確か  
だけれど、例え違つたとしてお……イリアさんに並ぶような人だ、  
その性格が普通だとは思えない。

「一つ聞いていい?」

「なに?」

「スイ達のお母さんつてさ……イリアさん?」

聞くよつな」とじゃないとは分かっていても、やっぱり氣になつ  
てしまつ。

「別にそこまで聞きたいわけじゃないから、答へなくていいけど」  
「別に隠すよつなことでもないわよ」

スイが苦笑する。

「私達の母親は、三人が三人とも違うわ」

「へえ……やつぱり。顔立ちとか、あんまり似てないもんね」

「そうね。私達姉妹は、全員母親に似て生まれてきたから」

なるほどなるほど。

「となると、スイのお母さんもお綺麗なわけだ」

「……我が母ながら、確かにその通りよ」

やつぱりね！

つていうかこんな可愛い娘を生んだ母親が綺麗じゃないわけない。

偏見かもだけど。

「スイのお母さんは、どんな人なの？」

「イリア母さんと真っ向から喧嘩する人よ」

「……オケ、把握した」

もうそれ以上はなにも言わなくていいです。

私の態度に、スイが微笑する。

「あなたも、絡まれないよつて冗をつけなさい」

「もちろんですとも」

……あれ？

これ、なんかフラグじゃね？

……氣のせい、だといいなあ。

うふふふふふ。

氣のせい、だよね？

だよね？

だよね！？

「誰かそつだと言つてええええええええええええええええ！」

「……？」

突然身もだえ始めた私に、スイが怪訝そうな視線を向ける。

「……失敬、気にしないでくれたまへ」

「え、ええ……」

とつあえず『氣をつけよ』。

スイの母親がどんな人かは知らないけれど、スイに似てるそりだ  
し、うむ。氣をつけよう。

……あれ？

今なんか、ちょっと引つかかるものが……。

なんだろ？

んー？

……分からないな。

分からぬといつてことは、きつとビリでもいいことなのだから。

「それよりスイ。身体の調子はどう？」

「ん……まあ、問題ないわよ」

スイが手を握つたり開いたりする。

どうやら大したことはないらしい。

流石坊さん、手加減はちゃんとしていたらしく。

まあしてなかつたら今頃スイが消し飛んでるか！

笑い話にならないな。

「……でも、悪かつたわね？」

「ん？」

「負けちゃつて」

スイが少しだけ氣まずそうな顔をする。

「ああ……」

そんなことか。

「気にしないでいいよ」

「気にしないで、つて……この負けは、小さくないわよ？」

「そうかもね。でも、それでもあと一回は負けられるんだよ？」

で、

一回勝てば私達の勝ち。状況はこっちがまだ優勢だし

「それでも……やつぱり……」

意外とスイって、『うごう』と氣にする性質なんだ。

言っちゃなんだけれど、ちょっと意外だ。

「いみんなさい」

スイが、頭を下げる。

……頬を搔ぐ。

そんなこと、しなくていいのに。

なんて答えたらいいのか、私は。

「……ん」

なんだかもう言葉が見つからなかつたので、いつそ抱きしめてやつた。

「え？」

スイの少し驚いた声。

「問題なしー！」

断言する。

「小夜がいる。アイリスがいる。ナユタがいる。私だつている。私達が……そんな簡単に負けると思つ?」

「そうは……まあ、思いたくないけれど」

「思いたくないって、じゃあ思つとるんかい」

「……だつて緋色と、それにあの馬鹿姉は《顯現》が出来ないじゃない」

「ぐつ……」

痛いとこひついてくるなあ。

「でも、それでも茉莉と小夜がいるよ。あの一人が一勝してくれればいいんだから」

「もし万が一、どっちかが負けたら?」

「その時は私が勝つとも」

「……その自信、どつから来るのよ」

「 もう」

にやりと笑う。

「私の胸の中から」  
「くさい台詞。恥ずかしいわね」  
「恥ずかしいとなー?」

なんて言い草だよ！

「……でも、そつか……」

小さく、スイの笑い声が聞こえた。

「わー……こつまでくつついてんのよー。」

スイが私の身体を引きはがす。

「ああっ、そんなご無体な！ もうちよい！」

「駄目。さつさと離れなさい、この変態」

「そんなバナナ！」

私は紳士 もとい淑女だ！

+

「……仲、いいな」

「羨ましいんですか？」

扉の隙間から、姉さんが病室の中を覗き込んでいる。

私はそんな姉さんの姿を見ていた。

「……別に、そうじやない」

そんな不満そうな顔で言つても説得力はありませんけれどね。

……ちなみに。

「それって、どっちを羨んでるんですか？」

「む？」

「……いえ。なんでもありません」

この姉には、少し変化球の質問すぎましたか。

かといってストレートに聞くのも気がひけますし。

今は、このまま見守りましょうか。

……。

今は、ですけれどね。

ふふ。

勝敗はつ！

てつてれー。

端でも、『りんくださこ』の観客の数を。

誰もが今日の戦いを一日見よとい、会場に押しかけて来ています。

そんな多くの観客の視線の先、選手が入場してきました。

さて、今回の組み合わせですが、まずゼファー氏サイド。

曰く、皆の女王様！

どんどんぱふぱふ。

その口元に浮かぶ妖艶な笑み！

鋭い目つき！

ノルマニカ

踏まれてー。

はつ。

べ、別に私マゾじやねえし！

むしろサドだし！

でもやつてもうえむならマジでもげふんげふん。

さて、気を取り直して。

次は、特別クラスサイドの選手ですが……。

来ました！

風紀委員会外特別支援殲滅執行部」と、学園の断罪者!!

違反行為者は悪即斬！

そのミスティリアスなど「る」に癡れる！

れあ距れん。」——緒に!

小夜ちゆわああああああああああああああああああああああああ

「ふう」

疲れた。

もうこれやめよ。

さてさて。

といつわけ……今日はどんな感じになるかな。

+

「さて……それじゃあ、始めよつかねえ」

ユリアさんが、軽く首を回す。

「《顯現》」

と、ユリアさんの姿が変化する。

その身体が光の粒子に変わったかと思つて、再構築。

大きく胸元など肌の露出した、赤い服装。ところどころに赤い羽根の装飾がされている。

そして、肩からは、これまた赤いマントが靡く。

手には、一本の鞭。

……鞭かあ。

………… むつと、妄想が暴走して鼻血が。

いけないいけない…… あ、ティッシュ？ ありがとう。

「こきなりですか」

呆れたように小夜が言つ。

「こきなり、や。もう別にこれは観客に魅せる戦いじゃないんだ。  
わざわざ連中の理解出来る範囲の戦いをするこしたあ、ないだりうへ。」

「それはそうですけれどね」

「あなたは《顯現》しないのかい？」

「……」

そうだ。

小夜つて、確か《顯現》出来るつて話じやなかつたつけ？

なのに、ビうじて…… 普通のままでいるの？

「あまり、力を見せつけるのは趣味じゃないので」

「くえ……つまり、私相手には《顯現》なんていらないってかい？」

「さて」

小夜は、静かに肩を竦める。

「……なら、確かめをせんじようかねえ。あんたがそれだけの言葉を吐くに値するか、どうか！」

ココアさんが小夜に向かつて飛び出す。

飛び出して、小夜の身体が吹き飛んだ。

と、思った。

けれど……。

「行つたでしょ」<sup>ハハ</sup>。

小夜は、ココアさんが振るひた鞭を、素手で受け止めていた。

「な……！」

ココアさんが田を見張る。

「見せつけられるのは……ヒ。別にひけらかすのではないレベルでなら

ば、ちやんと相手をしてあげますよ」

言いながら、小夜は鞭を引っ張り、コリアさんの身体を自分に寄せる。

「運が悪いですね、私に当たるなんて」

コリアさんの身体が、舞台の端まで吹き飛んだ。

巨大な土煙が立ち上る。

ビ、ビッシュ……。

『顕現』しないで、そんなこと、できるものなの?

「う……。」

土煙の中から出たコリアさんも、理解し難そうな顔をしていた。

「教えてあげましょつか」

「うーーー！」

気付けは。、コリアさんの背後に小夜はいた。

「《顯現》は、ただ《顯現》する」ことが全てではないのですよ」

小夜の手がゆっくり持ちあがる。

「そもそも、その考えが違う。《顯現》しなければ勝てないとか、《顯現》すれば勝てるとか……《顯現》とは想いの力。既に、《顯現》という枠を作っている時点で、あなたでは、私には勝てない」

再び、コリアさんの身体が吹き飛ばされる。

飛んでいくコリアさんを小夜が歩きながら、けれど同時に留まりぬ速度で、追う。

「《顯現》しなくても、《顯現》と同様の効果を得られるようだ」《顯現》する。《顯現》せざに《顯現》してくる。その矛盾を通してともまた、《顯現》の形の一つなんですよ」

……ええっと？

じゅじゅ？

「つまり、《顯現》とこつものは、《顯現》という変化ではない。

変化などより自分らしい自分を表現した結果であり、別に自分らしさなど出さずとも《顯現》は完了させることが出来るのですよ」

……むひ。

とりあえず、《顯現》はしなくても《顯現》の効果は得られる、みたいな解釈でオーケー？

「……なんだい、そりゃあ

ユリアさんから、極大の紅蓮の閃光が放たれる。

閃光が小夜に喰らいつく。

だが、小夜に触れた瞬間に閃光は弾け飛ぶ。

「意味が分からんねえ……」

「理解力が低いのでしょうか？」

小夜が辛辣なことを言いながら、お返しとばかりに青い閃光を放つ。

ユリアさんも再び赤い閃光を放ち、青と赤の閃光が幾重にも空中でぶつかり合つ。

おー、幻想的な光景ですね。

「これじゃ、埒が明かないね……仕方ない。少しばかり、本気を出すよ!」

コリアさんが地面を蹴る。

すると、コリアさんが小夜の背後に現れる。

「つまりは、『顯現』してる相手と戦っていると思つてやれば、なんの違いもないことだな!」

恐らくは最大の力を込めて、コリアさんが鞭を振り下ろす。

「その通りです……が、あまり私を舐めないよ!」

振り返りざま、小夜がどこからか取り出した銀色の剣で鞭を弾く。

そして、もう銀の剣を持つ方とは逆の手から、一條の光を放った。

光はコリアさんの身体を消し飛ばす。

が、コリアさんはすぐに再生する。

「……なかなか重いね」

「それはどうも。今をくらつて挫けないあなたも、まあ、なかなかではないですか？」

小夜が、さらに閃光を放つ。

幾条もの閃光は様々な軌道を描いて、ユリアさんに襲い掛かる。

それらを回避しながら、ユリアさんは鞭を小夜に振るう。

鞭の長さは、自由自在に変化する。

小夜は的確に鞭を剣で弾く。

んー、拮抗してゐなあ。

……あれ。

そこんど、とあることに気がつく。

小夜の腕から、僅かに光の粒子が零れていた。

あれは……。

「つ……」

小夜自身もそのことに今気が付いたようで、僅かに動揺を見せる。

「セレーナー」

その隙をついて、コリアちゃんが鞭を振るひ。

これで決める気なのだろう。

見ているだけで背筋が凍るほどの中を感じさせる一撃。

けれど。

「……時間」

小夜は、それを簡単に受けとめた。

否。

受けとめたのではない。

鞭が、消滅したのだ。

「は？」

「コリアさんの口から奇妙な声が漏れる。

「時間、切れ、ですね」

小夜の手から剣が消える。

「今……なにをしたんだい？」

「さあ」

理解できなかつた。

私だけではない。

ゴリアさんもまた、私と同じのようだつた。

『顯現』してくるコリアさんが、だ。

つまり、だ。

小夜がなにをしたのか理解できないところとは、コリアさんの『顯現』を、想いを上回る行動を小夜がしたところと。

それはすなわち、小夜がコリアさんよりも強い、ところに他ならない。

コリアさんの顔に冷や汗が浮かぶ。

これは、勝つた。

そう確信した。

のに。

「棄権します」

小夜が、そう告げる。

……へ？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6479k/>

---

学園世界！

2011年10月8日20時23分発行